

ベトナム漢墓ヤンセ資料の再検討

A Re-examination of Han-style Tombs in Vietnam through the Olov Janse Collection (1938-1940)

宮本一夫・俵 寛司

①調査の経過と目的

②漢墓出土陶器

③陶器の型式学的検討と年代観

④漢墓出土銅銭

⑤漢墓出土銅器・鉄器

⑥漢墓の墓室構造の変遷

⑦まとめ

【論文要旨】

ベトナム漢墓ヤンセ第3次調査による墓葬単位の一括遺物の比較から、灰釉壺と灰陶甕を中心に型式学的な変遷を捉え、フーコック、マントン1A・1B号墓、ゴックアム1号墓、ビムソン2号墓、ビムソン3号墓、ビムソン7号墓、ビムソン10号墓といった変遷を想定した。さらに建和三年(AD149年)銘灰釉壺、嘉平年(AD172~178年)紀年銘磚墓出土灰釉壺、広州漢墓5080号墓副葬陶器との型式学的な比較から、これらの漢墓が2世紀前半から3世紀前葉にかけてのものであることを考え、この段階の詳細な年代観を確立することができた。さらに、副葬陶器に共伴する五銖銭の型式変化や粗悪化は、陶器編年に対応しており、陶器編年の正しさを保証するものとなった。さらにマントン1A号墓を中心とした青銅容器の年代観も陶器編年と矛盾するものではなかった。こうしたベトナム漢墓の編年の確立は、漢の郡治が作られて以降にみられる在地文化の変容や漢の支配構造など考える上での基礎的な年代軸となるであろう。

さて、灰釉陶壺にみられるベトナム北部から南中国までの共通性、さらには青銅容器や青銅鏡におけるこうした地域での共通性は、これらの地域を共通とした流通圏あるいは共通のイデオロギーが存在したことを示している。さらにベトナム漢墓から出土する青銅容器や灰釉陶は、ベトナム北部において独自の生産体系が構築されていた可能性が高い。また、墓葬構造の変遷で認められたように、2世紀中葉から3世紀にかけて認められる単券頂多室墓と後藏室の組み合わせはベトナム北部で在地的に発達したものである。2世紀後葉にはベトナム北部交趾郡・九真郡・合浦郡・南海郡を中心とした土蠻政権が漢王朝から独立して成立し、その版図を南中国(嶺南地方)にまで広げている。土蠻政権の成立は、ベトナム北部から南中国の共通した文化圏と、墓室構造や副葬陶器にみられるベトナム固有の地域性の確立が、その背景にあると考えられる。

①……………調査の経過と目的

スウェーデン人オロフ・ヤンセ（Olov. R. T. Janse）は、第2次大戦前ベトナム（仏領インドシナ）において3度の調査を行っている。第1次が1934～1935年、第2次が1936～1938年、第3次が1938～1940年である。第1次・第2次調査はフランス極東学院の主催によるもので、第3次調査はハーバード・エンチン研究所の研究助成によるものである。⁽¹⁾ヤンセが調査対象としたものの多くが、ベトナム北部のタインホアを中心とする漢墓やドンソン文化に向けられている。これらの資料は、漢代におけるベトナム北部土着の青銅器文化圏を漢が領域化し、漢の郡治を置くことによって、在地の文化の変容する過程を理解する上で興味深い資料である。こうした文化変容は対極的には朝鮮半島の楽浪郡との比較研究も可能であり、漢の支配ならびに地域社会の実体を理解する上でも興味深いものがある。しかし、これらの発掘資料は世界に分散して収蔵されており、その実体はヤンセが著述した中間報告および戦後出版された3冊の大部の報告書をみる他ない。⁽²⁾1960年代に後藤均平はこの報告書を評して、ヤンセ資料の価値を述べるとともにその資料の不完全さを指摘し、研究資料として整備することを説いている。⁽³⁾特に我々考古学者からみれば、発掘された遺物の写真はあ
るものの正確な図面が全くないことは、資料を利用するにあたって障害となっていた。後藤の提言にも関わらず、複雑な国際情勢とも関係し、その後ヤンセ資料を再評価する試みはなされていない。また、独立後のベトナム考古学の進展は目覚ましいものがあるものの、漢に領域化されたこの段階の資料については、現段階でも本格的な資料の公開があまり進んでおらず、一方ではその評価をめぐり、中越紛争のような歴史的・民族的問題のわだかまりも依然としてあることは否めないであ
る。⁽⁴⁾その意味ではヤンセ資料は今でもその資料価値が高いと言えるのである。

筆者の一人である宮本一夫は、1997年8月から1998年7月までハーバード・エンチン研究所（Harvard Yen-ching Institute）の客員研究員としてハーバード大学に滞在する機会を得た。この間、フランス植民地時代ベトナムの考古資料（史料）を調査中であった倭寛司より、ヤンセ資料がピーボディー考古民族学博物館にあるのではないかと
の照会を受けたのは、ハーバード滞在中後半になってからであった。しかしその実体を確かめたのは滞在余すこと1ヶ月を切った段階であった。それは1998年7月上旬のことであったが、ヤンセ資料が予想外に充実していることを確認し、その学術的な価値を再認識するに至った。⁽⁵⁾

現在ハーバード大学ピーボディー考古民族学博物館に保管されているヤンセ資料は、ヤンセの第3次調査のものであり、タインホア省の漢墓や窯跡を中心とする発掘資料である。調査終了後、発掘資料はハーバード・エンチン研究所に送られたが、収蔵スペースが手狭であったため、隣にあるセミティック・ミュージアム（Semitic Museum）に収蔵され、ここで荷が解かれている。1940年5月にはフォッグ美術館（Fogg Art Museum）で発掘出土品の展覧会が開催され、その後ピーボディー考古民族学博物館に資料が移されている。本博物館がヤンセ資料を正式に収蔵することになったのは1942年のことである。こうした資料収蔵の経緯のため、ピーボディー考古民族学博物館の全体的な資料の性格からみて、ヤンセ資料がいささか特異なものになっているのである。1963年にはヤンセ資料の一部優品がサイゴン国立歴史博物館（現ホーチミン市ベトナム歴史博物館）に返却

されたものの、大部分の資料はここに保管されており、その資料の量の多さと質の高さに驚かされたところである。しかもこれらの発掘資料は墓葬単位の一括資料であり、墓葬編年を行うにあたって基準になるものと予想された。そこでハーバード・エンチン研究所のベーカー (Edward J. Baker) 副所長に相談し、エンチン研究所から研究費を支給していただき、ヤンセ資料の再調査が可能になった。この再調査は、1999年3月28日から4月11日までの2週間、ハーバード大学ピーボディー考古民族学博物館で宮本一夫(九州大学文学部助教授、当時)、および指導学生であるところの俵寛司(九州大学大学院比較社会文化研究科博士課程学生・日本学術振興会特別研究員、当時)・濱名弘二(同大学院博士課程学生、当時)の3人で行われたものである。

1999年春の再調査ではタインホア省のゴックアム、ビムソン、マントン、フーコックの4つの漢墓群を中心に、発掘資料を系統的に実測する作業を行い、墓葬単位の一括遺物の陶器、青銅器・鉄器、銅銭などの遺物実測、写真撮影を基本的に完了することができた。これにより、漢墓の副葬陶器から型式学的な変化を把握し基礎的な時期変遷を確認することができた。すなわち墓葬出土の一括遺物をもとに型式学的手法による細かな変遷を示す陶器編年の確立である。さらに実年代に関しては、既に知られている「建和三(149)年」銘灰釉壺(ブリュッセル王立美術歴史博物館蔵)が、参考になると考えられた。このため、2000年7月2日・3日にはベルギー・ブリュッセル王立美術歴史博物館を訪れ、この「建和三年」銘灰釉壺の実測ならびにクレマン・ユエ・コレクションの資料調査を行った。クレマン・ユエ・コレクション⁽⁶⁾にはヤンセ資料と同じくベトナム漢墓資料が含まれているが、残念なことに出土地点が不明であり、ヤンセ資料のような一括遺物としての価値が見いだせなかった。

また、俵寛司によって、ホーチミン市ベトナム歴史博物館にハーバード大学ピーボディー考古民族学博物館から1963年に返却された資料が、現在に於いても無事に保管されていることが明らかとなった。⁽⁷⁾そこで、ヤンセ第3次調査資料のうち、ベトナムへ返還された資料の補完調査のため、ホーチミン市歴史博物館において2000年12月8・9日の両日、出土資料の実測・写真撮影を宮本一夫・俵寛司の両名によって行った。これによって、ヤンセ第3次調査のベトナム漢墓資料のほぼ全容が解明され、その成果の一部をここに報告するものである。

②……………漢墓出土陶器

オロフ・ヤンセがインドシナ第3次調査においてタインホア省で発掘調査した2～3世紀の磚室墓を主体とする墓群(以下単にタインホア漢墓と呼ぶ)のうち、今回再調査した16基の陶器資料を中心に以下説明を行う。これらの墓はビムソン15号墓を除くすべてがマウンドをもった磚室墓である。ゴックアム、ビムソン、マントン、フーコックの各墓群は、ベトナム北部のタインホア省に存在し、漢代における九真郡の範囲内に位置している。しかしこれらの墓群は地理的にかなり分散して存在しており、それぞれ墓群の被葬者集団は当然異なっている(図1)。そこで、こうした墓群において個別の墓単位あるいは墓室単位で発掘調査された資料を一括遺物として認識し、それぞれの器種の把握に努めた。そしてそれらを相対的に比較することにより、それぞれの墓葬の時間軸の位置づけが可能となるであろう。対象とした墓葬は、ゴックアム1号墓、マントン1号墓、ビムソン

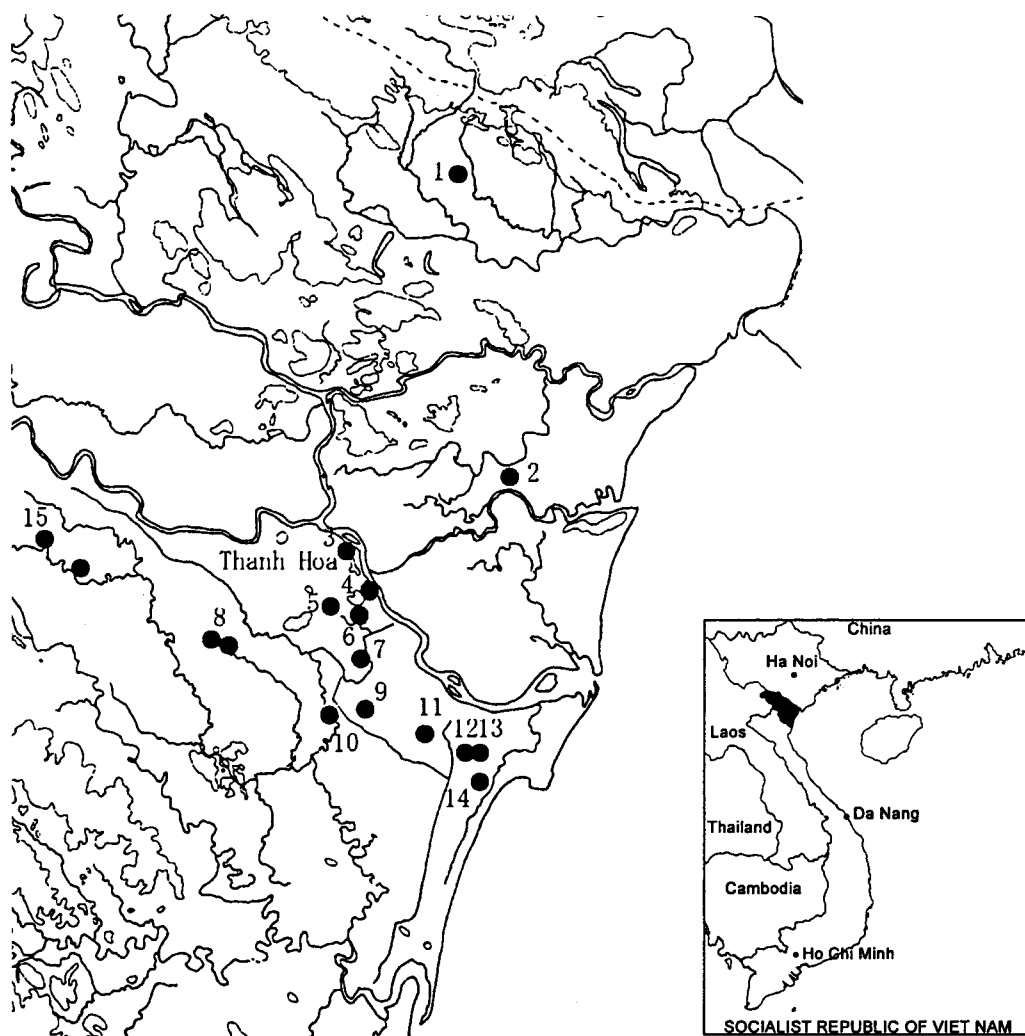


図1 ヤンセ発掘タインホア漢墓関連の主要遺跡地図(S = 1 : 500000)

地図中の各遺跡名称

- 1 Bim Sơn <Huyện Hà Trung> ビムソン (ハチュン県)
- 2 Lạch Trương <Huyện Hậu Lộc> ラクチュオン (ハウロク県)
Liên Hương, Hoàng Chung, Lục Trục <Huyện Hậu Lộc> リエンフオン・ホアンチュン・ルクチュク (ハウロク県)
- 3 Thiệu Dương <Huyện Thiệu Hoá> チュウズオン (チュウホア県)
- 4 Đông Sơn, Hàm Rồng <Huyện Đông Sơn> ドンソン・ハムゾン (ドンソン県)
- 5 Đông Tác <Huyện Đông Sơn> ドンターク (ドンソン県)
- 6 Đại Khố <Huyện Đông Sơn> ダイコーイ (ドンソン県)
- 7 Phú Cốc (=Marché aux bestiaux) <Thành Phố Thanh Hoá> フーコック (タインホア市)
- 8 Đông Sơn <Huyện Đông Sơn> ドンソン (ドンソン県)
- 9 Ngọc Am, Yên Biên <Huyện Quảng Xương> ゴックアム・イェンビエン (クアンスオン県)
- 10 Tam Thọ <Huyện Đông Sơn> タムト窯址群 (ドンソン県)
- 11 Thung Thôn <Huyện Quảng Xương> テュントーン (クアンスオン県)
- 12 Hoà Chung <Huyện Quảng Xương> ホアチュン (クアンスオン県)
- 13 Thọ Đãi <Huyện Quảng Xương> トダイ (クアンスオン県)
- 14 Nho Quan <Huyện Quảng Xương> ニョークアン (クアンスオン県)
- 15 Mân Thôn <Huyện Thọ Xuân> マントン (トスアン県)
Vực Trung <Huyện Thọ Xuân?> ヲクチュン (トスアン県近郊)

2・5・7・9・10・12・15号墓、フーコック1号墓である。またマントン1号墓は同一墳丘に主体部が2基併存しており、1A・1B号墓に分かれている。これらは図2～19に示すように、一括遺物としての価値が認められる。

本節ではまず主な器種名称および器種分類の概略を示しつつ、その考古学的位置付けについて触れることにする。なお、個々の遺物についての特徴は表1の観察表を参照されたい。また、文章中()内は図中番号と同一で、その他はハーバード大学ピーボディー考古民族学博物館、及びホーチミン市ベトナム歴史博物館の旧番号である。

A「陶器」

ここで述べる「陶器」の定義として、高温焼成によって比較的堅緻に仕上がった泥質胎土のものを全般を指しており、一般に言う所の「土器」とは区別する。第3次調査の漢墓遺物に限って言うと、「陶器」には壺類や鉢・碗・皿類など灰白色、灰黄褐色を呈する精良な胎土のもの(グループ1)と、甕類などの灰褐色、灰黄褐色、橙色を呈する陶質/瓦質のもの(グループ2/2')とが見られる。これらには無釉陶器、施釉陶器も含まれており、グループ1は施釉陶器の比率が高く、一部は明らかに「磁器」に近づいているものもある。ただし、ベトナム陶磁研究においてもしばしば問題となるが、ベトナムの「陶器」「磁器」を明瞭に区別することは、高温でも変化しにくい特有の胎土の性質からいっても実に困難であり、筆者の判断にも限界があるので、ここでは全て「陶器」に一括した。釉の種類に関しても細分可能ではあるが、残存率の問題もあり今回は省略した。それぞれの器種名称・分類については以下のとおりである。

A-1 壺類 壺類は第3次調査の各漢墓中に数多く見られ、また他のタインホア漢墓や北部・红河デルタ周辺の漢墓においても普遍的な器種群である。胎土は泥質で非常に細かく色調は主に灰褐色/灰黄褐色を呈しており(グループ1)、外面にスリップを塗布した上に薄い半透明釉を施す場合が多い(現在ほとんどは剥落している)。同様な特徴を持つ各種壺類は、前漢から後漢にかけての中国广西、広東、雲南、貴州方面に数多くの類例が認められる。したがって政治的領域は別としても、その技術的系譜が南越時期(紀元前207～111年:ベトナム北部では駱越=ドンソン文化前・中期段階に相当)にまで遡上する可能性は高い。

(1)「壺」:形態的には、口縁部をヨコナデ、沈線などによって擬似二重口縁状に作りだし、胴部上半が傘状に膨らむ点が大まかな特徴である。器面は非常に丁寧なナデ調整で仕上げるが、下半および内面に筋状に輪積み痕がしばしば観察される。肩部には通常沈線文が1～2本めぐり、胴部屈曲部以下は篋削りが行われ、屈曲部が明確となる。胎土は非常に細かく色調は灰褐色、淡灰黄褐色を呈し、中でもヤンセの報告ではしばしば「チョーク状」と表現されるような、灰白色もしくはピンクがかかる白褐色を呈する特徴的な胎土のものもある。これらは多くの場合、外面に白色ないし褐色スリップを塗布した後、薄い半透明釉を施し、まれに明るい青色や灰緑色を発するものもある(1・30・31・46～48・65・71～75・92～94・109)。

(2)「盤口壺」:口縁は盤口状であり、肩部には沈線文が施されているが、全体的な器形は不明である。胴部以下の形態・技術的特徴は「壺」と同様であり釉は青緑色に近い。第3次調査においてはヴクチュン1号墓から「盤口壺」が1点出土しているが、「磁胎」かつ「青磁釉」とも表現され、前記した「壺」とは若干形態的な開きがある(図19-115)。

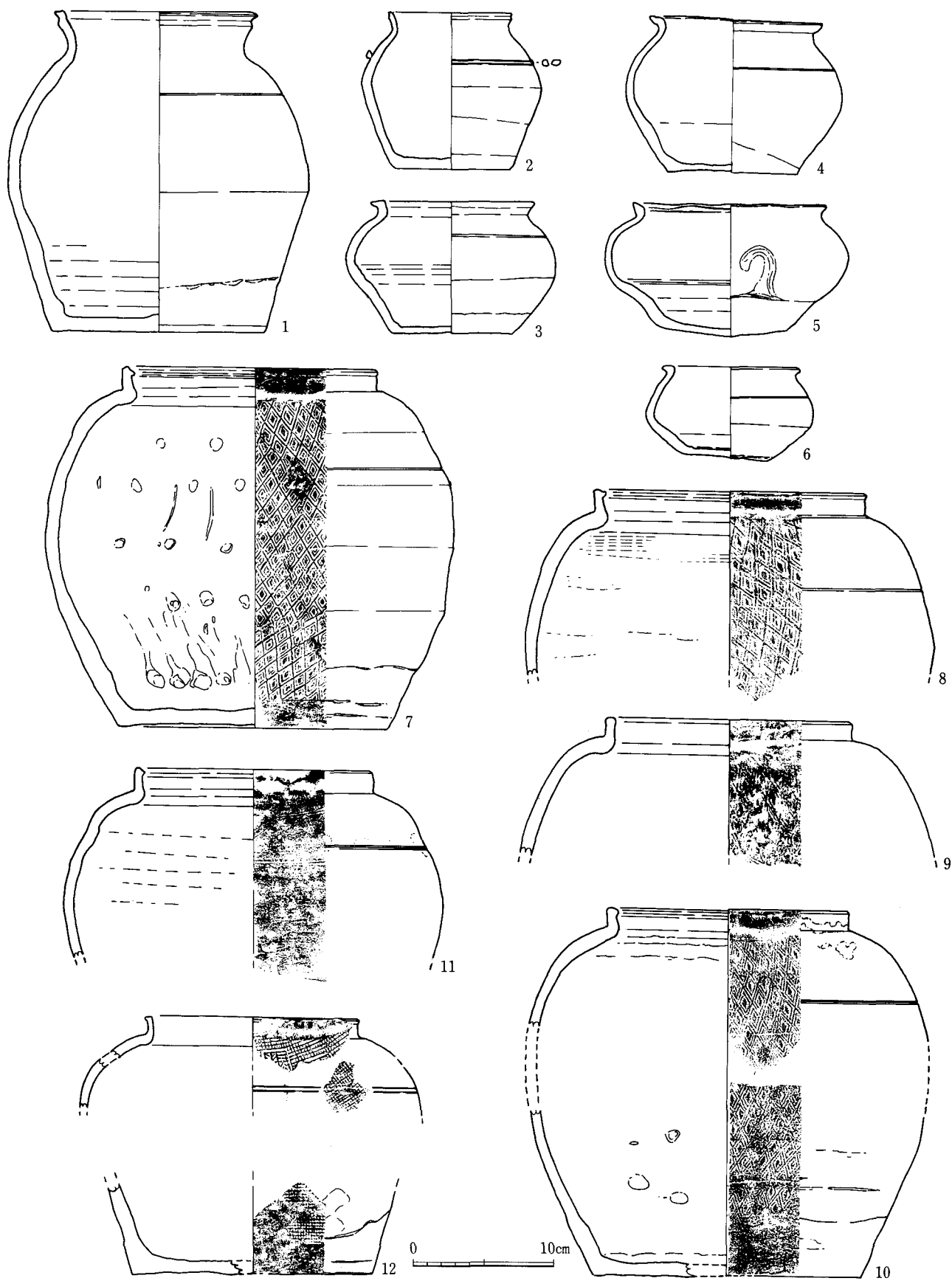


図2 マントンⅠA号墓出土副葬陶器

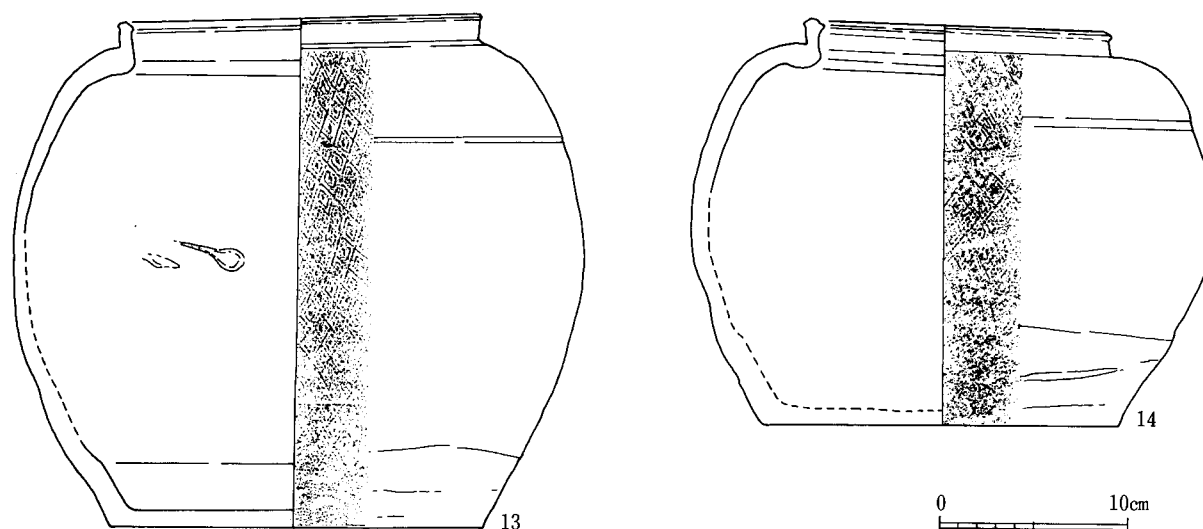


図3 マントン1号墓出土副葬陶器

- (3)「双耳壺」：器形的には複合口縁の「壺」の小型品（図2-2）と、短頸広口壺（図15-96）のバリエーションがあり、いずれも肩部に沈線文が2本と半環耳が2つ対称に貼り付けられる。
- (4)「四耳壺」：「壺」のバリエーションである。口縁部は端部が剣先状で頸部は比較的短く、肩部が非常に高い。肩部に沈線文2本と上に半環耳が4つ対称に貼り付けられる（図15-95）。
- (5)「小壺」：器高が約10cm前後と小型かつ胴部が球形ないし偏球形を呈するもので、「くの字状」口縁で無釉ものが一般的だが（図4-16・図7-40）、「壺」の小型品と捉えられるマントン1B号墓出土品（図6-38）やゴックアム1号墓出土品（図6-38）も一応この範疇に含めておく。なお他に「白磁」とおぼしき資料がビムソン7号墓から1点破片で出土している（図12-80）。
- (6)「短頸広口壺」：「壺」との共通点が多いが口縁部は短く胴部は低い「壺」（図12-76・77）。
- (7)「短頸小壺」：口径／器高の割合が非常に低矮で、器高も約10cm以下と小型である。頸部は短く外反しており、口唇部は時として断面三角形に肥厚する。肩部に沈線文が1本めぐることがある。「短頸小壺」は以下の特徴により「短頸小壺A類」と「短頸小壺B類」とに分類できる。すなわち「短頸小壺A類」は形態的特徴を除けばサイズの「小壺」に近いもので、施釉の場合多くは外面全体に及ぶ。一方「短頸小壺B類」は前者と同様な形態を持つものの、ほとんどが器高7cm以下と著しく低矮・小型であり、施釉の場合は重ね焼のため胴部下半にだけ釉がかからないことが多い。
- (8)「小口双耳壺」：頸部は短く口径は非常に小さい。撫で肩に胴部最大径は低く、底部は平底で糸切り離し痕が残る。肩部には半環耳が対称に2つ貼りついている。灰褐色の胎土に茶褐色スリップを施すが、現状では薄く施された釉の多くは剥落している（図15-96）。
- (9)「六耳大壺」：器高44.8cmと大型なものが、ビムソン3号墓から1点出土している（図8-52）。小さく窄まる口縁部と撫で肩、長胴の形態を有し、肩部上方の沈線文2本の周囲に半環耳を4

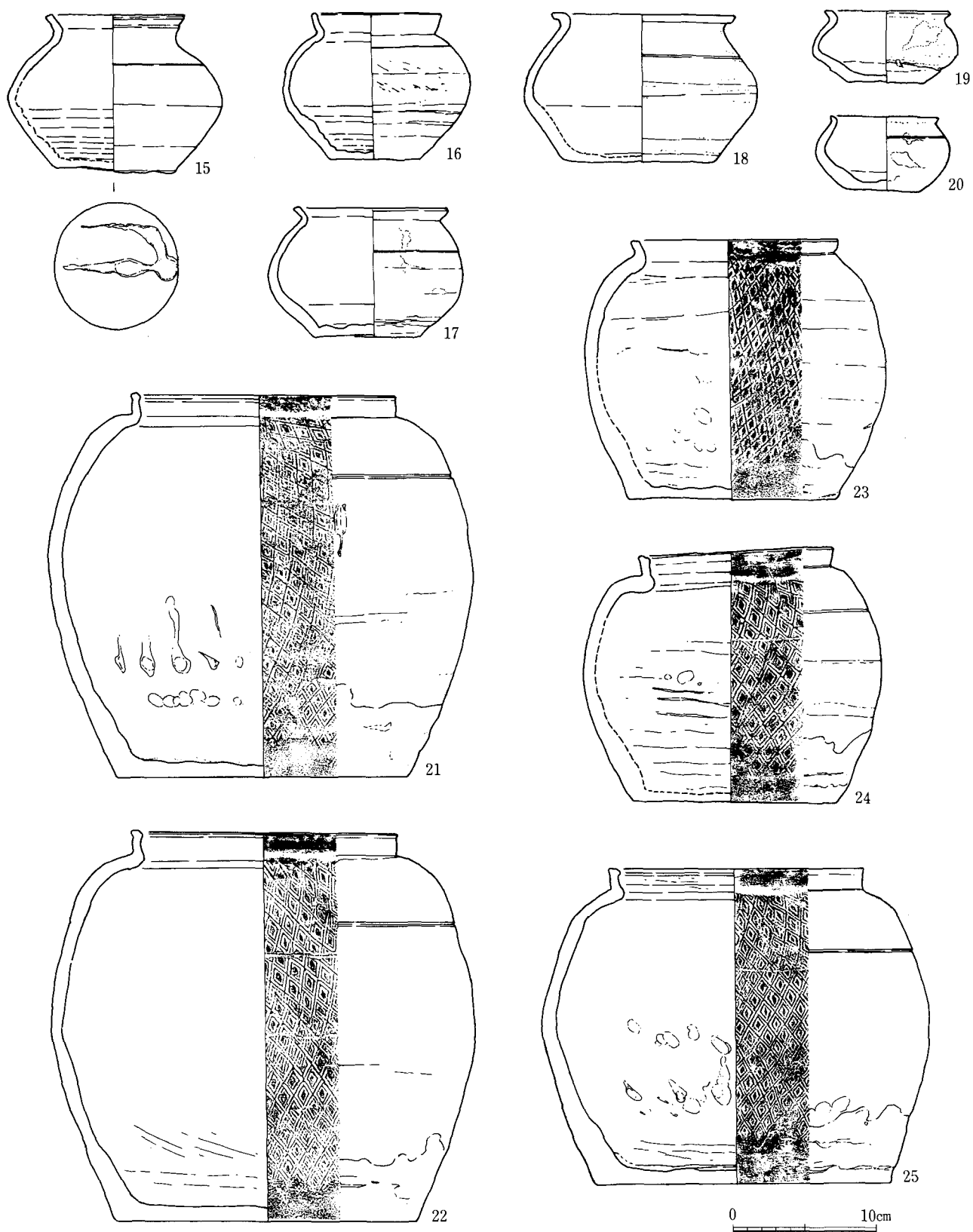


図4 マントンⅠB号墓出土副葬陶器

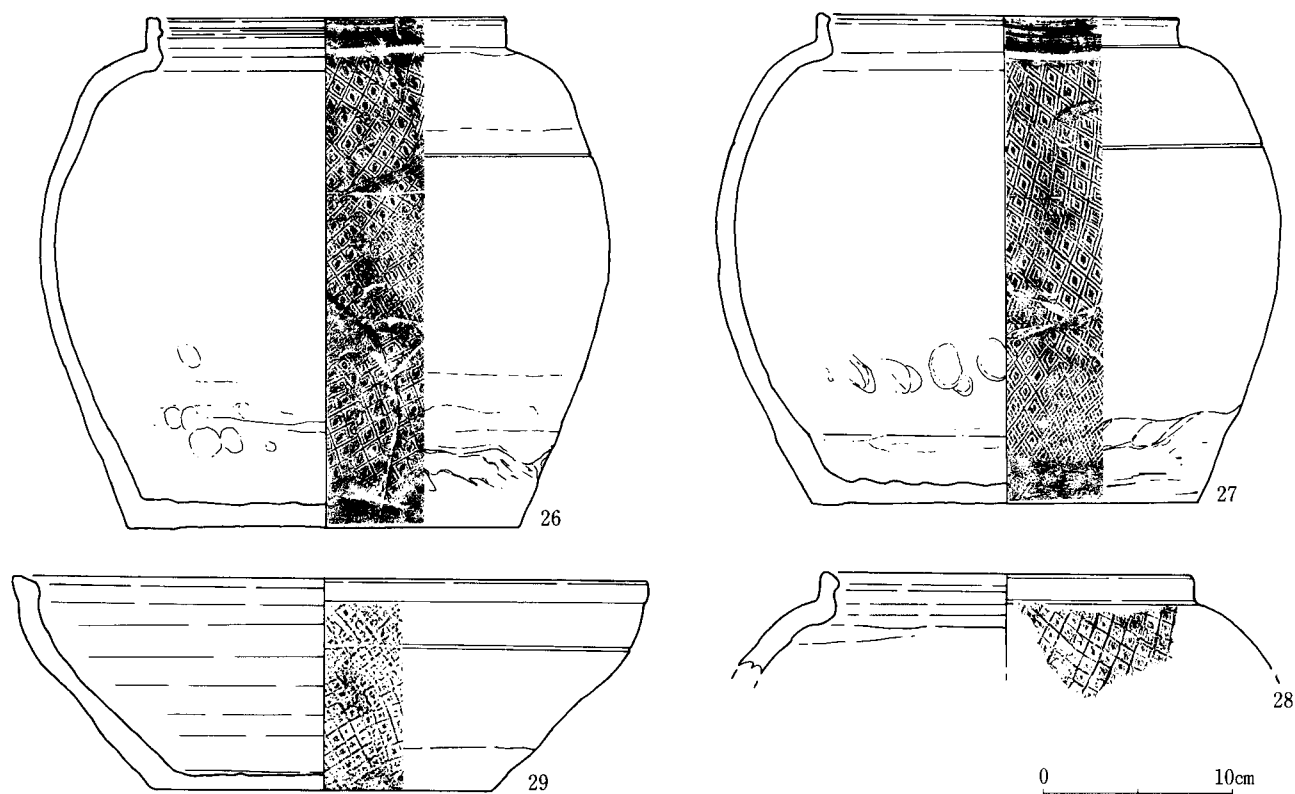


図5 マントンⅠB号墓出土副葬陶器

つ胴部中央に対称に2つ取り付けたものである。器面に茶褐色スリップおよび釉が施され一応壺類としたが、赤みがかかる灰褐色の胎土・焼成はグループ2に近いかもしれない。同様の器種は中国嶺南地方の漢墓中にも見られ、ベトナムにおいても「八耳壺」まで器形変化を遂げる特徴的な器種である。

A-2 甕類 甕類は通常還元焼成によって焼成されるため、一般に灰褐色、赤灰褐色を呈する須恵質ないし陶質の仕上りである灰陶（グループ2）に属する。中には焼成不良のためか灰黄褐色、明橙色を呈する瓦質状のもの（グループ2'）も認められる。施釉に関しては明瞭に全面施すものではなく、一部に自然釉と見られる灰緑色釉が見られる程度である。しかし何と言っても甕類を特徴付けるのは、胴部外面に施される菱形文、細格子文・網目状文、綾杉文、細斜線文などの各種印文（タタキ）であり、通常は下部をナデ消している。以上のような特徴を持つ甕類は、先の壺類と並びベトナム北部の「漢墓」において普遍的な器種群といえる。南中国嶺南地方に目を向ければ、この技術的系譜はやはり南越時期あるいは遡って春秋戦国時代の中国東・南部における「印文陶」にまで遡上するものといえそうである。ただし菱形文を施す甕類に関して言うと、これは紀元後2～3世紀のベトナム北部においてのみ存在するものであることにも注意を向けねばならない。

(10)「甕」：ここでの「甕」の定義としては、短頸で短く立ちあがる口縁部に特徴があり（いわゆ

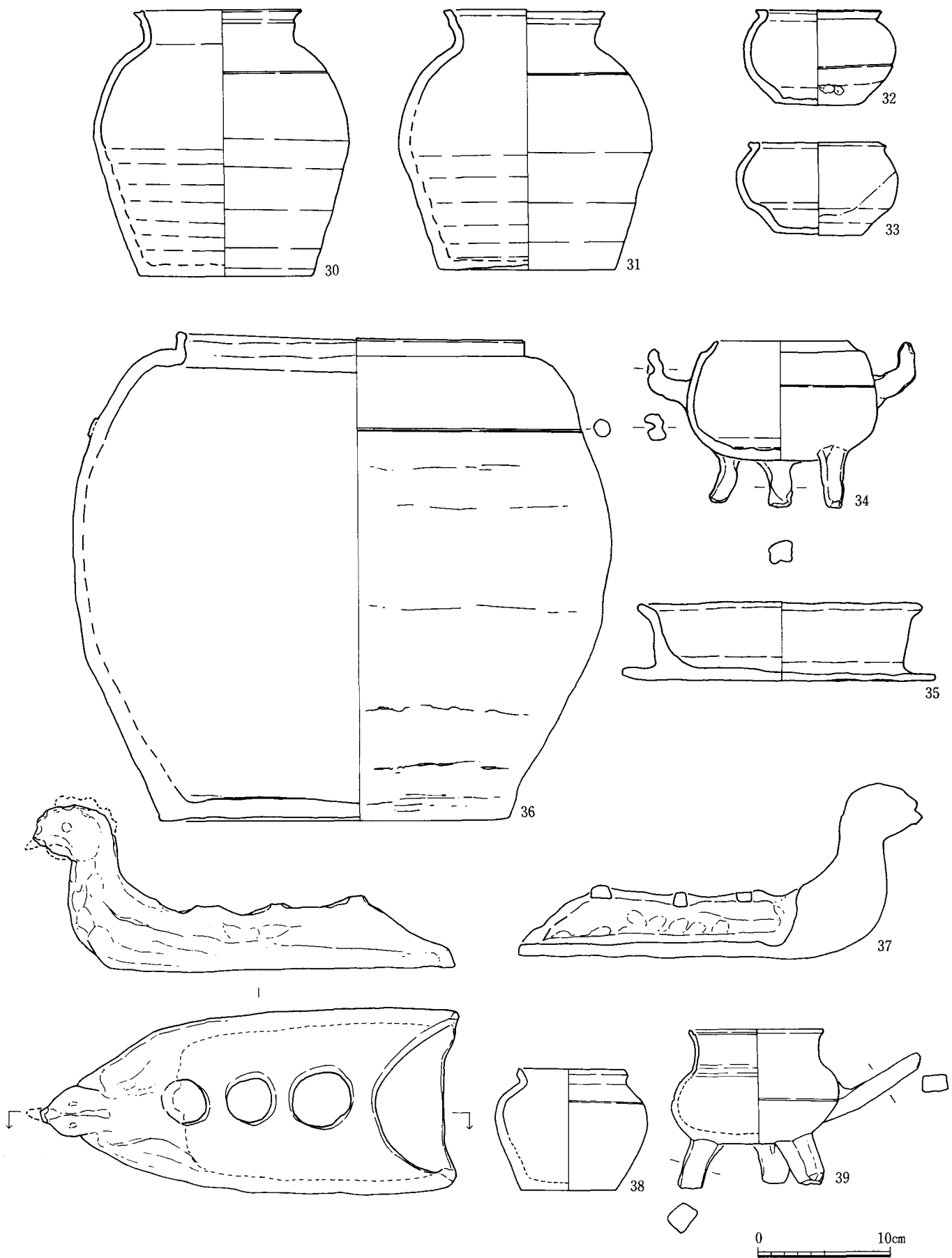


図6 ゴックアムⅠ号墓出土副葬陶器

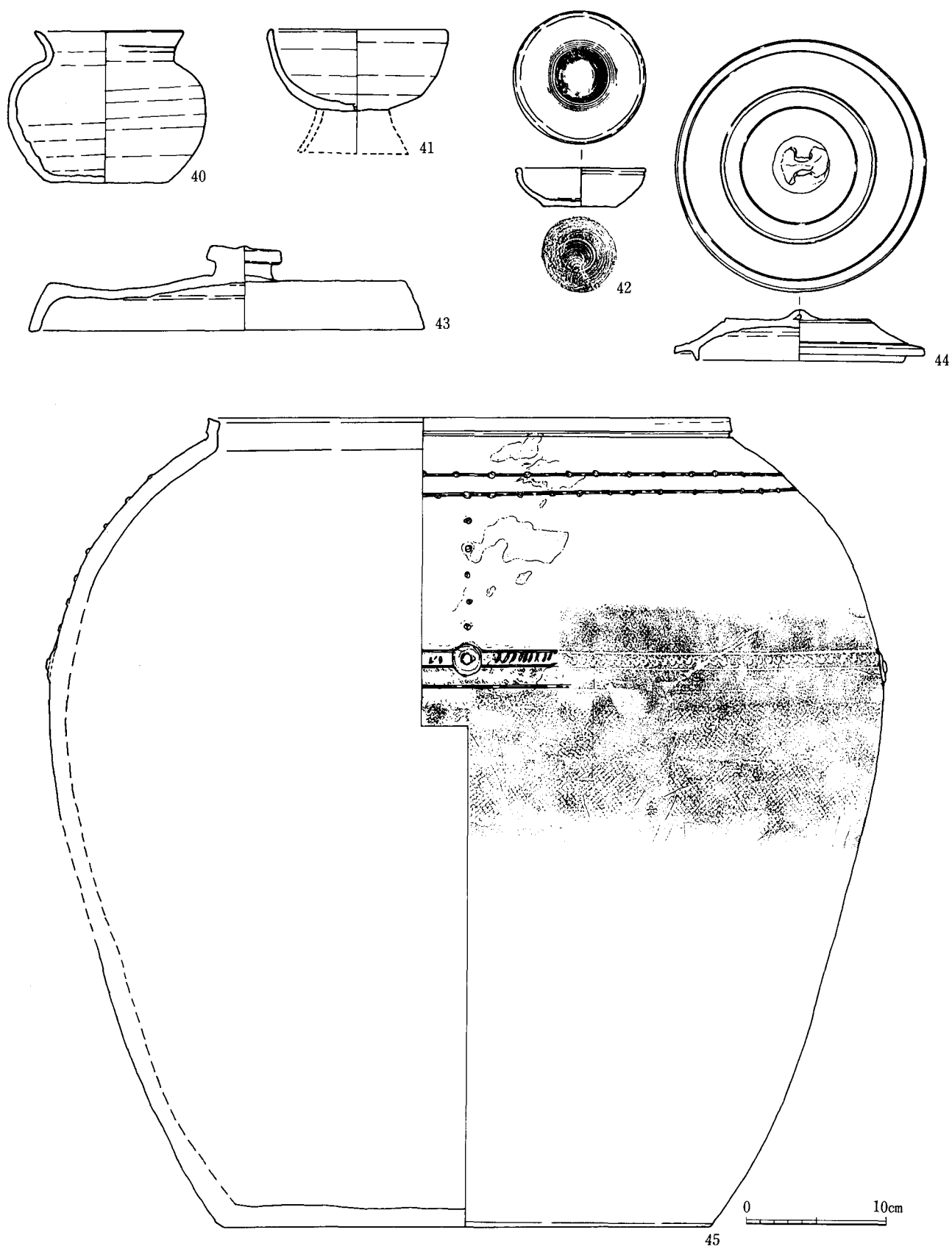


図7 ビムソン2号墓出土副葬陶器

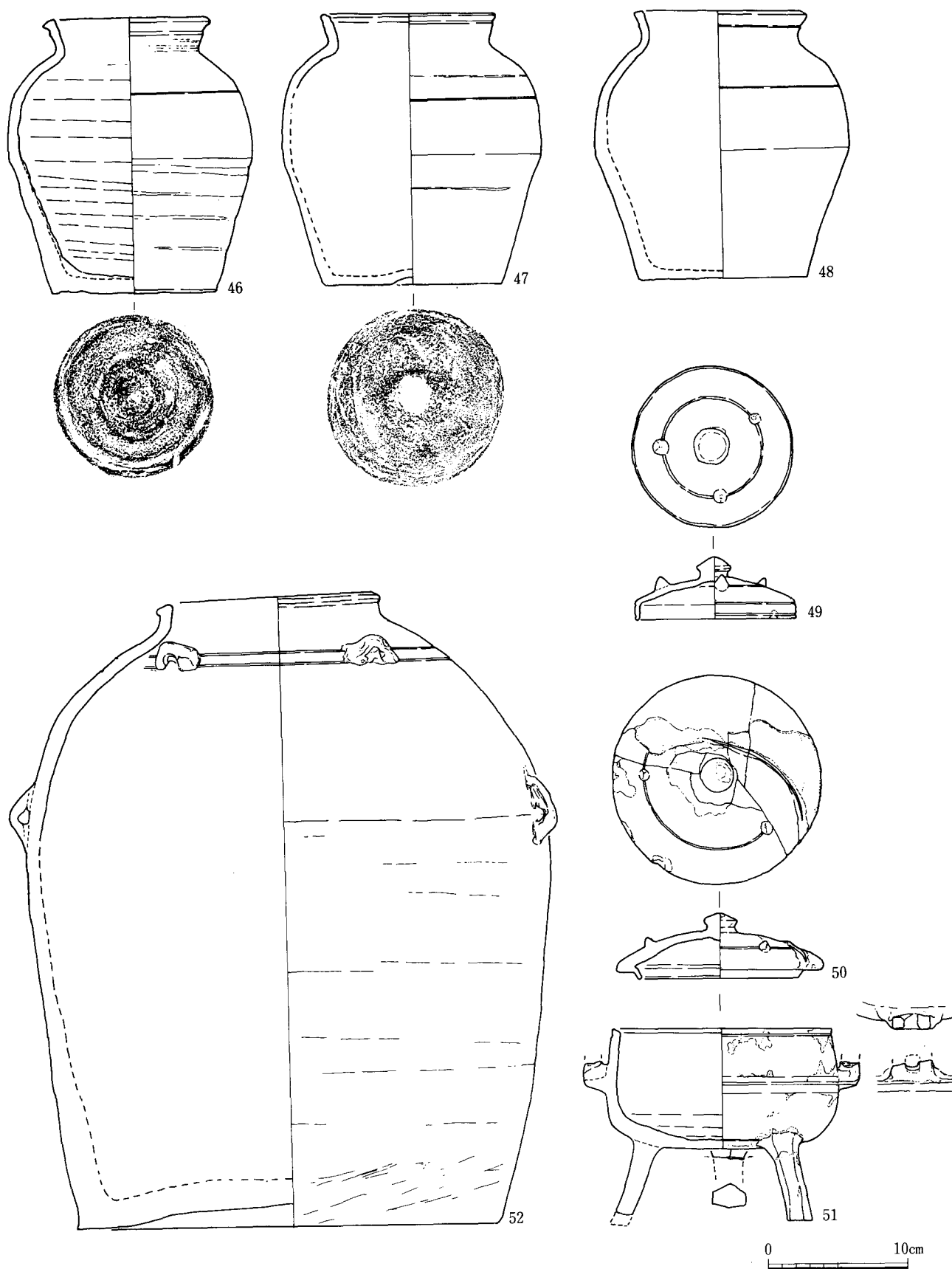


図8 ビムソン3号墓出土副葬陶器

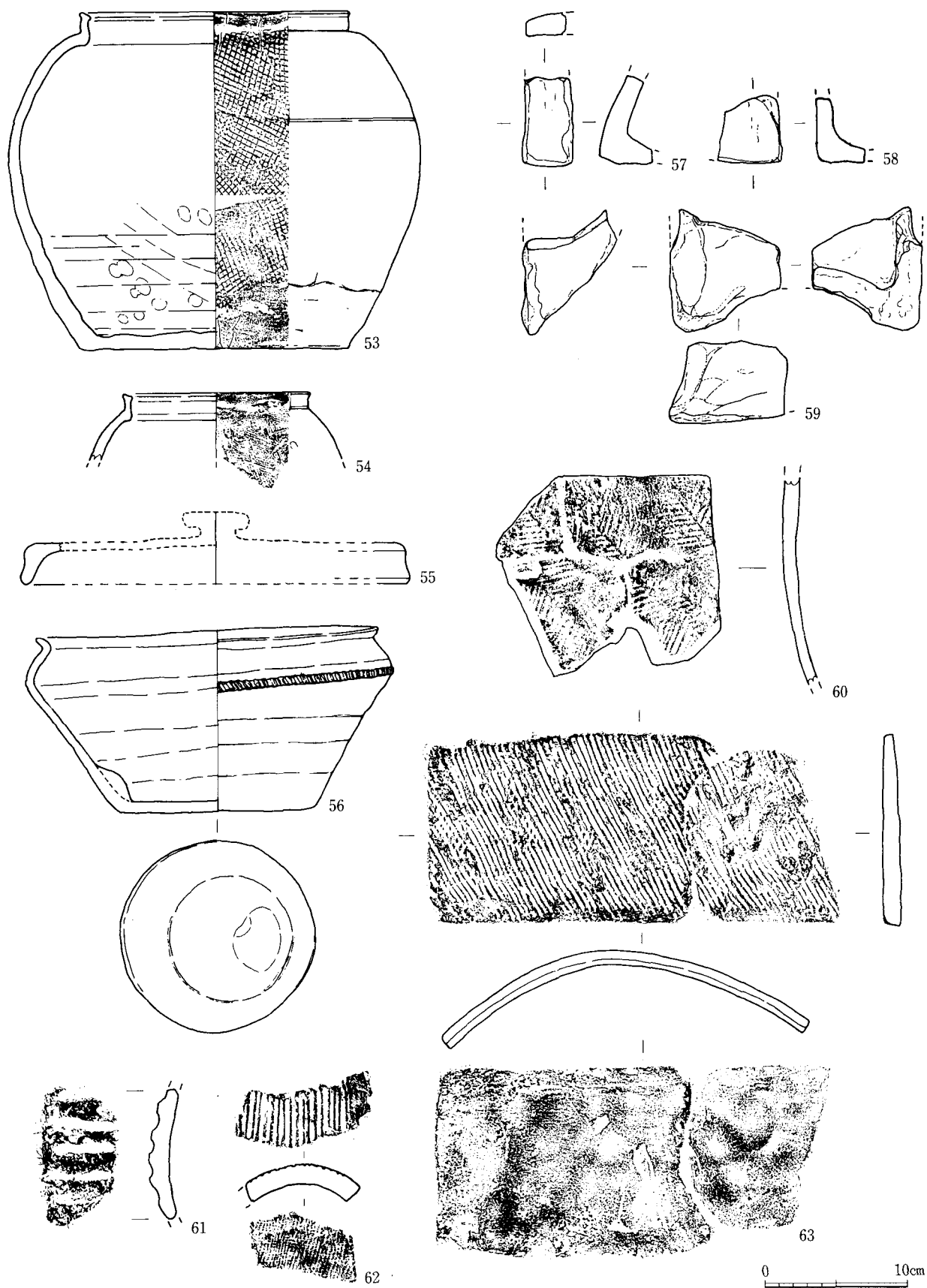


図9 ビムソン3号墓出土副葬陶器

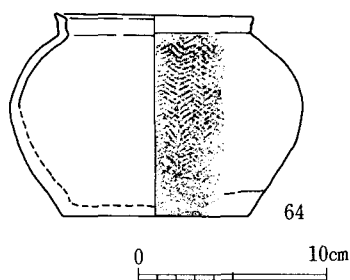


図10 ビムソン4号墓出土副葬陶器

る直口短頸), 端部内側に凸稜を設ける独特な形態を持つものを指す。梨状／樽状球形に膨らむ胴部の外面には, 菱形文, 細格子文・網目状文, 綾杉文, 細斜線文など各種印文を施し, 上部に沈線文が1本めぐる。また3次調査遺物には少ないものの(リエンフオン3号墓: 図19-114), タムト窯出土例のように「窯印」を備えたものも少なくない。この他に無文のものも存在する(図2-11・図15-99)。特に多い菱形文甕については, 粗状に盛り上がる粗状菱形文から多重の菱形文へという序列が想定される。続いて多いのが方格文／

網目状文甕で, 器形的特徴は菱形文甕と同様である。ただし口縁部が薄手で口唇部が外側に小さく肥厚するマントン1A号墓例(図2-12)ならびにビムソン15号墓例(図17-105)には注意が必要である。また綾杉文, 斜線文が主体を占めるビムソン7号墓例(図12-82・83, 図13-90・91)とビムソン4号墓例(図10-64)は胴部が算盤珠状に膨らむ器形的特徴を持ち, これも3次調査例では極少数である。

(11)「三角縁甕」: 口縁部は外反しかつ断面三角状に肥厚しており, 胎土は先ほどの「甕」に比べていくぶん粗雑な印象を受ける。胴部は樽状を呈し, 外面を方格文や網目状文で飾ることが多い。三角縁甕は3次調査例では2例あり, 第1に三角縁の上面が水平となるフーコック1号墓例(図18-111)と, 第2は厚ぼったく外傾する三角縁のビムソン7号墓例(図12-84)である。なお「三角縁甕」は3次調査例では極めて少数だが, 紀元1世紀前後のタインホア省チュウズオン遺跡や紀元後1～2世紀のハイズオン省ゴックラック木榔墓(図23-7・8)などの墓群では, 先に述べた壺類と一括し出土している甕類のほとんどがこの系統(口縁部外反)の甕である。したがって本例を仮に2～3世紀に位置付けるならば, 後述する壺の変化の如く間に何らかの変化の様相を求めることも可能である。

(12)「斜縁甕」: 甕類の中でもいくぶん趣きを異とするこの器種は, 器壁が上記の甕類よりも薄めで, 口縁部は外傾し高く伸び, 口唇部は肥厚させない。胴部が小片のため明確に器形復元できないが, 釜状の形態である可能性を残す。胎土は粗く赤褐色を呈し, 胴部外面に細かな網目状文と浅い沈線文を施している(図12-86～88)。

(13)「大甕」: 器高が約35cmを超える大型の甕である。先の「甕」と形態的に重複するものでは, ゴックアム1号墓の無文甕(図6-36), ビムソン7号墓の綾杉文甕(図13-91)などがこれに相当する。ビムソン2号墓の大甕(図7-45)は器高が57cmと破格の大きさであり, 形態, 装飾ともに特殊である。口縁部は口縁直下の太い沈線によって帯状を呈し, 梨状に大きく膨らむ胴部は列状の石粒文やボタン状貼付文, 波状文を加えた凸帯, 網目状文などで豊富に飾られ, 外面も薄く釉がかかる。

A-3 鉢・碗・皿類

(14)「鉢」: 広口の鉢ないし盆状の陶器で, 2～3世紀の漢墓資料中比較的多く見かける器種だが, 第3次調査資料中には3例ある。第1はマントン1B号墓例(図5-29)で, 口縁端部は斜三角に

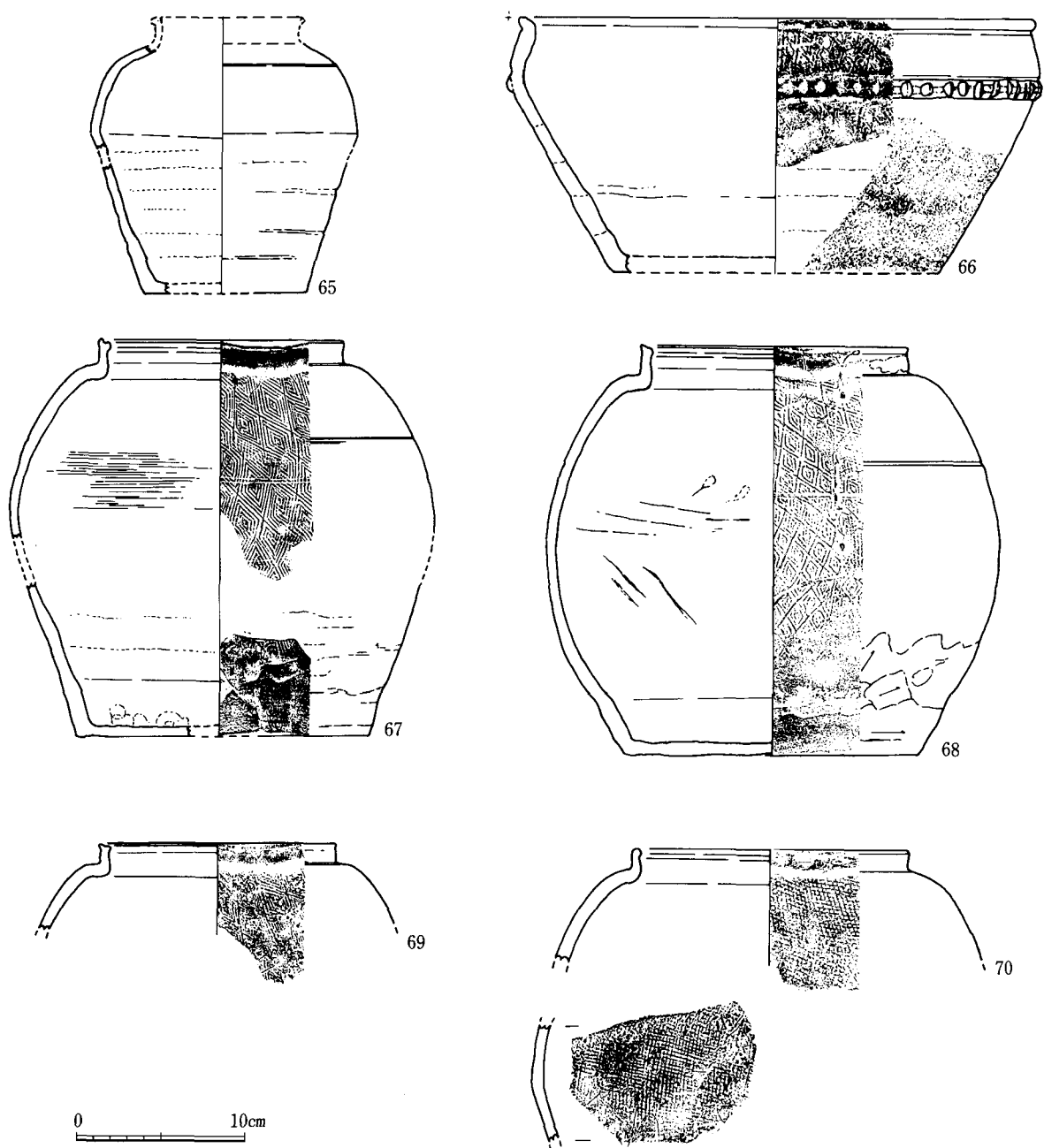


図 11 ビムソン 5 号墓出土副葬陶器

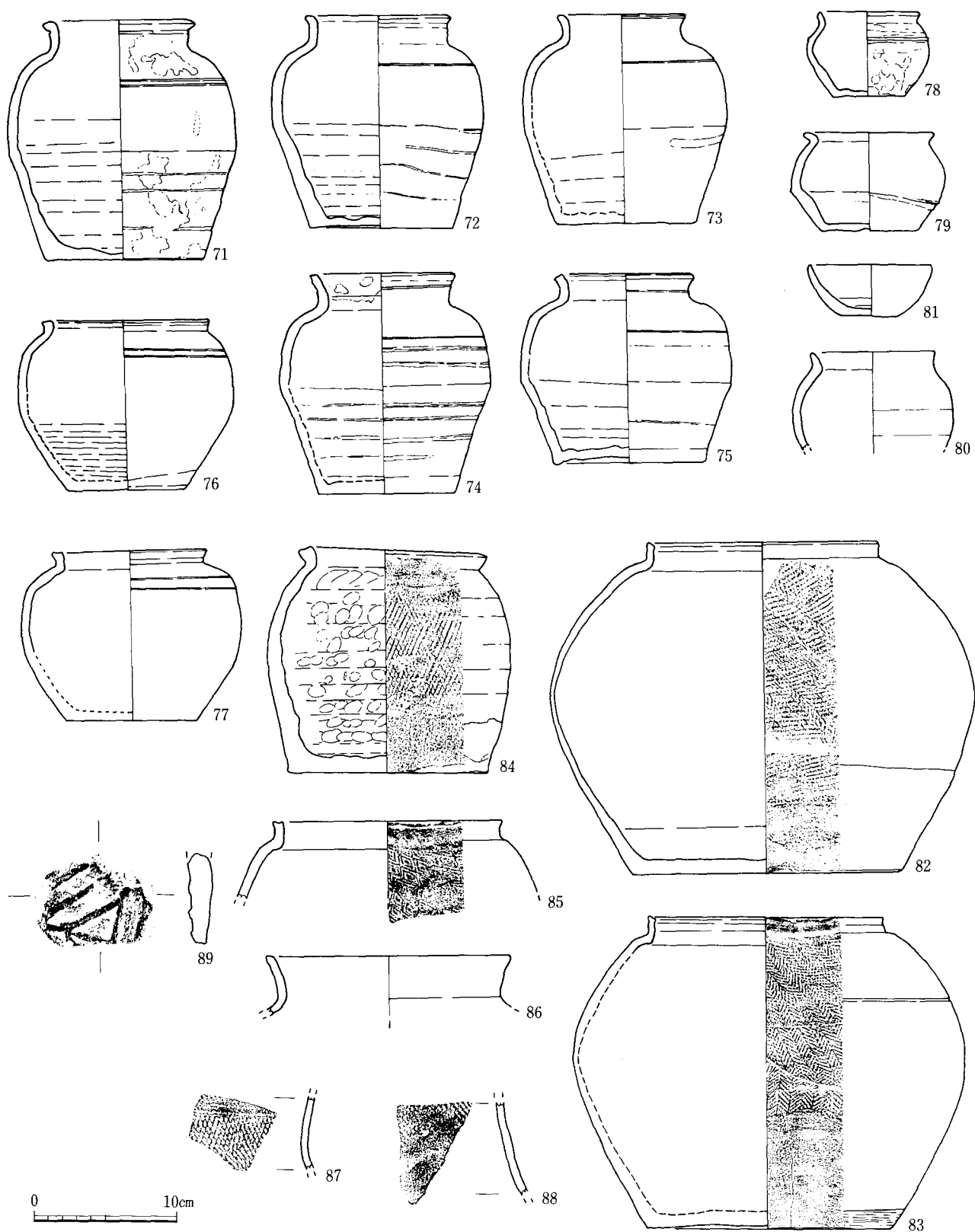


図 12 ビムソン7号墓出土副葬陶器

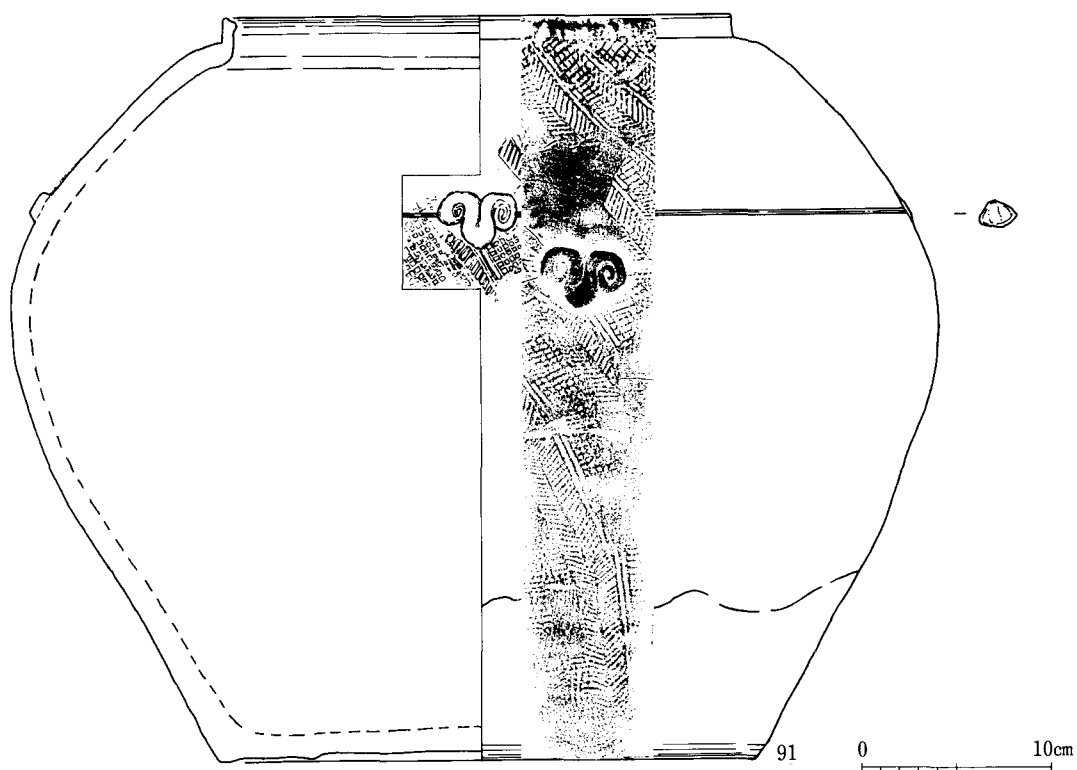
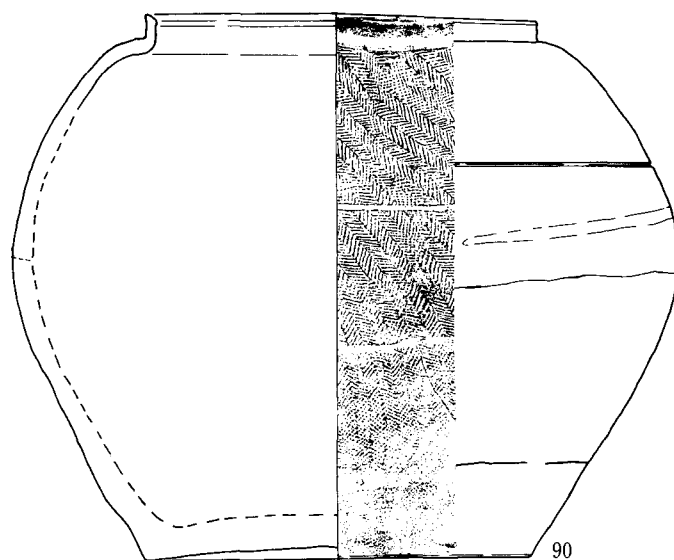


図 13 ビムソン 7 号墓出土副葬陶器

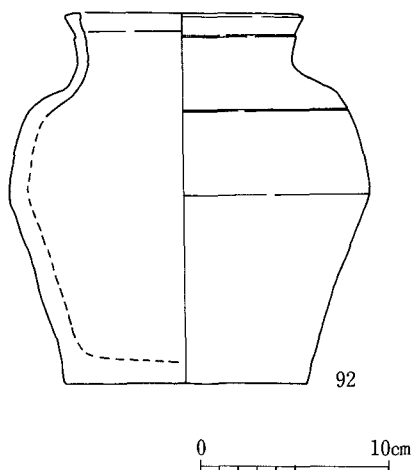


図14 ビムソン9号墓出土副葬陶器

肥厚気味で縁下に沈線文がめぐるが鉢状に開くのみである。胴部外面に菱形文の印文を施し口縁部下と胴部中央には沈線文がめぐる。なお報告中および所蔵カタログによると当初施釉痕があったらしいが、現状ではほとんど剥落している。第2はビムソン3号墓例(図9-56)で口縁部は「くの字状」に外反し口唇部は肥厚させない。胴部上半は口径よりも大きく膨らみ最大径部分には沈線作り出しの刻み目凸帯を設ける。印文はないが、内外面には白色スリップと褐色／半透明釉がわずかに残る。第3はビムソン5号墓例(図11-66)で第2例と類似し、斜めに短く屈折した口縁部は縁に沈線がめぐり口唇部は丸みを帯びる。胴部上半は膨らみ最大径部分には沈線作り出しの刻み目凸帯を設ける。器面外側には菱形文の浅い印文を施

し、内外面ともに白色スリップと灰釉の痕が残る。

(15)「内弯口縁鉢」：口縁は丸く内弯し縁外側付近に沈線が2本めぐる。外面にはピンクがかかった褐色スリップおよび灰緑釉が施され、中ほどには釉垂れが厚く見える。ビムソン12号墓から「円盤状蓋」(図16-100)を伴い1点出土している(図16-101)。

(16)「碗」：半円状の器形を持ち、ビムソン10号墓例は内外面ともに灰緑釉が施されているが、底部付近は釉がかからずややピンクがかかった灰白色の胎土が露胎である(ホーチミン歴博5044)。

(17)「圈足付碗」：ビムソン2号墓例である(図7-41)。底部付近は破壊されていて安定が悪く、ヤンセの報告では圈足(高台)付きに復元がなされている⁽¹¹⁾。口縁外側付近がヨコナデにより丸みを帯び、器面は回転ナデの痕跡が平行に残る。色調は淡い灰黄褐色を呈し、現状では無釉である。

(18)「小皿」：口縁部下に沈線がめぐり口唇部を小さく丸く作り出している。器身は浅い碗状で、内面中央には数本からなる沈線文が2つ同心円状にめぐる。平底の底部には糸切り離し痕が明瞭に残る。灰白色、無釉。ビムソン2号墓から2点出土している(図7-42)。

A-4 三足器

(19)「鼎」：第3次調査資料では2例存在する。第1はゴックアム1号墓例である(図6-34)。胴部は深底釜状を呈し、受け口状の口縁部は窄まり、三足は断面方形で比較的短い。胴部に斜角に取り付けられたL字把手は瘦長で孔が貫通しない。器面には赤みを帯びた褐色スリップと薄い釉を施す。第2はビムソン3号墓例であり、小突起付き「小蓋」を伴う(図8-50・51)。第2次調査のビムソン1B号墓出土品に類似しており、直口縁・深底の胴部中央には断面長三角形の凸稜が円盤状にめぐり、その上に両把手を垂直に取り付ける(把手は破損している)。外面には灰白色スリップおよび半透明釉を施す。

(20)「三足付小釜」：ゴックアム1号墓の1例のみである(図6-39)。身部は小型の釜形であり、高めの頸部は湾曲し、胴部は低く張りを持つ。胴部には棒状の把手が斜めにつき、底部には断面方

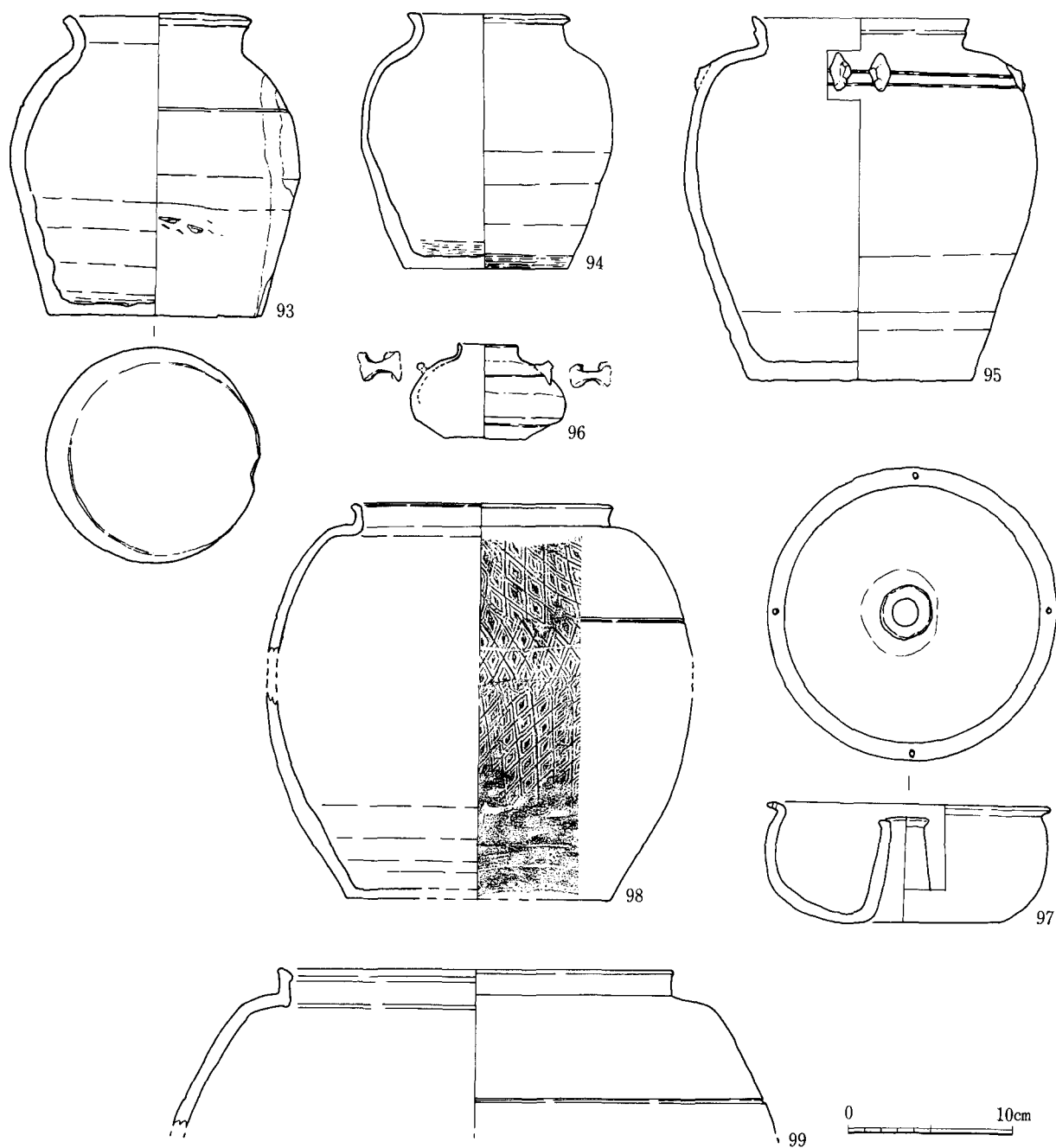


図 15 ビムソン10号墓出土副葬陶器

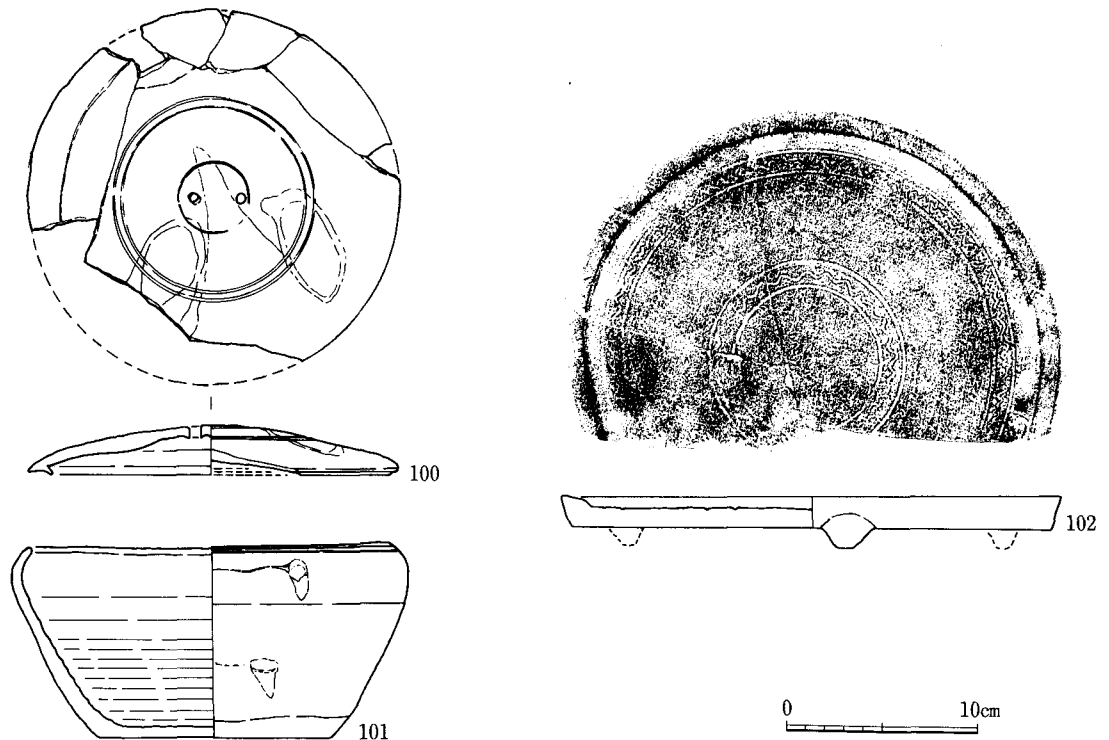


図 16 ビムソン12号墓出土副葬陶器

形の低い三足がつく。胎土は淡橙色を呈し器面には褐色スリップが施される。

(21)「三足付盤」：ビムソン 12 号墓の 1 点 (1/2 破片) のみである (図 16-102)。上面は周縁部が一段高く、内面は沈線に挟まれた波状文帯が無文帯を挟んで同心円状に 2 周する。底部は平たく周囲に短い突起状の三足がつくと見られるが、現状では一つのみ確認できる。胎土は灰褐色で器面全体は褐釉が施されている。

A-5 その他

(22)「耳杯」：長楕円形・平底碗状の身部の両縁に丸みを帯びた張りだし部分 (耳) が直角に取り付けられる。胎土は灰褐色泥質で外面に青緑色釉が施される。

(23)「煙突付鍋」：中央に煙突状の焰出孔が通る独特の器形を持つ。色調は灰褐色ないし茶褐色で現状では施釉の痕跡は見られない。ビムソン 10 号墓の 1 例である (図 15-97)。

(24)「虎子」：本来は座した動物 (虎) を形象した中空の容器である (ホーチミン歴博 5035)⁽¹³⁾。背部に耳状に屈曲した把手が取り付けられ、胴部は凸帯および各種文様で装飾されている。胎土は「壺」に近く、色調は灰白／灰褐色を呈し、器面には灰褐色スリップと半透明／灰緑釉が薄くかかる。

(25)「取手付蓋」：被せる方式の蓋で、上面中央に円盤状の取手がつく。ビムソン 2 号墓例について述べると胎土は淡赤灰褐色で無釉である (図 7-43)⁽¹⁴⁾。なおラクチュオン 22 号墓の出土状況および口径からして通常「鉢」に伴うものと考えられる。

(26)「円盤状蓋」：中央に 2 孔あいた器身の低い円盤状の蓋で、受け口状の口縁部を持つ (図 16-100)。色調、胎土、施釉とも共伴する「内弯口縁鉢」 (図 16-101) と同一で、上面には灰褐色の釉が厚くかかる。

(27)「小蓋」：ビムソン 3 号墓に 2 点見られる。第 1 例 (図 8-50) は口縁が内受け状を呈するも

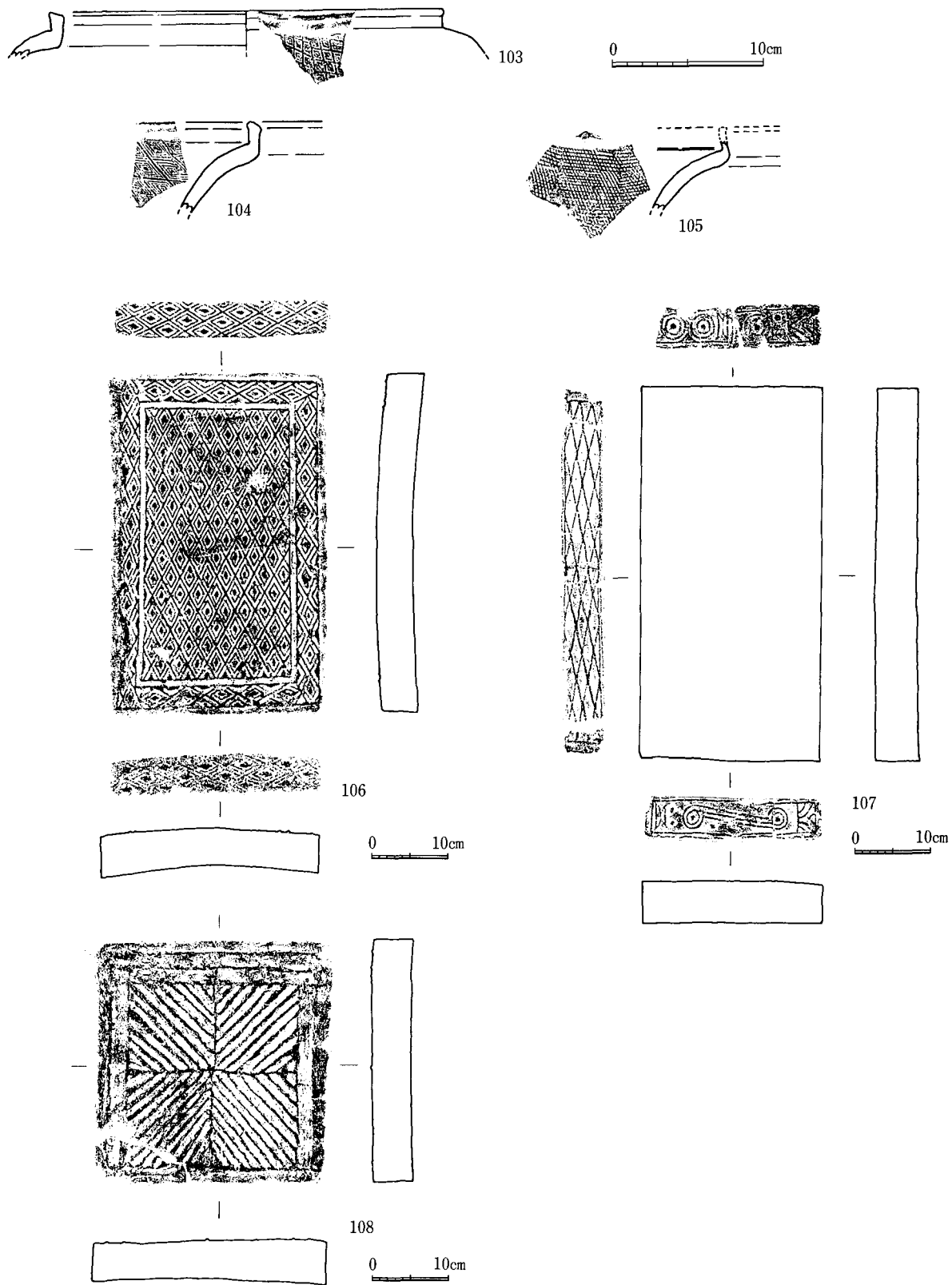


図 17 ビムソン15号墓出土副葬陶器

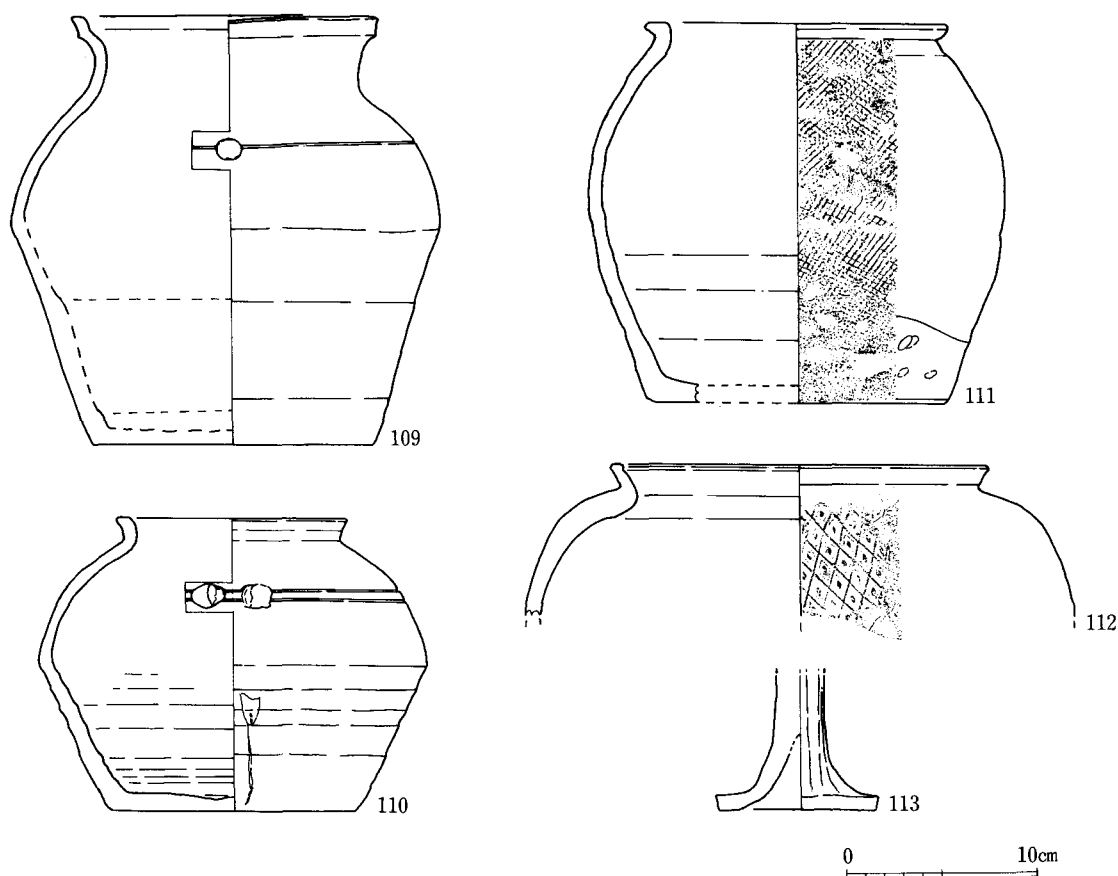


図18 フーコック1号墓出土副葬陶器

ので、「鼎」に付随するものである。第2例(図8-49)はやや小型の口縁部が被せる形態のものである。いずれも上面中央にボタン状の鈕と周囲に小突起が三つ貼り付けられ、外面には灰白色スリップと薄い釉が施されている。第1例には上面に重ね焼の痕跡があつて円形の釉溜まりが見られる。

(28) 灯座：フーコック1号墓の1例のみである(図18-113)。柱部分は実身で、裾部は喇叭状に開き空洞である。上部分および碗状の灯皿部分は現状では欠落している。

(29)「紡錘車」：ドンソン遺跡やタムト窯跡から出土したものと同じく紡錘形のものであり、タインホア漢墓からの出土例としては珍しく、ゴックアム1号墓出土である(ホーチミン歴博5060)。

B「陶製明器」

「陶製明器」の場合、「変形甕形明器」など一部が灰白色胎土(グループ1)の施釉陶器であるのを除き、そのほとんどが灰黄褐色、橙色を呈する瓦質(グループ2')の無釉陶器である。タムト窯址の資料で見ると、「陶製明器」は「甕」や「瓦磚」などと同一の窯で焼成されていることがわかる⁽¹⁵⁾。以下では「家形明器」「甕形明器」「池形明器」について説明する。

(1)「家(館)形明器」：第3次調査資料では、ゴックアム1号墓、ビムソン3・7・10・15号墓、ヴクチュン1号墓、フーコック1号墓の各墓から出土している。ほとんどは破片資料であるが、ゴックアム1号墓から2点出土しており、一つは塀に囲まれた2階建ての瓦葺の屋敷を模した比較的大型のもので、いくつかの小部分を複合して組み立てたものである(ホーチミン歴博5062)。これをもう一つの母屋だけのもの(7811)と区別し「館形明器」とする。ただしビムソン1A号墓例と比べるといくぶん質素な作りではある。

(2)「変形甕形明器」：タインホア漢墓に独特で器形が動物の姿を形象しており、中空で焰孔は空いているものの、煙突部分は鶏や羊の頭部を模しているものが多い。ゴックアム1号墓出土例(図

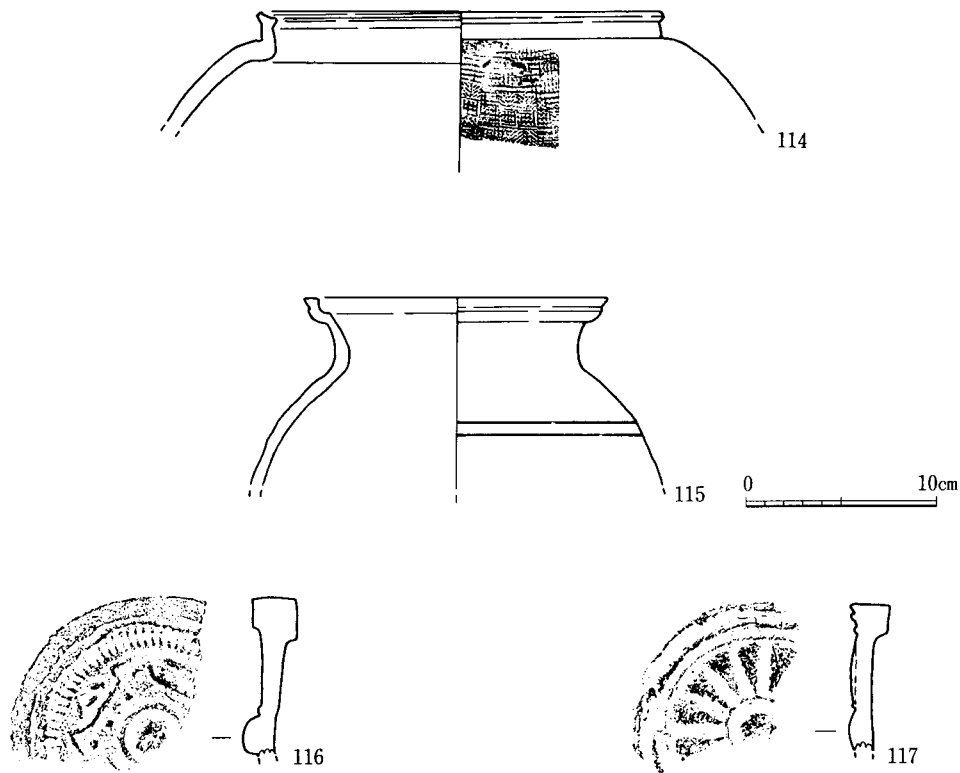


図 19 その他副葬陶器・瓦当(114 リエンフオン 3 号墓,
115 ヴクチュン, 116 タムト 1 A, 117 タムト 1 B)

6-37) では、鶏状頭部を作りだし、中空の胴部背面に火焰孔が三つ、後端部は開いて燕尾状に伸びる。淡橙色／灰黄褐色を呈し無釉である。ヴクチュン 1 号墓例⁽¹⁷⁾では、煙突部分（頭部？）は単なる突起で表現され背部の焰孔は二つ、明器には珍しく灰褐色胎土・施釉である。ビムソン 3 号墓の破片資料（図 9-57~59）も本来このような形態であったと推測される。

（3）「池形明器」：ゴックアム 1 号墓の 1 例（図 6-35）があり、円盤状の基盤に盥状の池が表現されている。ちなみに階段部分がこれに付属することがある。

C 「瓦磚」

C-1 「磚」 精緻な文様を多面に持つ大型磚のものであり、通常小型の磚室墓の壁体にみられる瓦質状の磚ではなく、むしろバクニン省の大型墓⁽¹⁸⁾やルイロウ（リエンラウ）城址⁽¹⁹⁾などで見られる大型精製のものである。おそらくビムソン 15 号墓木槨墓の床面に敷く段階で、何らかの理由によってそうした磚の再利用を行った可能性がある。

（1）「方形磚」：ビムソン 15 号墓の 1 例⁽²⁰⁾（図 17-108）によって示すと、表面にのみ凸線による文様を施し、方形区画をさらに 4 分割し対向する V 字状斜線によってこれを埋めるものである。胎土は泥質で色調は灰茶褐色を呈する。

（2）「長方形磚」：ビムソン 15 号墓の 2 例によって説明する。第 1 例（図 17-107）は表裏面ともに無文で、1 長側面を除き 3 側面に文様を施す。長側面は斜格子文、短側面は一方が同心円状の接線円文を主体とする幾何学文、もう一方は 3 つの同心円文を含む幾何学文である。第 2 例⁽²¹⁾（図 17-106）は、表面および両短側面に枳状に中心部が隆起した 2 重菱形文を施し、表面の方形区画の外周にも縦横に菱形文を配する。磚は断面において若干の湾曲をみせる。胎土は泥質、色調は灰褐色から灰茶褐色を呈する。

表Ⅰ ペトナム漢墓ヤンセ第3次調査資料集成

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
44	7376		Bim Son 2	鈕付小蓋	陶器	完形
42	7377		Bim Son 2	小皿	陶器	完形
	7378	5033	Bim Son 2	小皿	陶器	完形
45	7379		Bim Son 2	大甕	陶器	完形
	7380		Bim Son 2	鉢：底部	陶器	破片
	7381		Bim Son 2	甕：破片	陶器	破片
	7382		Bim Son 2	甕：胴、底部	陶器	破片
	7383		Bim Son 2	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7384		Bim Son 2	小壺/短頸壺	陶器	破片
	7385		Bim Son 2	小壺/短頸壺	陶器	破片
	7386		Bim Son 2	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7387		Bim Son 2	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7388		Bim Son 2	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7389		Bim Son 2	甕：口縁～胴部	陶器	破片
41	7390		Bim Son 2	圈足付碗	陶器	破片
	7391		Bim Son 2	甕：胴部	陶器	破片
	7392		Bim Son 2	鉢：底部	陶器	破片
43	7393		Bim Son 2	取手付蓋	陶器	破片
	7394		Bim Son 2	小壺/短頸壺	陶器	破片
	7395		Bim Son 2	土塊	土塊	破片
	7396	5034	Bim Son 2	盤龍鏡	銅鏡	完形
147	7397		Bim Son 2	吊手付三足灯器	青銅器	破片
160	7398		Bim Son 2	匙状（鉛）器	鉛器	完形
40	8066		Bim Son 2	小壺	陶器	完形
		不明	Bim Son 2	円形硯	石製品	不明
		不明	Bim Son 2	銅銭	銅銭	不明
	4167		Bim Son 3	甕	陶器	破片
46	7399		Bim Son 3	壺	陶器	完形
49	7400		Bim Son 3	突起付小蓋	陶器	完形
	7401	5035	Bim Son 3	変形虎子形容器	陶器	完形
52	7402		Bim Son 3	六耳大壺	陶器	完形
50	7403		Bim Son 3	小蓋（突起付）	陶器	完形
51	7403		Bim Son 3	鼎	陶器	ほぼ完形

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
1	3.7	18.1	沈線文2	白褐色	緑灰色	淡褐色	
1	5.4	9.4	口縁部沈線文1：器底同心円文	灰褐色			底部糸切り痕 Janse 1951:Fig.111-A,B
1			口縁部沈線文2：器底同心円文	灰褐色			底部糸切り痕 Janse 1951:Fig.111-A,B
1	57	37.6	口縁下凹線文：胴部石粒列状文、沈線文、貼付文、爪形文、網目状印文	茶褐色	あり：多剥落		Janse1947:Pl.111-2, Fig.39
29				暗いピンク			
11			細方格文	暗いピンク			
11			幾何文・方格文	灰白色			
15			細方格文	灰白色			
13			細方格文	暗い赤褐色			
1				白色	灰緑釉		
3			幾何文	淡赤灰褐色			
2			細方格文	赤灰褐色			
3			葉脈文	灰白色			
5			幾何文	赤灰褐色			
1		2.9		灰色			Janse1951:Fig.110
3				淡赤灰褐色			
11			幾何文	暗赤灰褐色			
1	6.1	28		淡赤灰褐色			
2				暗灰褐色			
5							
1		13.5	銘文：三羊作竟 大天文 官至三公長 宜子孫	黒銅色			紛失につき未調査 Janse1947:Pl.100-a,b
不明			胴部凸稜帯1				Janse1951:Fig.115
1	14	1.8					
1	10.9	10.7	肩部沈線文1	白褐色			
1							
不明							
1							
1	19.8	10.5	肩部沈線文1	灰白色	半透明	白色	
1	4.35	11.5	沈線1+貼付突起3：側面沈線文2	灰白色	外面乳白色緑釉	白色	
1	25		凸帯文、沈線文、貼付文など	ピンクがかかる灰白色、淡黄褐色	薄く半透明（上面のみ）	茶褐色	Janse1947:Pl.106-a,b
1	44.8	14.8	沈線文2+半環耳4：沈線文2+半環耳2	赤灰褐色	半透明：多剥落	茶褐色	Janse1947:Pl.101-1
1	4.6	17.3	沈線1+貼付小突起3	灰白色	外面透明緑釉	乳白色	上面に重ね焼きの痕
1	13.6	15.6	口縁部沈線文1	灰褐色	くすんだ乳白色、緑色釉：多剥落	灰白色	脚部1 本損失：蓋とセット Janse1947:Pl.99-2

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh 所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
56	7404		Bim Son 3	鉢	陶器	完形
47	7405		Bim Son 3	壺	陶器	完形
48	7406	5036	Bim Son 3	壺	陶器	完形
53	7407		Bim Son 3	甕	陶器	破片
54	7408		Bim Son 3	甕：口縁部	陶器	破片
55	7409		Bim Son 3	取手付蓋？：口縁部	陶器	破片
60	7410		Bim Son 3	板瓦？	瓦磚	破片
62	7411		Bim Son 3	丸瓦	瓦磚	破片
	7412		Bim Son 3	甕：胴部	陶器	破片
63	7413		Bim Son 3	方形瓦	瓦磚	ほぼ完形
	7414		Bim Son 3	甕：胴部	陶器	破片
61	7415		Bim Son 3	明器：階段部分	陶製明器	破片
57-59	7416		Bim Son 3	変形甕形明器①②底部③後端部	陶器	破片
	7417		Bim Son 3	漆片付土塊	漆器	破片
	7419		Bim Son 3	形状不明鉄器	鉄器	破片
	7420		Bim Son 3	漆片	漆器	破片
64	7421	5037	Bim Son 4	小壺（小形甕）	陶器	完形
	7422		Bim Son 4	把手？	陶器	破片
	7423		Bim Son 4	小片付土塊	土塊	破片
	7424		Bim Son 4	五銖銭付土器	銅銭	完形：固着
	7425		Bim Son 4	漆塗陶器片土塊	漆器	破片
	7426		Bim Son 4	漆器付土塊	漆器	破片
	7426		Bim Son 4	銅銭付土塊	土塊	破片
	7427		Bim Son 4	木片付土塊	土塊	破片
	7428		Bim Son 4	木片：棺材？	木質	破片
	7429		Bim Son 4	銀碗破片（？）	銀製品	破片
	7430		Bim Son 4	銅容器片	青銅器	破片
125-132	7431		Bim Son 4	五銖銭	銅銭	完形：固着
156	7432		Bim Son 4	鉄製刀子	鉄器	破片
	7433		Bim Son 4	青銅器痕付土塊	土塊	破片
	7434		Bim Son 4	青銅器・鉄器痕が残る土塊	土塊	破片
65	7435		Bim Son 5	壺：頸部破損	陶器	破片
70	7436		Bim Son 5	甕：口縁部	陶器	破片
68	7437		Bim Son 5	甕	陶器	破片：ほぼ完形

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
1	12.9	24.4	沈線作り出しの刻み目 凸帯	白灰褐色	乳白色：多剥 落	ピンク＋褐色	底部に円形重ね焼き痕 Janse1947: 109-2
1	19.1	12.8	肩部沈線文1	やや茶褐色が かる白褐色	半透明	白灰色チョー ク	
1	18.6	12.4	肩部沈線文1	灰白色	斑 状 灰 緑 釉 （外面のみ）	白灰色チョー ク	
21	23.6	19	細格子目文：肩部沈線 文1	灰褐色			
8		13	細い多重菱形文	明橙色～灰褐色	多剥落	不明	
20		27.5		明橙色～灰褐 色			黒色の付着物
4			表面：葉脈文	明赤褐色		石灰？	目録では胴部破片
1		12	縄蓆文：裏面布目圧痕	淡黄褐色			
2			細方格文	赤褐色			
1		13.5	縄蓆文	暗橙色		石灰？	目録では胴部破片
7			細方格文	灰褐色			
5		5.5		淡橙～黄褐色			池形明器のものか
3				淡黄褐色～橙 色	1mm 程 度 の 厚 さ	白色チョーク 状	目録では家形明器
6				赤・白・黒色			
1							
1							
1	10.5	10.4	縦方向綾杉文、下方ナ デ消し	灰褐色			Janse1947:Pl.102-1
1							
不明							
1							
1							
1							
1							
1							
1							
1				光沢を持つ			
1							
1ケース							
2	10.6	2					
1							
1							
58		9	肩部沈線文1	乳白色～黄褐 色	半透明：多 剥 落	白灰色チョー ク	
14		16.4	細格子目文	淡黄褐色			
28		28	3重菱形文：肩部沈線 文	暗灰褐色～赤 褐色	灰緑釉：多剥 落	不明	

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh 所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
67	7438		Bim Son 5	甕：胴部微破損	陶器	破片：ほぼ完形
66	7439		Bim Son 5	鉢	陶器	破片
69	7440		Bim Son 5	甕：口縁部	陶器	破片
70	7441		Bim Son 5	甕：胴部	陶器	破片
	7380		Bim Son 7	甕：底部	陶器	破片
76	7442		Bim Son 7	短頸広口壺	陶器	完形
75	7443		Bim Son 7	壺	陶器	完形
74	7444		Bim Son 7	壺	陶器	完形
78	7445		Bim Son 7	小壺	陶器	完形
73	7446		Bim Son 7	壺	陶器	ほぼ完形
77	7447	5038	Bim Son 7	短頸広口壺	陶器	完形
90	7448		Bim Son 7	大甕	陶器	完形
84	7449		Bim Son 7	樽形甕（三角縁甕）	陶器	完形
91	7450		Bim Son 7	大甕	陶器	完形
83	7451		Bim Son 7	甕	陶器	完形
79	7452		Bim Son 7	短頸小壺(B)	陶器	ほぼ完形
	7453		Bim Son 7	甕：底部	陶器	破片
	7454		Bim Son 7	壺	陶器	破片
	7454		Bim Son 7	甕壺：口縁～胴部	陶器	破片
	7455		Bim Son 7	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7456		Bim Son 7	甕：口縁～胴部	陶器	破片
85	7457		Bim Son 7	甕：口縁部	陶器	
71	7458		Bim Son 7	壺	陶器	破片1/2
	7459		Bim Son 7	甕：底部	陶器	破片
	7460		Bim Son 7	口縁部	陶器	破片
87-88	7461		Bim Son 7	小壺（印文甕？）	陶器	破片
86	7462		Bim Son 7	甕	陶器	破片
	7463		Bim Son 7	甕：胴部	陶器	破片
	7464		Bim Son 7	甕：胴部（軟質）	陶器	破片

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
43	23.2	14.6	5重菱形文：肩部沈線文1-2	灰白色～暗灰褐色			
28	15	31	菱形文：口縁下沈線1：刻目凸帯文	橙色	あり：多剥落	内外面白色	
18		14.3	5重菱形文：肩部沈線文1-2	淡黄褐色	灰緑釉：多剥落	灰白色	
4			網目文	灰褐色～赤褐色	多剥落	茶褐色	
1							
1	11.8	8.4	肩部沈線文2	ピンクがかかる白褐色	多剥落	白色	Janse1947:Pl.103-2
1	13.2	9.7	肩部薄い沈線文1	白褐色	多剥落	白色	
1	15.2	10.1	頸部沈線文1：肩部沈線文1	白褐色	多剥落	暗赤褐色	
1	5.9	6.8	肩部隆起線文1	赤みがかかる淡灰黄褐色	多剥落	白色	
1	14.5	9	肩部沈線文1	白褐色			
1	11.7	10.5	肩部沈線文1	褐色、淡灰黄褐色		茶褐色	肩部に黒色付着物
1	28.5	20.2	連続綾杉文：肩部沈線文1	灰褐色			Janse1947:Pl.110-1
1	15.5	10.7	細斜格子文：肩部浅い沈線文	灰褐色～灰茶褐色			Janse1947:Pl.110-2
1	39.4	26	細格子文地＋綾杉文：釦状貼付文2：羊頭状貼付文	灰褐色			Janse1947:Pl.102-3
1	21.5	16.7	綾杉文：肩部微沈線文1	暗灰褐色/赤褐色			
1	6.8	9.2		灰白/灰褐色	外面上半灰緑釉		重ね焼きをしている
不明							
不明							
不明							
不明							
不明							
不明		16	3重菱形文	淡灰黄褐色～明橙色			
1	16.6	10.8	肩部沈線文2	灰褐色	半透明：多剥落	白色	
不明							
不明							
3			細斜格子文：肩部沈線文2	灰褐色～暗茶褐色			
不明							
1			綾杉文	灰褐色			
6			斜縞状文	灰褐色			

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh 所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
	7465		Bim Son 7	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7466		Bim Son 7	甕：胴部	陶器	破片
	7467		Bim Son 7	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7468		Bim Son 7	甕：胴部	陶器	破片
	7469		Bim Son 7	甕：胴部	陶器	破片
	7470		Bim Son 7	甕：底部	陶器	破片
	7471		Bim Son 7	甕：胴部	陶器	破片
	7472		Bim Son 7	白磁壺：胴部	磁器	破片
89	7473		Bim Son 7	家形明器：壁	陶製明器	破片
81	7474		Bim Son 7	碗	陶器	破片
80	7475		Bim Son 7	小壺：白磁	磁器	破片
82	7476		Bim Son 7	甕	陶器	破片
	7477		Bim Son 7	甕：口縁～底部	陶器	破片
	7478	5039	Bim Son 7	五銖銭	銅銭	
133-137	7478		Bim Son 7	五銖銭、鉄銭、無文銭	銅銭	完形：固着
159	7479		Bim Son 7	鉄釘	鉄器	破片
	7480	5040	Bim Son 7	亀形銅灯座	青銅器	完形
	7481	5041	Bim Son 7	銅皿(1)	青銅器	完形
148	7481		Bim Son 7	銅皿(2)	青銅器	完形
	7482	5042	Bim Son 7	銅皿	青銅器	完形
72	8067		Bim Son 7	壺	陶器	ほぼ完形
	Naナシ①		Bim Son 7	甕/壺	陶器	破片
	Naナシ②		Bim Son 7	甕/壺	陶器	破片
	7467		Bim Son 9	壺 BS7番号重複	陶器	破片
	7483		Bim Son 9	取手付蓋	陶器	破片
	7484		Bim Son 9	甕	陶器	破片
	7485		Bim Son 9	甕：口縁部	陶器	破片
	7486		Bim Son 9	甕	陶器	破片
	7487		Bim Son 9	甕：口縁部	陶器	破片
	7488		Bim Son 9	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7489		Bim Son 9	壺：口縁～胴部	陶器	破片
	7490		Bim Son 9	耳杯	陶器	破片
	7491		Bim Son 9	壺：胴部	陶器	破片
	7492		Bim Son 9	壺：胴部	陶器	破片
	7493		Bim Son 9	小壺/短頸壺：胴部	陶器	破片
	7494		Bim Son 9	壺：胴部	陶器	破片
	7495		Bim Son 9	甕：胴部	陶器	破片

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
12			縞状文	灰褐色			
1			細方格文	明灰褐色			
6			細方格文	灰褐色			
6			縞状文	暗赤灰褐色			
12			細方格文/縞状文	橙色			
1				灰褐色			
8				橙色			
1				白色	半透明		
1			隆起文にて斜線？	淡灰黄褐色～明橙色			
1	3.5	8.7		灰褐色	多剥落	灰褐色	
1		8.6		淡赤灰褐色	白磁釉		
1	22.9	16	細斜格子文地、紐状2重菱形文	暗灰褐色～赤褐色			
5			縞状文痕	淡灰黄褐色			
							注記なく判別不明
7/8ケース							
1	9.6	1.8					
1							紛失につき未調査 Janse1947:Pl.108-a,b
1				褐色、青銅色			外側に五銖銭塊が付着 Janse1947:Pl.111-1
1	3.5	22.2		褐色、青銅色			番号重複 Janse1947:Pl.111-1
1				褐色、青銅色			7481(2)の上に重なる Janse1947:Pl.111-1
1	14.7	10.1	肩部沈線文1	灰白色～乳白色	半透明：多剥落	白色	
不明							
多数							
1							
1			縞状文痕	淡灰黄褐色			
16				淡灰黄褐色			
11			細方格文	淡灰黄褐色			
6			縞状文	淡橙色			
11			縞状文	灰褐色			
1			粗状菱形文	灰褐色			
12				灰白色			
1				灰褐色	青緑灰色(青磁釉)		
21				灰白色	多剥落		
13				赤灰白色	多剥落		
8				淡灰黄褐色			
3				灰白色	白磁釉		
11			菱形文	灰橙色			

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh 所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
	7496		Bim Son 9	甕：胴部	陶器	破片
	7497		Bim Son 9	壺：底部	陶器	破片
	7498		Bim Son 9	壺：底部	陶器	破片
	7499		Bim Son 9	甕？：底部	陶器	破片
	7500		Bim Son 9	大甕	陶器	破片
	7501		Bim Son 9	鼎脚部	陶器	破片
	7502		Bim Son 9	五銖銭	銅銭	完形：固着
92	8068	4058	Bim Son 9	壺	陶器	完形
	8069		Bim Son 9	壺：胴、底部	陶器	破片
93	7503		Bim Son 10	壺	陶器	完形
97	7504	5043	Bim Son 10	煙突付鍋	陶器	完形
96	7505		Bim Son 10	双耳小口小壺	陶器	ほぼ完形
	7506	5044	Bim Son 10	碗	陶器	ほぼ完形
	7507		Bim Son 10	甕	陶器	破片
	7508		Bim Son 10	甕	陶器	破片
99	7509		Bim Son 10	甕：口縁部	陶器	破片
98	7510		Bim Son 10	甕	陶器	破片
	7511		Bim Son 10	短頸小壺	陶器	破片
	7513		Bim Son 10	甕：胴部	陶器	破片
	7514		Bim Son 10	甕：胴部	陶器	破片
	7515		Bim Son 10	甕：胴部	陶器	破片
	7516		Bim Son 10	家形明器基礎部	陶製明器	破片
	7517		Bim Son 10	壺・甕など	陶器	破片
	7518	5045	Bim Son 10	漆器片	漆器	破片
	7519		Bim Son 10	漆器痕付土塊	漆器	破片
	7520		Bim Son 10	漆器痕付土塊	漆器	破片
138-139	7521		Bim Son 10	五銖銭	銅銭	完形：固着
	7522		Bim Son 10	青銅器痕付土塊	土塊	破片
	7523	5046	Bim Son 10	ガラス玉	玉類	
	7616		Bim Son 10	家形明器	陶製明器	破片
94	8070		Bim Son 10	壺	陶器	7/8破片
95	8071		Bim Son 10	四耳壺	陶器	ほぼ完形
	Noなし		Bim Son 10	甕	陶器	破片
	Noなし		Bim Son 10	漆器片→7520？	漆器	破片

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
3			綾杉文	赤褐色			
4				灰白色	多剥落		
11				灰黄褐色	多剥落		
1				灰褐色/赤褐色			
1			無文：肩部沈線文	灰褐色			
2				灰白色			
14							
1	38.5	25	肩部沈線文1	灰褐色	多剥落	茶褐色	
3				灰白色	多剥落		
1	18.4	11.6	肩部沈線文1	褐色	薄く釉：多剥落	灰白色チョーク	低部に円形重ね焼き痕
1	7.1	17.6	口縁部周囲に等間隔で4つ小孔を設ける。	淡灰黄褐色		淡茶褐色	外面に僅かに黒斑がみられるが、2次焼成痕は明確でない Janse1947: Pl.109-1, 1951:Fig. 125
1	5.7	3.7	肩部沈線文1に半環耳2貼付	灰褐色	多剥落	茶褐色	半環耳の穴は詰る Janse1951:Fig. 126
1				灰白色、一部ピンクがかかる	内外面灰緑釉（底部無釉）	灰白色	Janse1951:Pl.18-1
20			菱形文	淡黄褐色			
22			細方格文	灰褐色			
6		24	無文：肩部沈線文1	灰褐色/赤褐色	あり？		
30	24	16	榎状2重菱形文：肩部沈線文1	灰褐色			
11				明灰褐色			
10			網目状文？	橙色			
2			菱形文	淡灰黄褐色			
4				橙色			
1				橙色			
10				白：灰：橙			
1							
12							
1							
10塊							
3							
800				緑色：茶色			
2							
1	15.5	9.9		ピンクがかかる白褐色	薄く釉：多剥落	灰褐色	
1	22	13.4	肩部沈線2+半環耳3(4)	白褐色	あり：多剥落	茶褐色	低部に円形重ね焼き痕
多数							
1							

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh 所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
101	7524		Bim Son 12	内弯口縁鉢(7526蓋とセット)	陶器	ほぼ完形
102	7525	5047	Bim Son 12	三足盤	陶器	破片復元
100	7526		Bim Son 12	蓋(7524とセット)	陶器	ほぼ完形
	7527		Bim Son 12	壺：口縁～胴部	陶器	破片
	7528		Bim Son 12	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7529		Bim Son 12	甕：口縁部	陶器	破片
	7530		Bim Son 12	鉢：口縁～胴部	陶器	破片
	7531		Bim Son 12	四耳壺：口縁部	陶器	破片
	7532		Bim Son 12	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7533		Bim Son 12	甕：胴部	陶器	破片
	7534		Bim Son 12	小鉢	陶器	破片
161	7535		Bim Son 13	円盤状硯	石製品	完形
103	7536		Bim Son 15	甕：口縁部	陶器	破片
104	7537		Bim Son 15	甕：口縁、底部	陶器	破片
105	7538		Bim Son 15	甕：口縁部	陶器	破片
	7539		Bim Son 15	甕：口縁部	陶器	破片
	7540		Bim Son 15	胴部	陶器	破片
	7541		Bim Son 15	甕：胴部	陶器	破片
	7542		Bim Son 15	家形明器：屋根	陶製明器	破片
	7543	5048	Bim Son 15	家形明器	陶製明器	破片
	7544		Bim Son 15	家形明器：屋根	陶製明器	破片
108	7545		Bim Son 15	正方形磚	瓦磚	完形
	7546		Bim Son 15	方形磚	瓦磚	完形
107	7547		Bim Son 15	長方形磚	瓦磚	ほぼ完形
106	7548		Bim Son 15	長方形磚	瓦磚	完形
	7512		Man Thon 1A	甕：口縁部	陶器	破片
3	7820		Man Thon 1A	短頸小壺(A)	陶器	完形
7	7821		Man Thon 1A	甕	陶器	完形
14	7822	5064	Man Thon 1A	甕	陶器	完形
2	7823		Man Thon 1A	双耳壺	陶器	ほぼ完形
6	7824		Man Thon 1A	短頸小壺(B)	陶器	完形

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
1	10.2	19	口縁部沈線文2	ピンクがかる褐色	外面に緑灰釉		水滴状に釉垂れ Janse1951:Fig.132
1	2.7	26	波状文を沈線文2本が挟む文様帯が内外に2周巡る	茶褐色、灰黄褐色	薄く釉：多剥落	茶褐色	Janse1947:Pl.112-2
1	2.6	19.6	同心円状沈線文4	灰褐色	表面に灰緑釉	ピンク＋茶褐色	表面に重ね焼き痕色
9				淡黄褐色		チョーク	
4			菱形文	淡黄褐色			
13			細格子目文	灰褐色			
4				淡黄褐～黒褐色	灰釉		
3			肩部に凸稜	淡黄褐～茶褐色	灰釉		
4			細格子目文	暗橙色			
3			菱形文	橙色			
1					磁器？		
2	19	1.6					もう1点は不明
30		13.2	菱形文	淡黄褐、茶褐色			
9		10	二重菱形文	灰褐色/赤褐色	灰釉		
21		9	細斜格子文	灰黄褐色～茶褐色			
5			摩滅	灰黄褐色			
5				淡灰黄褐色		チョーク	
10			細格子文	淡赤～灰黄褐色			
10							
2							
1							
6			方格斜線文：表面	暗赤褐色			
2				暗赤褐色			Janse1947:Pl.113-2
1			斜格子文：1長側面；複合円文など；2短側面	暗赤褐色			
1			榧状2重菱形文：表面、両短側面	暗赤褐色			Janse1947:Pl.113-2
1			細方格文	灰褐色			
1	9.4	11.7	肩部沈線文1	灰白色	外面薄く釉痕	淡黄茶褐色	Janse1951:Pl.18-2
1	25.5	18.3	榧状2重菱形文：肩部沈線文1	灰黄褐色／赤黄褐色			底部円形に重ね焼き痕
1	20.8	16.2	浅い榧状2重菱形文：肩部沈線文1	淡橙黄褐色／赤褐色			
1	11.2	8.8	肩部沈線文2：小半環耳2（破損）	褐色	多剥落	茶褐色？	半環耳詰っている
1	6.7	9.9	肩部沈線文2	灰茶褐色	胴部上半内面緑釉		重ね焼きしている

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh 所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
4	7825		Man Thon 1A	短頸小壺 (A)	陶器	完形
	7826		Man Thon 1A	短頸小壺	陶器	完形
5	7827		Man Thon 1A	短頸小壺 (B)	陶器	完形
9	7828		Man Thon 1A	甕：口縁・胴部上半	陶器	破片
11	7829		Man Thon 1A	甕：口縁胴部上半	陶器	破片
10	7830		Man Thon 1A	甕①：口縁胴部上半	陶器	破片
8	7830		Man Thon 1A	甕②：口縁胴部上半	陶器	破片
12	7831		Man Thon 1A	甕：底部	陶器	破片
	7832		Man Thon 1A	甕：胴部	陶器	破片
10	7833		Man Thon 1A	甕：底部	陶器	破片
	7834		Man Thon 1A	甕：胴部	陶器	破片
	7835	5065	Man Thon 1A	砥石	石製品	破片
	7836		Man Thon 1A	鞘金具片	鉄器	破片
	7837		Man Thon 1A	鉄製長剣	鉄器	ほぼ完形
145	7838		Man Thon 1A	銅碗	青銅器	完形
143	7839	5066	Man Thon 1A	銅盂	青銅器	ほぼ完形
	7840	5067	Man Thon 1A	銅碗	青銅器	完形
	7841	5068	Man Thon 1A	銅碗	青銅器	完形
144	7842	5070	Man Thon 1A	銅双耳鍋 (鑊)	青銅器	ほぼ完形
140・141	7843	5071	Man Thon 1A	銅鼎	青銅器	完形
142	7844		Man Thon 1A	銅釜	青銅器	ほぼ完形
149	7846	5073	Man Thon 1A	半甕鏡 (獣首鏡)	銅鏡	ほぼ完形
	7847	5074	Man Thon 1A	銅帶鈎	青銅器	完形
118-124	7848		Man Thon 1A	五銖銭、宋銭 (混入か)	銅銭	完形・固着
118-124	7849		Man Thon 1A	五銖銭	銅銭	完形・固着
118-124	7850		Man Thon 1A	五銖銭	銅銭	完形・固着
	7851		Man Thon 1A	五銖銭 (王莽銭も含まれる)	銅銭	完形・固着

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
1	11.1	12.4	肩部沈線文1	淡赤灰～褐色	外面薄く灰釉	灰茶褐色	
1				灰褐色	有り		
1	9.5	13.9		淡赤灰～褐色	胴部上半緑灰色釉		重ね焼き：釉垂れ
9		17.7	榎状2重菱形文 (摩滅)	淡黄褐色	不明	不明	Janse1951:Fig.131-1,2?
1		17.1	無文：肩部沈線文1-2	赤褐色			
5	23	19.1	榎状2重菱形文：肩部沈線文1	暗赤褐色/暗黄褐色	外面緑灰釉痕		→7833と同一個体
5		19.5	榎状2重菱形文：肩部沈線文1	灰褐色/暗褐色	外面緑灰釉痕		
3			細方格文	灰褐色/赤褐色			→Noなしと同一個体
20			菱形文	灰褐色			
4			榎状2重菱形文	暗赤褐色/暗黄褐色	外面緑灰釉痕		→7830と同一個体
2			細方格文	灰褐色	痕跡有り		
1	16.8			灰色			Janse1947:Pl.122-1b
4							
1	125		柄の下部に五銖銭文				Janse1947:Pl.121-1
1	6	16	口縁部に沈線文1：胴部中央に細凸稜線1：見込に五銖銭文	青銅色			Janse1947:Pl.121-2,3,6
1	14	33	胴部に凸稜3本、半環耳1対：見込に双魚紋：裏面に光芒状(3本)凸稜	黒銅色			Janse1951:Fig.134, Janse1947:Pl.120-2, Pl.121-4,5
1	4	10	口縁部下側および胴部に各々沈線文2本	黒褐色、青銅色			Janse1947:Pl.117-2
1			口縁部に沈線文1：胴部中央に細凸稜線1：見込に五銖銭文				外面に鉄剣一部付着 Janse1947:Pl.121-2,3,6
1	11.9	28	凸稜帯が口縁部1、胴部3、底部1	青銅色			Janse1951:Pl.13-1
1	22.7	19.8	蓋上面の凸稜内部に変形四葉座文と菱形文を細線彫りで施す	褐色、青銅色			胴部にスベイサーの痕跡 Janse1947:Pl.117-1,3; 1951:Fig.133
1	27.2	32.8	胴部に3条の凸稜とその上に半環耳2対	青銅色			Janse1947:Pl.119-2
1	13.2	0.4	主紋：変形した四葉座紋と間に龍4匹 (右向)	黒銅色			旧No7418: Bim Son 3 Janse1947:Pl.118,1951: Pl.29-3
1	10.6						未確認 Janse1947:Pl.122-1a
不明							
18塊							
56塊							
15塊							未確認

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh 所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
143	7852		Man Thon 1A	銅盃破片	青銅器	破片
151	7853		Man Thon 1A	①鉄戟	鉄器	ほぼ完形
157	7853		Man Thon 1A	②鉄鑿or鉄槍	鉄器	破片
158	7853		Man Thon 1A	③鉄斧	鉄器	破片
152-154	7853		Man Thon 1A	④鉄刀or刀子	鉄器	破片
	7854	5075	Man Thon 1A	刀剣玉具	玉器	完形
	7855		Man Thon 1A	骨、貝製玉?	玉類	完形?
	7856	5076	Man Thon 1A	耳環	玉器	完形
	7857	5077	Man Thon 1A	耳環	玉器	完形
1	8074		Man Thon 1A	壺	陶器	ほぼ完形
13	8075	5115	Man Thon 1A	甕	陶器	完形
12	Noなし		Man Thon 1A	甕：口縁部	陶器	破片
	7841A	5069	Man Thon 1A	銅皿、碗?	青銅器	完形
17	7858		Man Thon 1B	短頸小壺(A)	陶器	完形
19	7859		Man Thon 1B	短頸小壺(B)	陶器	完形
20	7860		Man Thon 1B	短頸小壺(B)	陶器	完形
18	7861		Man Thon 1B	短頸小壺(A)	陶器	完形
25	7862		Man Thon 1B	甕	陶器	ほぼ完形
21	7863		Man Thon 1B	甕	陶器	完形
	7864	5078	Man Thon 1B	甕	陶器	完形
26	7865		Man Thon 1B	甕	陶器	ほぼ完形
22	7866		Man Thon 1B	甕	陶器	ほぼ完形
23	7867		Man Thon 1B	甕	陶器	完形
24	7868		Man Thon 1B	甕	陶器	完形
	7869		Man Thon 1B	短頸小壺(A)	陶器	完形
	7870		Man Thon 1B	甕：口縁～胴部	陶器	破片
28	7871		Man Thon 1B	甕：口縁部	陶器	破片
	7872		Man Thon 1B	甕：口縁部	陶器	破片
	7873		Man Thon 1B	甕：口縁部	陶器	破片

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
1							
1	54	18	不明				Janse1947:Pl.122-2
1	16	2.4					Janse1947:Pl.122-2
1	9	2.8					銅碗内より Janse1947:Pl.122-2
1	不明	3					銅碗に付着
1	0.48		トウテツ状蕨手文	緑乳白色			Janse1947:Pl.122-1c; 1951:Fig.129
不明							
2				白色			本文中では1B墓出土 Cf. Janse1947: Pl.78-1
3				黒色			本文中では1B墓出土 Cf. Janse1951: Pl.II-1
1	23	14.5	肩部沈線文1	灰白褐色	外面薄く半透明釉	淡茶褐色	
1	26.8	18.8	浅い稷状2重菱形文： 肩部沈線文1	淡灰黄褐色、 灰褐色			Janse1947:Pl.103-4
2		15.5	細方格文＋窯印文：肩 部沈線文1	灰褐色			→7831と同個体
1							未調査 Janse1947:Pl.119-1?
1	9.1	10.8	肩部沈線文1	灰黄褐色	不明	灰白色	
1	5	4.9		灰褐色	胴部上半灰釉	灰茶褐色	重ね焼きしている
1	5.2	7.6	肩部沈線文1	淡黄褐色	不明	灰褐色	
1	10.4	12.3	肩部沈線文1	淡赤～灰褐色	外面薄く灰釉	灰褐色	
1	22	17.8	稷状2重菱形文：肩部 沈線文1	淡灰黄褐色			
1	26.7	18.6	稷状2重菱形文：肩部 沈線文1	赤褐色～淡黄 褐色	緑釉垂：多剥 落		
1	18	15.6	稷状2重菱形文：肩部 沈線文2	淡灰黄褐色			
1	26.8	20	稷状2重菱形文：肩部 沈線文1	灰褐色／赤褐 色			
1	29	18.6	稷状2重菱形文：肩部 沈線文1	灰黒褐色／赤 黄褐色			
1	18	15.6	稷状1重菱形文：肩部 沈線文1	淡黄褐色			
1	17.8	13.8	稷状2重菱形文：肩部 沈線文1	暗灰茶褐色			
1				黒灰色			
10				赤褐色			
5		20	稷状2重菱形文	灰褐色	緑釉		
12				淡赤褐色			
2			細格子文	橙色			

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
	7874		Man Thon 1B	甕：胴部	陶器	破片
	7875		Man Thon 1B	甕：胴部	陶器	破片
	7876		Man Thon 1B	甕：胴部	陶器	破片
	7877		Man Thon 1B	甕：底部	陶器	破片
	7878		Man Thon 1B	取手付蓋	陶器	破片
	7879	5079	Man Thon 1B	石玉製指輪	石製品	完形
	7880	5080	Man Thon 1B	金製小玉	金製品	完形
	7881	5081	Man Thon 1B	金製小垂飾	金製品	完形
	7882	5082	Man Thon 1B	銀製指輪	銀製品	完形
	7883		Man Thon 1B	五銖銭	銅銭	完形・固着
	7884	5083	Man Thon 1B	五銖銭	銅銭	完形・固着
146	7885		Man Thon 1B	銅碗	青銅器	完形
	7886		Man Thon 1B	骨製管玉	玉類	完形
	7887		Man Thon 1B	小玉	陶器	完形
	7888		Man Thon 1B	ガラス玉	玉類	完形
	7889		Man Thon 1B	アメジスト玉	玉類	完形
162	7890		Man Thon 1B	コーネリアン玉	玉類	完形
	7891		Man Thon 1B	琥珀玉	玉類	破片
	7892		Man Thon 1B	貝製品	玉類	破片
	7893		Man Thon 1B	木片：青銅痕	木質	破片
	7894		Man Thon 1B	木片	木質	破片
15	8076		Man Thon 1B	小壺	陶器	完形
27	8077		Man Thon 1B	甕	陶器	完形
16	8078		Man Thon 1B	小壺(斜縁)	陶器	完形
29	8079	5115	Man Thon 1B	鉢	陶器	完形
150	7845	5072	Man Thon 1B	鳥文鏡	銅鏡	完形
	7789		Ngoc Am 1	短頸小壺 (B)	陶器	完形
32	7790		Ngoc Am 1	短頸小壺 (B)	陶器	完形
	7791		Ngoc Am 1	壺	陶器	完形
33	7792		Ngoc Am 1	短頸小壺 (B)	陶器	完形
	7793		Ngoc Am 1	小壺	陶器	完形
	7794	5059	Ngoc Am 1	短形小壺	陶器	ほぼ完形

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
2			菱形文	灰褐色			
39			細格子文	赤褐色			
6			菱形文	灰褐色			
3塊				橙色			
1				赤褐色			
1		1.7					Janse1951:Fig.136-2
9			四目格子文				Janse1951:Fig.136-4
13		0.6					
2							Janse1951:Fig.136-1,3
30塊							
3塊							注記なく判別不明
1	4	9.4	口縁部外側に沈線文3	黒褐色、青銅色			
19		0.3		白色			Janse1951:Fig.136-4 右
15		0.1		赤色			
4		0.3		青、黄、緑色			
1		0.3					
12	1.9	1		赤色			
5				暗赤色			Janse1951:Fig.136-4 左
1							cf. Janse1951:Fig.136-4
1							
2							
1	10.9	9.7	肩部沈線文1	白褐色	外面薄い半透明釉	灰褐色	粗面底部に緑釉垂れる
1	25.5	19.2	稷状2重菱形文：肩部沈線文1	淡灰黄褐色			
1	10.3	9	肩部沈線文1	淡橙～淡灰黄褐色			
1	11.1	33	口縁部下と胴部上方に沈線文各1：胴部に浅い稷状菱形文タタキ、下方ナデ消し	外面：淡橙、黄褐色 内面：淡橙色	外面薄い半透明釉、多剥落し不明	淡褐色	Janse1947:Pl.102-4
1	11	0.33	内区：主紋に鳥紋および乳が各6、周囲に擬似銘帯と櫛歯紋帯 外区：据歯紋帯、二重線据歯紋帯	暗緑色			ピーボディでMàn Thôn 1 Aに誤って記載 Janse1947:Pl.120-1
1							
1	7.2	9.4	胴部中央に浅い沈線文1	褐色	胴部上半に釉	ピンク＋白褐色	重ね焼きをしている
1			胴部中央に浅い沈線文2				
1	7	10.4		白褐色	胴部上半に釉	灰褐色	重ね焼き：歪み大 Janse1951:Pl.18-3
1							
1				白褐色	なし	灰褐色	

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh 所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
34	7795		Ngoc Am 1	鼎	陶器	完形
31	7796		Ngoc Am 1	壺	陶器	完形
	7797		Ngoc Am 1	小壺？	陶器	完形
36	7798		Ngoc Am 1	大甕	陶器	完形
30	7799		Ngoc Am 1	壺	陶器	完形
35	7800		Ngoc Am 1	池形明器	陶製明器	破片
	7801		Ngoc Am 1	甕：口縁部	陶器	破片
	7802		Ngoc Am 1	短頸小壺？	陶器	破片
	7803		Ngoc Am 1	短頸小壺？	陶器	破片
	7804		Ngoc Am 1	甕：口縁部	陶器	破片
	7805		Ngoc Am 1	短頸小壺？	陶器	破片
	7806		Ngoc Am 1	甕？	陶器	破片
	7807		Ngoc Am 1	壺	陶器	破片
	7808		Ngoc Am 1	短頸小壺(B)	陶器	破片
	7809	5060	Ngoc Am 1	紡錘車	陶製明器	完形
37	7810	5061	Ngoc Am 1	変形甕形明器	陶製明器	ほぼ完形
	7811	5062	Ngoc Am 1	家形明器(1)	陶製明器	完形
	7811		Ngoc Am 1	家形明器(2)	陶製明器	完形
	7812		Ngoc Am 1		陶製明器	破片
	7813		Ngoc Am 1	家形明器：屋根	陶製明器	破片
	7814		Ngoc Am 1	家形明器：屋根	陶製明器	破片
	7815		Ngoc Am 1	方形硯	石製品	完形
155	7816		Ngoc Am 1	①鉄刀: 身部	鉄器	破片
155	7816		Ngoc Am 1	②鉄刀:中茎	鉄器	破片
	7817		Ngoc Am 1	五銖銭	銅銭	完形：固着
	7818	5063	Ngoc Am 1	ガラス玉	玉類	完形
	7819		Ngoc Am 1	歯もしくは人骨	人骨	破片
38	8072	5111	Ngoc Am 1	小壺	陶器	完形
39	8073	5113	Ngoc Am 1	三足釜形器	陶器	完形
	7735		Phu Coc 1	短頸小壺	陶器	完形
	7736		Phu Coc 1	短頸小壺(B)	陶器	完形
	7737		Phu Coc 1	短頸小壺(A)	陶器	ほぼ完形
109	7738		Phu Coc 1	壺	陶器	完形

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
1	12.5	10	胴部中央に沈線文1	やや赤みを帯びた褐色	外面に灰釉	黄褐色	把手の孔は詰っている Janse1947:Pl.75-2
1	19.6	12.2	肩部沈線文1	灰褐色	半透明の薄い釉	灰色	
1							
1	36	26.8	無文：肩部沈線文1＋円形貼付文2	灰褐色			Janse1947:Pl.102-2
1	20.1	12.2	肩部沈線文1	白褐色	半透明の薄い釉	灰黄褐色	
1	7	13.8		明赤褐色			Janse1947:Pl.72-2
44			菱形文				
3					有り		
3							
4					有り		
8							
4							
1							
1							
1	3.5			灰黄褐色			Janse1947;Pl.145-3 b,146-5
1	32	14	両目、鶏冠に貼り付けの痕	灰黄褐色		灰茶褐色	Janse1947;Pl.72-1
1				淡橙色、淡灰黄褐色			母屋のみ 屋根部取り外し可能 Janse1947;Pl.73-2
1				淡橙色、淡灰黄褐色			基礎部、母屋、屋根部分など細部に分解可能 Janse1947;Pl.73-1, 74
14							
1							
9							
1				灰色			
1	8.8	2.4					
1	6.4	2.2					
5							
5000				深い青			Janse1947;Pl.75-1
不明							
1	8.2	8	肩部沈線文1	茶褐色、淡黄褐色	半透明の薄い釉	茶褐色	
1	12	10	口唇部内側に横ナデの沈線文:胴部に沈線文1	淡灰黄褐色、淡灰橙色			Janse1947;Pl.75-2
1				灰白色			
1				灰白色			
1				灰褐色	灰釉		
1	22.6	16.2	円形貼付文：肩部沈線文1	白褐色	灰釉	茶褐色	

図版番号	Peobody所蔵番号41-63/60-	BTLS T.P. HoChiMinh 所蔵番号	出土地	個体名称	分類	遺存状況
110	7739		Phu Coc 1	双耳壺	陶器	破片
	7740		Phu Coc 1	甕	陶器	破片
111	7741		Phu Coc 1	樽形甕（三角縁甕）	陶器	破片
112	7742		Phu Coc 1	甕：口縁部	陶器	破片
	7743		Phu Coc 1	短頸小壺(A)	陶器	破片
	7744		Phu Coc 1	内弯口縁鉢	陶器	破片
	7745		Phu Coc 1	甕	陶器	破片
	7746		Phu Coc 1	甕：口縁～胴部	陶器	破片
	7747		Phu Coc 1	家形明器	陶製明器	破片
113	7748		Phu Coc 1	灯座：脚部	陶器	破片
	7749	5057	Phu Coc 1	方形石版/硯	石製品	完形
	7750		Phu Coc 1	銅釦	青銅器	ほぼ完形
	7750		Phu Coc 1	五銖銭	銅銭	完形：固着
115	7784		Vuc Trung	盤口壺	磁器	破片
	7785		Vuc Trung	甕	陶器	破片
	7786		Vuc Trung	変形甕形明器	明器	破片
	7787		Vuc Trung	家形明器	明器	破片
	7788		Vuc Trung	漆器付土塊	漆器	破片
	7734		Lien Huong 3	明器：屋根	陶製明器	破片
114	Naなし		Lien Huong 3	甕：口縁部	陶器	破片
	Naなし		Lien Huong 3	褐釉壺：口縁胴部	陶器	破片
116	7953		Tam Tho Kiln 1 A	瓦当	瓦磚	破片
117	7953		Tam Tho Kiln 1 B	瓦当	瓦磚	破片

個数	器高全長cm	口径器幅cm	装飾・文様	胎土色調	施釉	下地	備考・ヤンセ報告書図版
12	15.3	12.2	肩部沈線文1＋半環耳2	白褐色	灰緑釉	紅褐色	
34			菱形文	灰、橙色			
12	20	16	網目状文	灰褐色	灰釉痕		
65		20	菱形文	灰褐色	灰釉痕		
1				淡赤～黄褐色			
2				淡黄褐色	透明釉		
1			細方格文	灰褐色			
4				灰、橙色			
11				赤橙色			
2		4.5		灰褐色			
2							Janse1947:Pl.67-2
2				青緑、白色			
3 塊				青緑、白色			
4			肩部沈線文2	灰白色	内外面青灰釉		
1			菱形文	淡灰黄褐色			
1				淡赤灰褐色	釉剥落		Janse1947:Pl.124-1
16				淡赤灰褐～橙色			
1							
1				淡灰黄褐色			
複数		21.6	網目状文＋綾杉文	淡黄褐色			黒色土付着
複数		21.6					
1		14.4	幾何学文	赤褐色～灰黄褐色			Janse1947:Pl.145-3-a
1		13.2	擬似蓮華文	赤褐色～灰黄褐色			報告中 1 Aとの記載ミス Janse1947:Pl.145-3-g

C-2 「瓦」 胎土もキメの粗いいわゆる「瓦質」のものである。これらは墳頂部分の攪乱に伴い混入したものと思われるが、器面に石灰状の粉が付着していることも多く、主体部自体に伴う可能性も残る。

(3)「丸瓦」：ビムソン3号墓の1例(図9-62)は、半円筒状の瓦片と推定できる。端部平坦面で厚みは1.4cmある。表面には縄蓆文、裏面には布目圧痕がよく残る。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は細かく軟質である。

(4)「板瓦」：同じくビムソン3号墓の1例である(図9-63)。長方形板状の瓦と推定できる。長辺の断面は四分の一程度の円弧を描き、短辺の断面は楔状を呈し、上面(表面)が平坦で下面(裏面)が緩くカーブしつつ細くなる。表面は斜方向の縄蓆文、裏面ではナデ調整によって仕上げている。表面にはチョーク状の灰褐色の土が付着している。

(5)「瓦当」：参考のためタムト1A・1B窯出土の瓦当資料2点を加えておく。1点は半円状の突起の周囲に幾何学文帯、櫛歯文帯がめぐる(図19-116)⁽²²⁾。もう1点は低い半円状の突起の周囲に、細い花卉状の窪みで表現された「蓮華文」を配する(図19-117)⁽²³⁾。2点とも報告書中ではタムト1A窯を代表する重要な資料であるが、注記によると後者は1B窯出土となっており、何らかの理由によって誤って報告されたい。

③……………陶器の型式学的検討と年代観

前節で墓に副葬された陶器の器種について個別に説明を加えてきた。こうした器種がまとまってそれぞれの墓あるいは墓室において副葬されていたわけである。こうした墓あるいは墓室単位の一括遺物を相対的に比較し、その型式学的な変化過程を類推するために、図20・21のように一括遺物単位で器種ごとに型式的な比較を試みてみたい。

型式学的な比較において最も変化過程が理解しやすい器種として壺と甕が挙げられる。いわばこうした器種は副葬陶器として最も普遍的なものであり、ほぼすべての墓葬あるいは墓室に存在しており、比較が可能である。また胎土と焼成状態から壺はグループ1に、甕はグループ2・2'に属しており、製作場所や窯がそれぞれ異なる可能性がある。

壺の製作にあたって口縁端部の形態が特徴的である。外反する口縁端部を指でつまみ上げるようにして回転ナデを施すため、口縁端部が幾分断面三角形に突出している。しかもこの口縁端部の特徴はやや直立気味に段を以て立ち上がるものとそうでないものが認められる。一方全体的な器形の特徴は、胴部中央部を境にそれ以下を削り調整することにより、その境を頂点として器形が屈曲している。また、胴部最大径がこの胴部屈曲部近くにあるものと肩部近くにあるものが見られる。こうした点を基に、壺の相対的な変化方向を類推してみたい。まず変化方向の属性として肩部の張りの成立と器形の全体的な変化に着目したい。図20に示すように、胴部最大径が胴部中央の屈曲部にあり、肩部が張っておらず、なで肩を形成しているマントン1A号墓とゴックアム1号墓が挙げられる。胴部最大径はやはり屈曲部にあるが、屈曲部より上部が垂直気味に立ち上がり明瞭に肩部を形成するものとしてビムソン3号墓・5号墓・7号墓・10号墓が挙げられる。また、口縁端部のつまみ上げ部に注目するならば、上記した区別に対応するように変化が見られる。図20に示すよう

に、マントン1 A号墓(1)とゴックアム1号墓(30・31)のものは幅広のつまみ上げが認められるが、ビムソン3号墓(46)とビムソン7号墓(71)のものは断面三角形の幅の狭いつまみ上げに変化している。このつまみ上げ部の変化を成形時の手抜きとしての変化として考えるならば、幅広にしっかりとつまみ上げられるマントン1 A号墓、ゴックアム1号墓、さらに端部を僅かに三角形形状につまみ上げるビムソン3号墓、断面の三角形がより凝縮するビムソン7号墓、さらにそのつまみ上げが痕跡的になるビムソン10号墓(94・93)の順に口縁端部のつまみ上げが退化しているように見える。これはこのような相対的な順番で陶器が変化していったものではないかと想定されるのである。もちろん完全に口縁端部のつまみ上げを行わない壺成形の系譜がビムソン3号墓以降に認められる(47・73)が、これは系譜を異にするものとして理解しておきたい。このような変化方向が妥当であるならば、この変化に応じて、壺の口径は胴部最大径あるいは肩部径に比して次第に小さくなる傾向にあることが明瞭に見て取れる。さてこうした変化方向で壺の胴部形態に注目するならば、先の区分に応じるように、全体に寸胴形の形態から縦長のスマートな形態に変化しているように見てとれる。これは先に示したように、肩の張りが次第に明確化していることと相関した関係にあるのである。肩の張りが幾分認められるゴックアム1号墓から、より肩の張りがでてくるビムソン3号墓、さらにより肩の張りが明瞭になるビムソン7号墓とビムソン10号墓である。こうした口縁端部の特徴や肩部の張りといった変化の属性以外に、頸部が次第にすばまりかつ口縁の立ち上がりが次第に縮小していく傾向も認められる。またビムソン3号墓以降の形態変化には、こうした変化傾向以外に全体的に小型化していく傾向が認められる。したがって、口縁端部の土器成形の手抜きと胴部形態を中心とする器形変化が、上記したような相対的な順番で型式変化していると考えられるのである。こうした変化方向が古から新へと変化する方向であるならば、フーコック1号墓の壺はマントン1 A号墓の壺より相対的に古いものである可能性が想定できる。その理由は、口縁のつまみ上げがマントン1 A号墓よりシャープであり、複合口縁に近似した形態を示しているからである。

さて短頸小壺の場合、マントン1 A号墓・1 B号墓では大型(4)と小型(6)に分かれているが、ゴックアム1号墓(32・33)やビムソン7号墓(79)では小型のみが存在している。また、マントン1 A・1 B号墓では胴部屈曲部の位置が胴部下方に認められるが、ゴックアム1号墓では胴部屈曲部が胴部中央に、ビムソン7号墓ではより胴部上方に上がっている。小壺・短頸広口壺といった器種群の場合においても全般的にいて同様な胴部最大径の位置の変化が認められる。すなわち、マントン1 B号墓(15)では胴部が短径小壺のように屈曲していたのが、ビムソン2号墓(40)では胴部最大径が胴部中央へ、ビムソン7号墓(76・77)では胴部最大径が肩部へと移動している。これらの型式変化も壺の変化と呼応した様式的な変化を示していると言えよう。

甕の側面形の変化は、やはり壺の相対的な変化と同様であると想定することができる。壺の変化とは、胴部最大径が次第に上方へ移動し、なで肩から肩が張る方向への変化であったが、壺に共伴する甕の変化を壺の相対的な変化の方向に沿ってみたい。共伴する甕も、器高に対して口縁部径が相対的に小さくなる傾向にある。この変化傾向は基本的に壺の変化傾向と同様であるといえることができるであろう。肩部の張りもビムソン7号墓とビムソン10号墓では明確になっており、壺の変化に対応して甕も様式的な変化を示しているといえることができる。なお、叩き文様においては、例

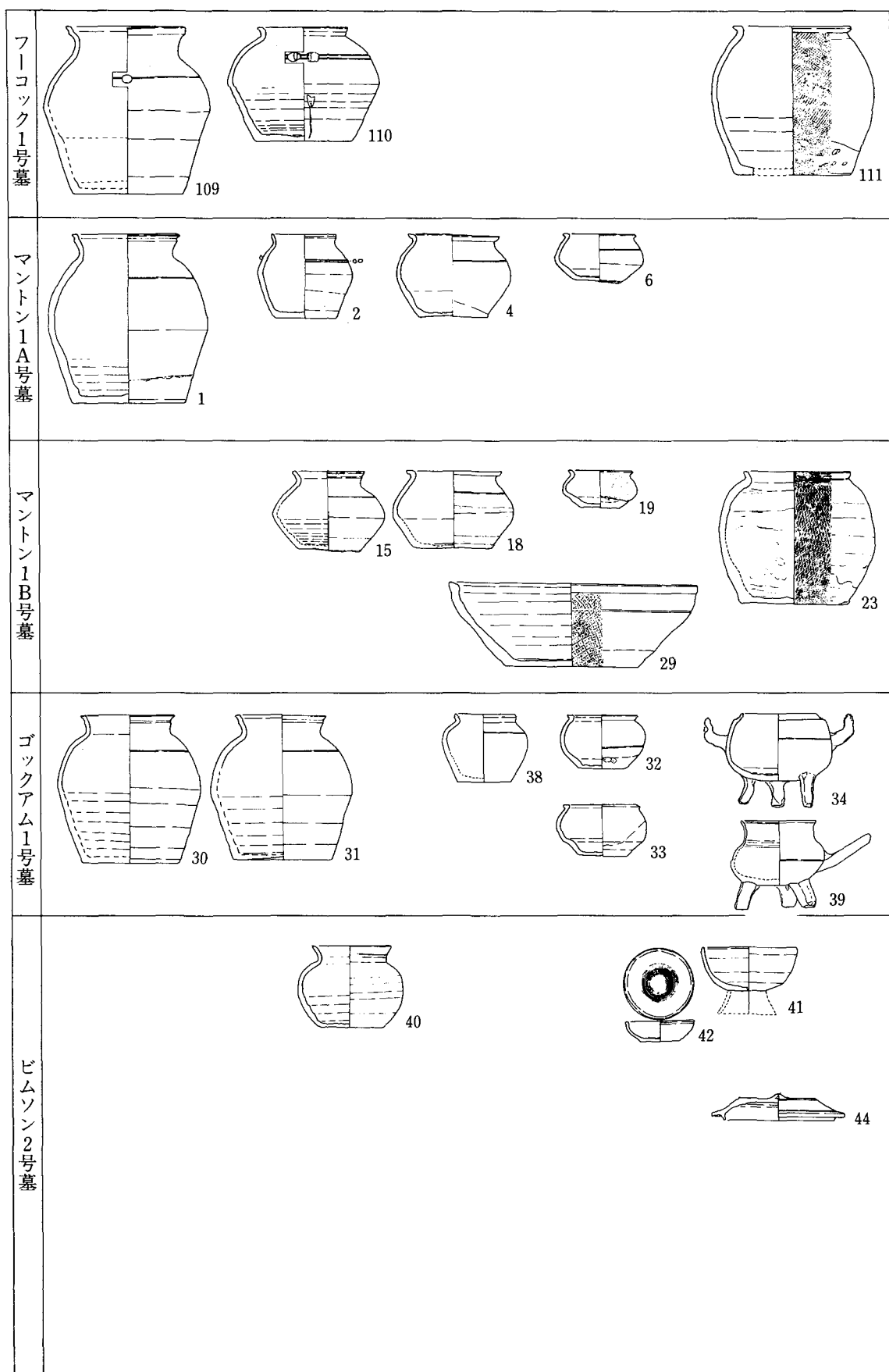
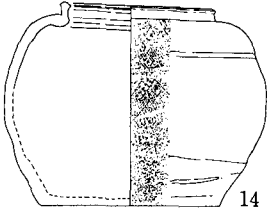


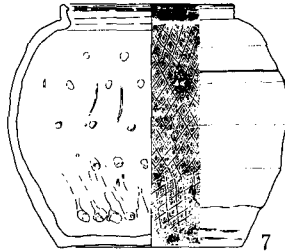
図20 タインホア漢墓の副葬陶器の変遷(I) 縮尺1/8



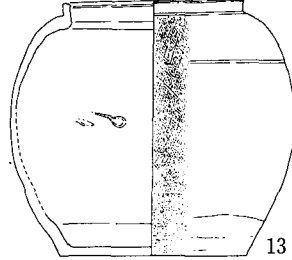
112



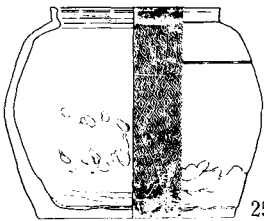
14



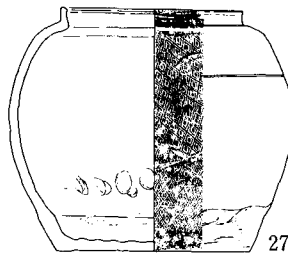
7



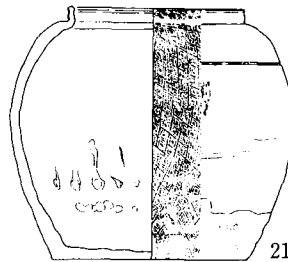
13



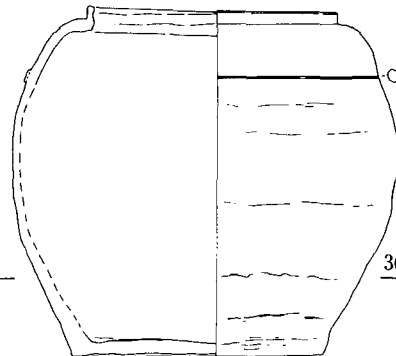
25



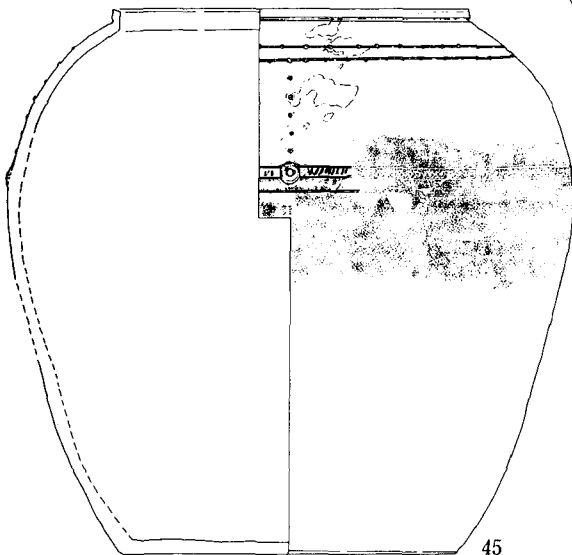
27



21



36



45

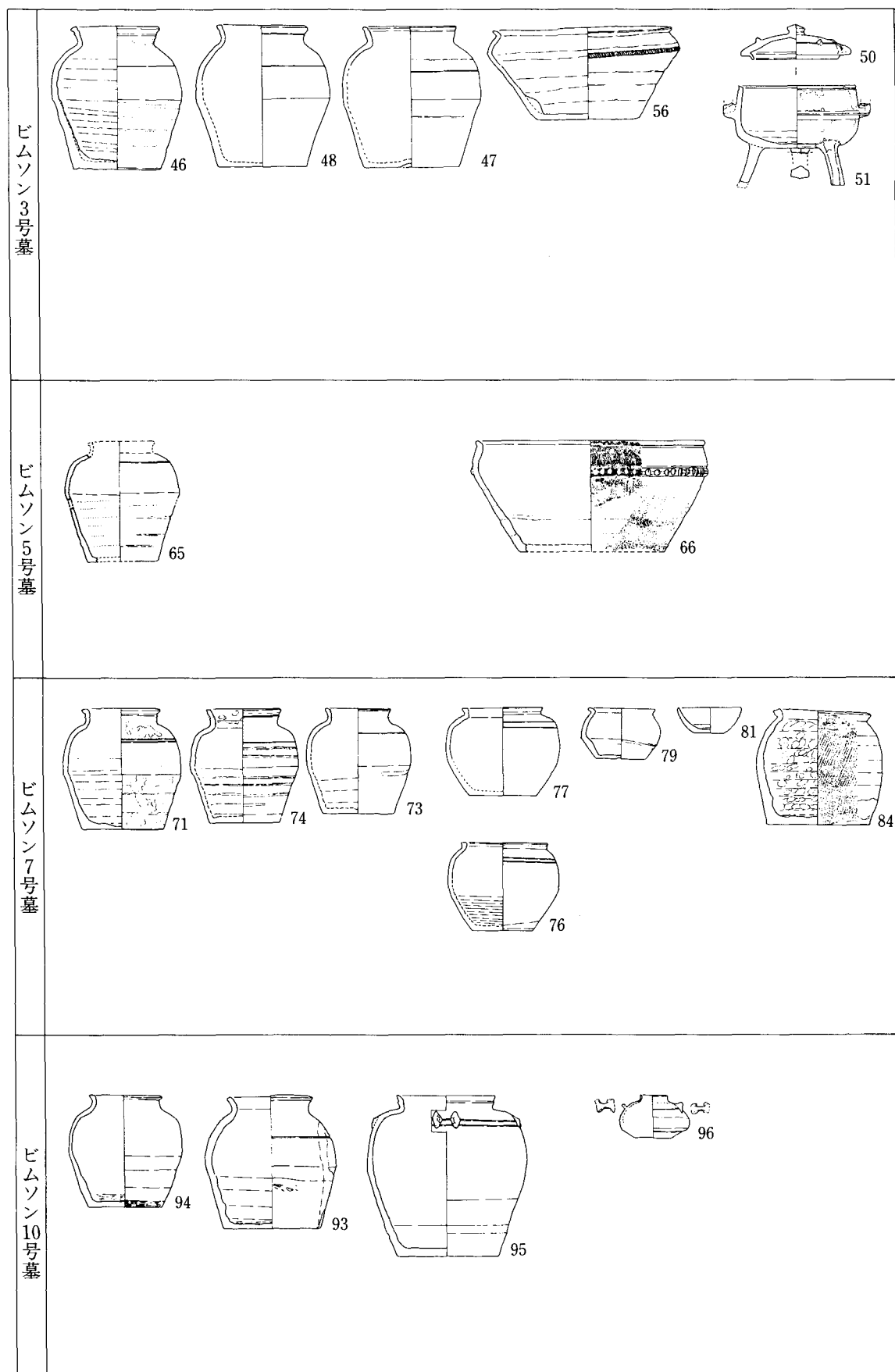
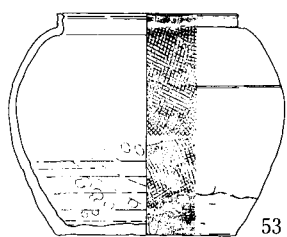
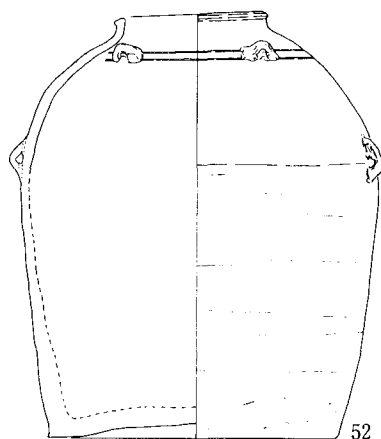


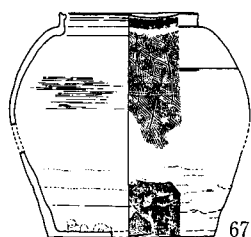
図21 タインホア漢墓の副葬陶器の変遷(2) 縮尺1/8



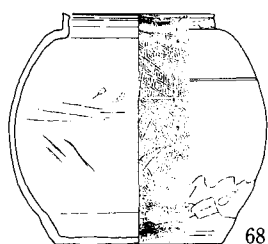
53



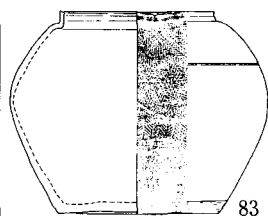
52



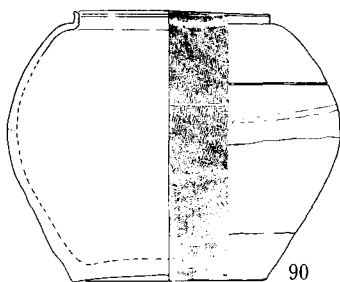
67



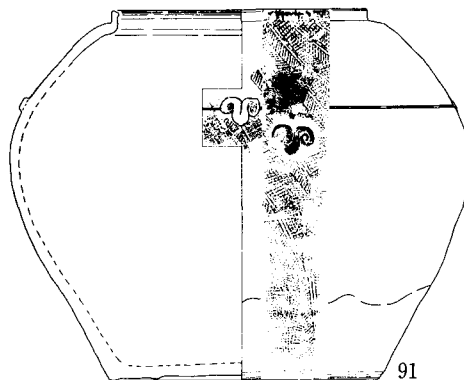
68



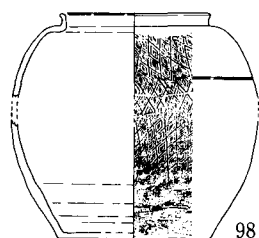
83



90



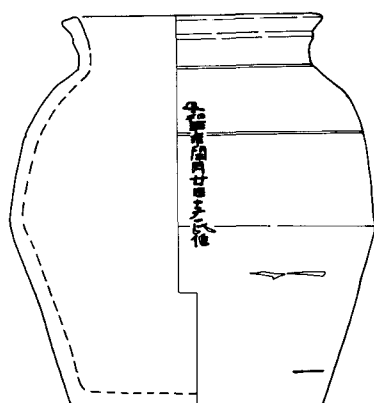
91



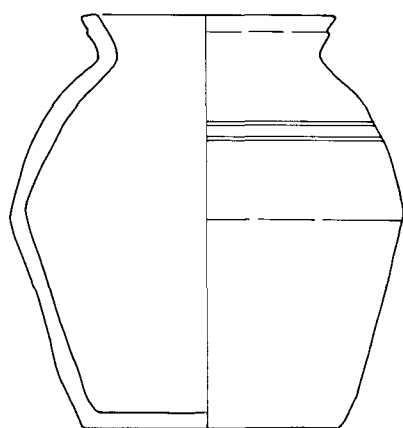
98



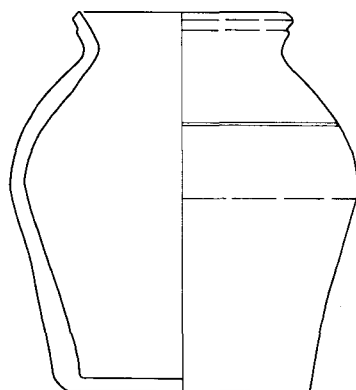
99



1 建和三年銘 (A D149年)



2 大理市下関城北
嘉平年 (A D172~178年)



3 広州漢墓M5080
(A D214~240年頃)

図22 灰釉壺の変遷

例えば菱形文では杓状に盛り上がる杓状菱形文から多重の菱形文へと変遷している。しかし墓葬間の相対的な新旧差は示されても、叩き文様差から微妙な年代的位置づけを決定することは今のところ難しい。なお、マントン1 A号墓より古いと考えたフーcock 1号墓の甕は口縁が外反しており、マントン1 A号墓以下の変化していく甕と異なった形態的特徴を示している。

この他、鉢において、マントン1 B号墓 (29) とビムソン3・5号墓 (56・66) とでは形態差を示しており、前者では口縁が屈曲部から立ち上がるのに対して後者では口縁が内弯しさらに口縁端部で外反する形態を示しており、明瞭な違いが示される。

以上の主な器種における形態変化が、様式的な傾向を示しながら変化していく系譜を理解できたものと思われる。こうした型式変化の方向性が年代軸において古いものから新しいものへ変化している方向性を示しているのかどうかを、絶対年代を示しうる事例から検証してみたい。

まず年代の定点として、一括遺物に基づく相対的な型式変化で最も顕著な変化を示したのが壺であった。この壺に関して絶対年代を付与できる最適なもの、銘文を持つ壺である。この事例は、ブリュッセル王立美術歴史博物館所蔵のクレマン・ユエ・コレクションの中に存在する。「建和三 (149) 年」銘の灰釉壺である (図22-1)。クレマン・ユエ・コレクションはベトナム出土のものであることは確かであるが、正確な出土地点は不明である。銘文は「建和三年閏月廿日李氏作」とあり、焼成前に篋描きによって記されている。年号は漢王朝のものであるが、陶工の銘が入るなど漢王朝の同時期の陶器にはこうした銘文書式は見られない。陶器は灰白色の精良な胎土で、外面には灰釉が施されている。こうした特徴や口縁部の形態、さらに胴部の屈曲部以下を篋削りする点などの諸属性は、まさ

しくタインホア省の漢墓出土の壺と同じである。口縁部の幅広のつまみ上げや、胴部最大径が胴部屈曲部にあり肩が張らない形態的な特徴は、マントン1 A号墓やゴックアム1号墓と同じ形態を示している。これらのうち「建和三年」銘灰釉壺は胴部最大径である屈曲部の位置が、器形全体でも胴部下半に近い位置にある点などを考慮すると、マントン1 A号墓に最も近似する形態的な特徴を

有しているのである。しかし口縁部のつまみ上げの特徴から見れば、マントン1 A号墓とゴックアム1号墓の中間に位置するものと考えられる。したがって、マントン1 A号墓とゴックアム1号墓の中間を紀元後150年と考えることができるのである。

次に絶対年代を与えることのできる証拠として、雲南省大理市下関城北後漢墓出土の灰釉陶壺があげられる。⁽²⁵⁾報告では青磁と記されているが、その釉色などから判断すれば灰釉陶であることは間違いない。また、図22-2に示された壺の器形的な特色や大きさは、まさしくここで議論しているベトナム漢墓出土の灰釉壺と同じものである。口縁端部が僅かに段をなし、胴部中央部で屈曲する特徴は、ベトナム漢墓出土灰釉壺と同じ特性を示している。それらの特徴はここで分析しているゴックアム1号墓のものに近いが、器形全体はゴックアム1号墓のものに比べスマートであり、器形全体はビムソン3号墓に近い形態を示している。しかし撫で肩である点は、よりゴックアム1号墓に近い特色を表している。ゴックアム1号墓とビムソン3号墓の中間段階に位置づけることができるであろう。さてこの下関城北磚室墓からは紀年銘磚が出土している。この紀年銘は「嘉平年十二月造」であり、AD172年～178年に相当している。ゴックアム1号墓からビムソン3号墓の間をほぼAD175年とすることができるであろう。

次の年代の定点は、同種の灰釉壺(図22-3)が出土した広州漢墓5080号墓である。⁽²⁶⁾広州漢墓5080号墓は、他の広州漢墓の副葬陶器と比べ特異な様相を呈しており、異質な存在である。また、灰釉陶器である点も特徴的である。その中にやはり灰釉の壺が存在している。この灰釉壺は口縁端部を僅かにつまみ上げており、胴部中央で屈曲しており、その形態的な特徴はヤンセ第3次調査のものと同じである。その中でも、肩部の形態あるいは全体的なプロポーションはビムソン10号墓に最も近いものであると考えられる。広州漢墓5080号墓の実年代は副葬されていた対置式神獸鏡から類推することができる。神獸鏡の型式分類と実年代を推定した上野祥史によれば、⁽²⁷⁾外区文様が渦文で半円形状b式からなるもので、対置式神獸鏡ⅢA式にあたる。この鏡の年代は上野の言う第4期に相当し、3世紀初頭～3世紀第二四半期中葉(AD214～240年)にあたり、この墓の年代もほぼ同じ時期であろう。これをヤンセ資料の実年代の根拠の一つとしうるであろう。したがってビムソン10号墓を3世紀前葉と考えることができるであろう。

またヤンセ第3次調査以外のベトナム資料を参照すると、型式的にマントン1 A・1 B号墓より古いと考えたフーコック1号墓の壺は、木榔墓であるゴックラック2号墓の壺(図23-1)に見られるような複合口縁状の立ち上がりが変化したものと想定できる。木榔墓は相対的に磚室墓より古いことは、漢代の墓室構造の変遷において明らかなことであることから、こうした壺の変遷を支持するものである。ゴックラック2号墓にみられる小壺(図23-2・3)においても、複合口縁状の立ち上がりが認められる。こうした複合口縁状の立ち上がりが退化したものが、磚室墓であるドンターク1号墓(図24-1・2)にも認められる。⁽²⁸⁾この小壺は胴部屈曲部が明瞭であり、マントン1 B号墓(図20-15)に近い様相を示している。しかしマントン1 B号墓の小壺は、口縁のつまみ上げが既に退化している。ドンターク1号墓の小壺のような明確な口縁のつまみ上げは、マントン1 B号墓より古いものであることが想定できるのである。⁽²⁹⁾

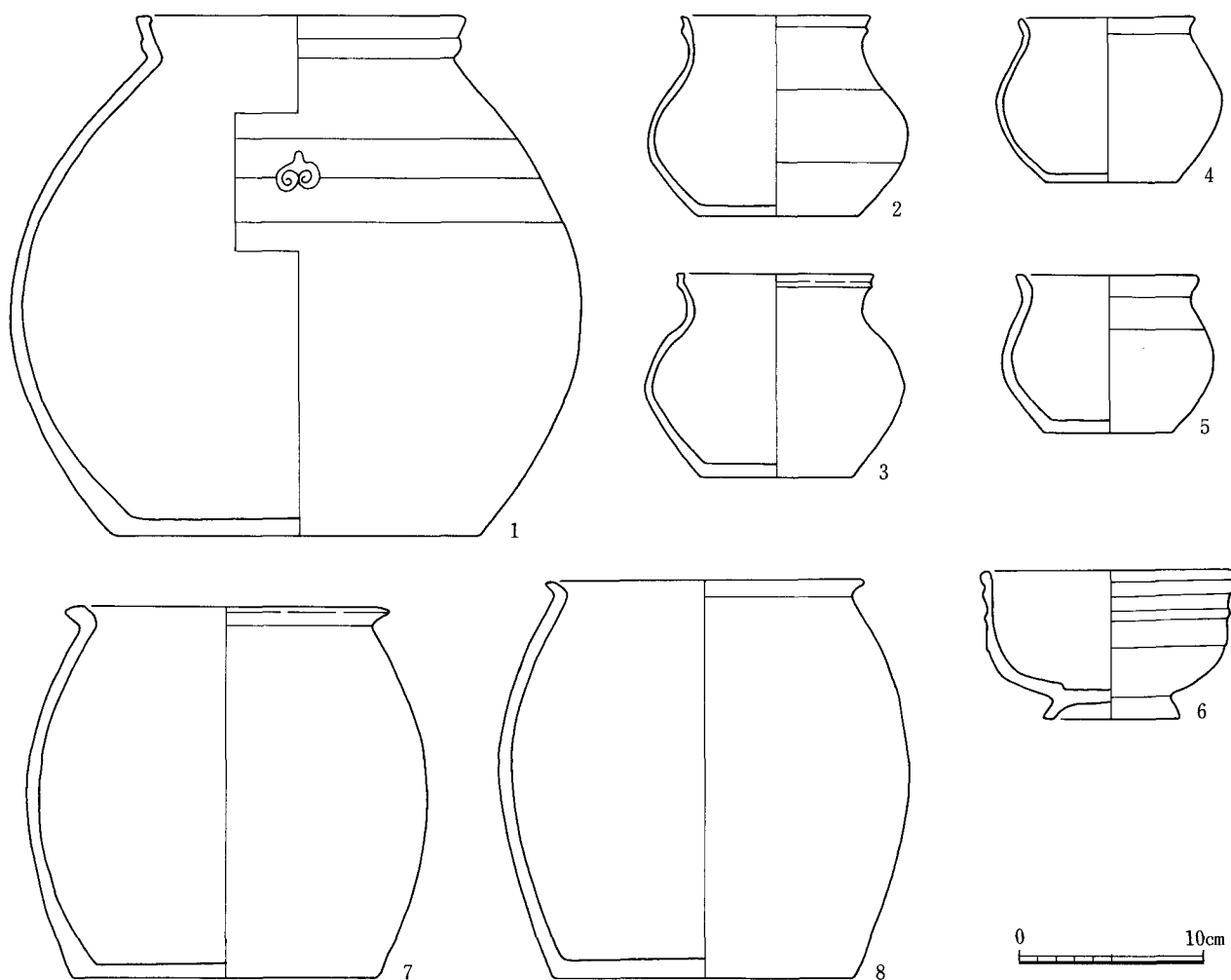


図 23 ゴックラック 2 号墓出土副葬陶器

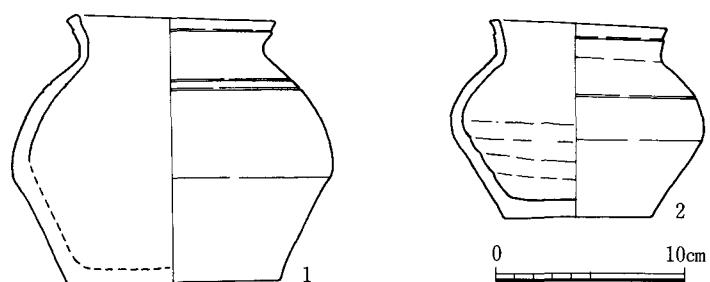


図 24 ドンターク 1 号墓出土副葬陶器

④……………漢墓出土銅錢

副葬陶器とともに副葬されたものに銅錢がある。これらの大半は五銖錢である。この度の再調査では副葬銅錢にも注目したが、錆がひどく判別が不可能であったり、複数の銅錢が固まって癒着してしまい、個々の銅錢を1枚ずつ検討することができない場合が多かった。ここでは可能な限り観察できたものを、墓葬別に検討してみたい(図25)。今回観察ができた銅錢はマントン1A号墓、ビムソン4号墓、ビムソン7号墓、ビムソン10号墓の銅錢である。これらの銅錢はほとんどが五銖錢であるが、文字を持たない無文錢も存在している。五銖錢はこれまで『洛陽焼溝漢墓』に分類案が示されており、後漢代における時間差を示すものでもあった。⁽³⁰⁾このうちヤンセ第3次資料には『洛陽焼溝漢墓』でいう第Ⅲ・Ⅳ型五銖錢が存在している。靈帝以降とされる第Ⅴ型五銖錢は背面の文様から明瞭に区分できるが、この型式の五銖錢は存在しない。第Ⅲ型と第Ⅳ型五銖錢の区分は「五銖」の文字の字体から区分できるが、必ずしも明瞭ではない。第Ⅲ型五銖錢は「五」の字がふっくらしているのに対し第Ⅳ型のものは直線的である。また「銖」の隣の「朱」の字も、Ⅲ型は丸く大きめであるのに対し、Ⅳ型は角張って小さくこじんまりしている。また、ここで五銖錢Ⅲ型とⅣ型に分ける明瞭な属性として、五銖錢の縁にある外郭がⅢ型では幅広であるのに対し、Ⅳ型では幅狭くなっている突線状を呈している。こうした区分に応じて上記した墳墓単位で五銖錢の区分を見ていくと図25と表2のようになる。マントン1A号墓ではⅢ型・Ⅳ型五銖錢が出土している。ビムソン4号墓ではⅣ型五銖錢のみが出土し、ビムソン7号墓ではⅣ型五銖錢と無文錢が出土している。また同じⅣ型五銖錢でも、五銖錢の文字は、マントン1A号墓、ビムソン4号墓、ビムソン7号墓と次第にか細くなっている。さらにⅣ型五銖錢において、マントン1A号墓、ビムソン4号墓、ビムソン7号墓を比較すれば、相対的にこの順に重量が軽くなっており、貨幣の粗雑化が見て取れる。また、ビムソン10号墓では無文錢のみである。無文錢は総じてビムソン4・7号墓出土五銖錢より重い傾向にある。

こうした五銖錢の形式的な区分や粗雑化あるいは無文錢との組み合わせなどから、マントン1A号墓、ビムソン4号墓、ビムソン7号墓、ビムソン10号墓の順に新しい傾向を示しており、副葬陶器の変遷とほぼ同じ歩みを示していることになる。なおビムソン4号墓では僅かに小型の甕しか遺存していないが、その胴部の形態的特徴はビムソン3号墓やビムソン7号墓に類似しており、副葬土器の編年との矛盾は存在しない。『洛陽焼溝漢墓』によれば、Ⅲ型五銖錢は建武十六年(AD40年)以降に鑄造され、Ⅳ型五銖錢は桓帝以降(AD146年)と考えられている。Ⅲ型五銖錢とⅣ型五銖錢が共伴するマントン1A号墓は、2世紀中葉以降と言うことができ、副葬陶器の年代推定と対応した年代観を呈している。また、無文錢は『洛陽焼溝漢墓』によれば桓帝・靈帝期に存在する。さらに董卓が初平元年(AD190年)に小錢を鑄造しているが、これは無文字で郭もないという。⁽³¹⁾ここで出土している無文錢がこれに相当するものであるか明確ではないが、年代的には適合している。ともかくこうした銅錢の変遷は、時間差を反映していることは間違いないと言える。

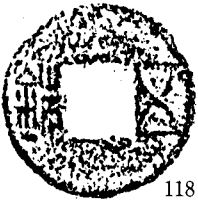
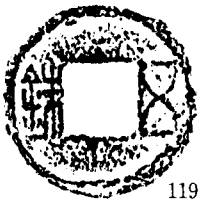

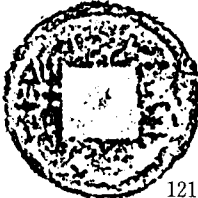
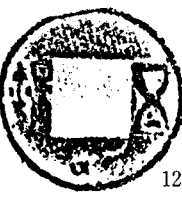
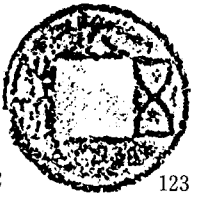


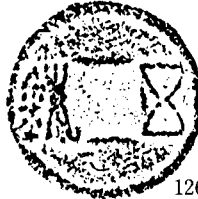


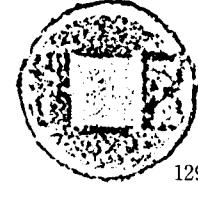





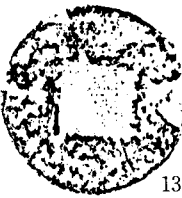

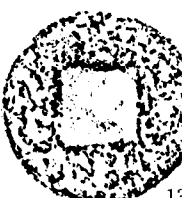
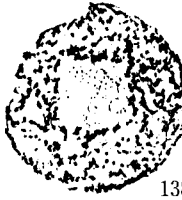

	五銖銭Ⅲ型	五銖銭Ⅳ型	無文銭
マントン1A号墓	 118  119  120  121	 122  123  124	
ビムソン4号墓		 125  126  127  128  129  130  131  132	
ビムソン7号墓		 133  134  135	 136  137
ビムソン10号墓			 138  139

図 25 五銖銭の墓葬別変遷（原寸）

表2 墓葬別五銖銭の内容

墓葬名	五銖銭Ⅲ型 (番号)	重さ (g)	五銖銭Ⅳ型 (番号)	重さ (g)	無文銭 (番号)	重さ (g)
マントン1A 号墓	118	3.531	122	2.958		
	119	3.217	123	2.17		
	120	3.051	124	2.61		
	121	3.914	平均 (n=3)	2.579		
	平均 (n=4)	3.428				
ビムソン 4 号墓			125	2.019		
			126	3.09		
			127	2.512		
			128	2.095		
			129	2.082		
			130	1.954		
			131	1.529		
			132	2.238		
	平均 (n=8)	2.190				
ビムソン 7 号墓			133	1.909	136	2.756
			134	1.867	137	2.67
			135	1.673	平均 (n=2)	2.713
			平均 (n=3)	1.816		
ビムソン10 号墓				138	2.821	
				139	2.488	
				平均 (n=2)	2.655	

⑤……………漢墓出土銅器・鉄器

ヤンセ第3次調査資料の内、銅器が出土したのはマントン1A号墓とビムソン7号墓である。特にマントン1A号墓からは豊富な青銅容器が出土している。これらの青銅容器の特徴は漢代の南中国に特徴的な青銅容器と同じ特徴を示している。特に鼎の特長は南中国にみられる越式鼎の範疇に属するものである。これらの青銅容器の年代は、広州漢墓後漢後期墓と編年された銅器群と同じ年代観に属するものと考えられる。図26-140~145はマントン1A号墓出土の一括遺物である。これらが広州漢墓後漢後期墓すなわちAD50年~200年にかけてのものであることは様式的に明確であるが、より詳細な年代を知りたいところである。鼎は横倉雅幸らによってC類Ⅲ式に分類されたものに属する。同種のものは、広州漢墓5036号墓に認められる。マントン1A号墓の鼎の耳は幾分方形気味になっており、広州漢墓5036号墓より年代的に幾分新しい傾向にある。広州漢墓5036号墓は伴出する細線式獣帯鏡から1世紀後半と考えられるが、マントン1A号墓のものもそれに近い時期であろう。むしろマントン1A号墓の鼎には鐙が付いており、この点は越式鼎の中でもベトナムの地域的な特徴を示していると言えよう。より詳細な年代を判断する意味では、マントン1A号墓に認められる銅盃⁽¹⁴³⁾が参考になるであろう。吉開⁽³³⁾将人はドンソン系銅盃の編年を行うに際して華南系銅盃の年代観を基としている。これは華南系銅盃が出土した墓葬の年代観や銅盃の紀年銘資料から年代を決定するものであるが、編年の重要な要素としては双魚文の型式変化を決め手としてい

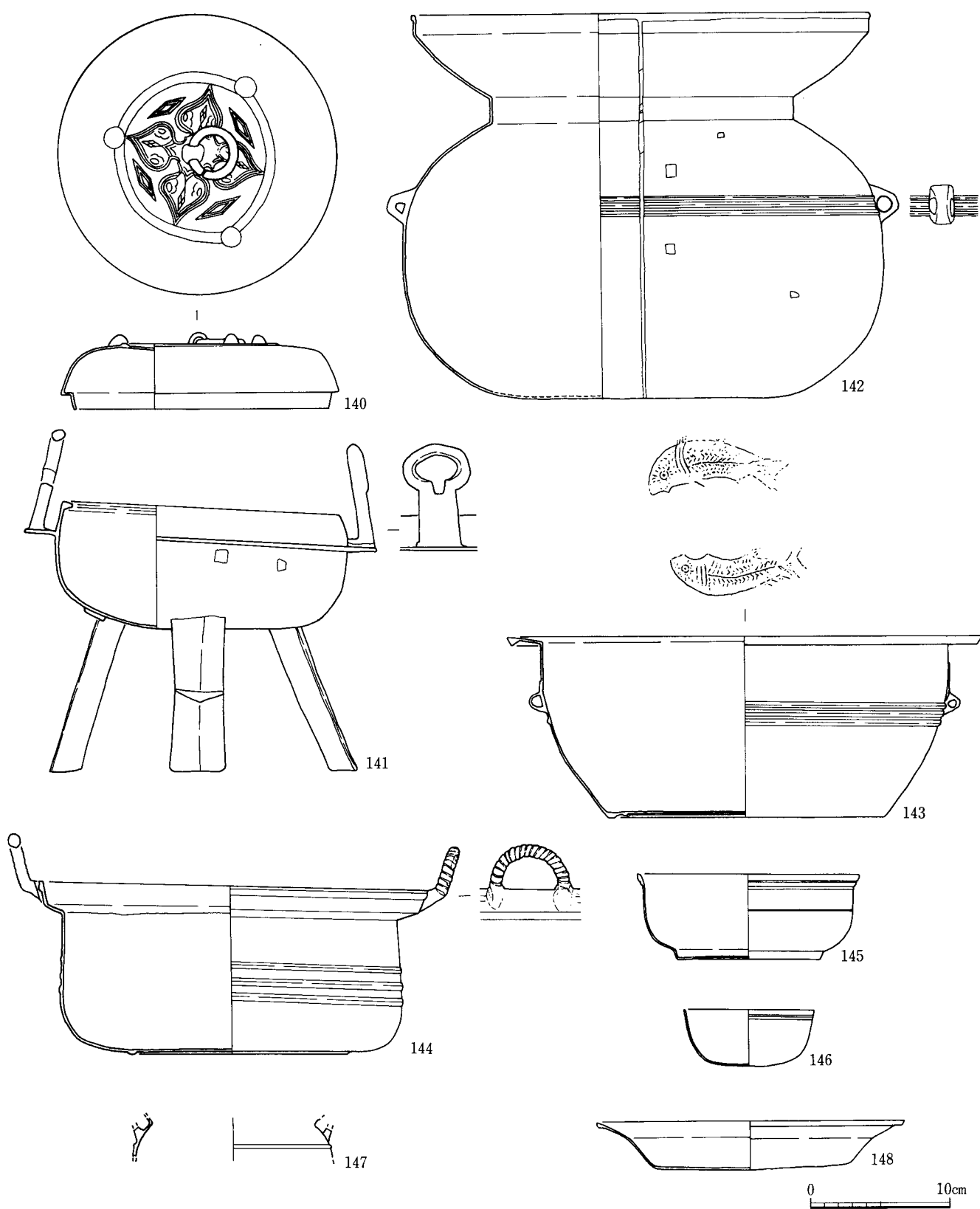


図 26 青銅容器 (140~145 マントン 1 A号墓, 146 マントン 1 B号墓, 147 ビムソン 2 号墓, 148 ビムソン 7 号墓)

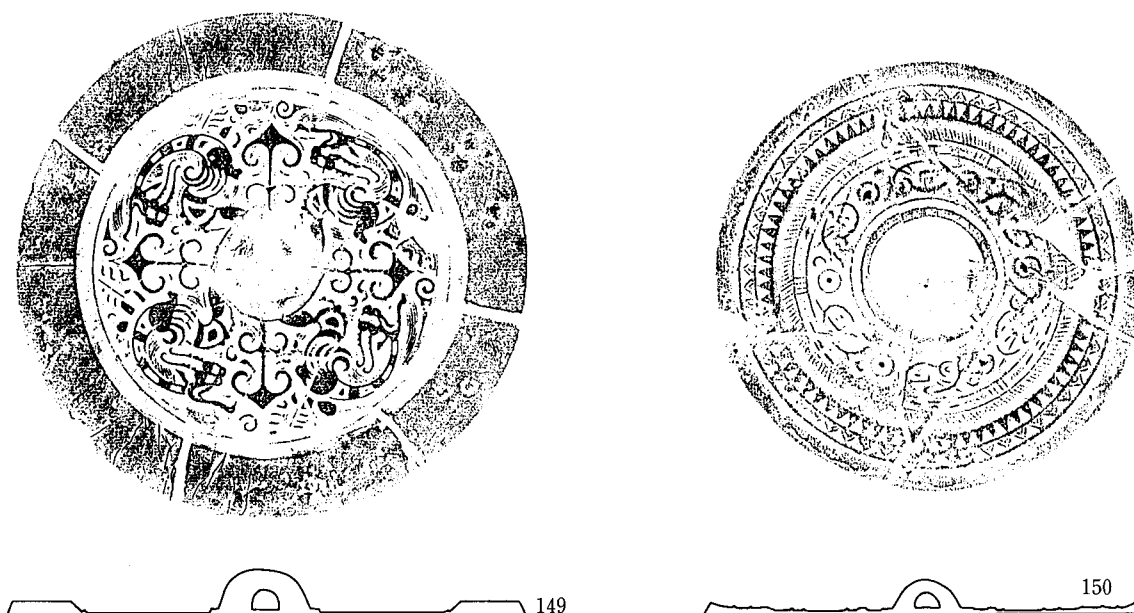


図 27 青銅鏡 (149マントン 1 A号墓, 150マントン 1 B号墓) 縮尺 1/2

る。ここで問題とするマントン 1 A号墓出土の双魚文は、尾鰭が魚の全体に対する割合がそれほど大きくなく、目の表現も単なる円圈だけでなく円圈の中に円点をもって魚眼をより具象的に表現しているものである。こうした文様は丹陽大泊出土銅盃⁽³⁴⁾やベトナムタインホア省バイトゥン出土銅盃⁽³⁵⁾の双魚文の特徴に近いものであり、光和七年 (AD184 年) 銘の銅盃⁽³⁶⁾より古いものであることは間違いないであろう。丹陽大泊では墓室内から永元十三年 (AD101 年) 銘の帯鉤が出土しており、この墓が 2 世紀前葉の墓である可能性は高く、伴出した銅盃もこの時期のものと考えられる。こうした年代観からみれば、マントン 1 A号墓の銅盃も 2 世紀前半から 2 世紀中葉のものであると考えることができよう。そうしてみれば、先の陶器の年代観からマントン 1 A号墓を 150 年よりやや古いと考えたことと矛盾はしない。マントン 1 A号墓からは、鼎や盃の他、鏝 (144)、釜 (142)、碗 (145)、1 B号墓からは碗 (146) が出土している。釜は鑄造時の范の継ぎ目がよく残っており、荒い鑄造過程が見てとれる。また、鼎と同様に多くのスペーサーが認められる。こうした特徴は南中国からベトナムの青銅容器の特徴となっている。問題はこうした青銅器がベトナム北部において製作されたものであるかである。これまで青銅器の銘文において、広東省徳慶県大遼山から「元初五年 (AD118 年) 七月中西于造謝著□」や「元初五年 (AD118 年) 七月中西于李文山治謝著有」⁽³⁷⁾という銘文を持った青銅容器が発見されているが、この銘文で作期者の地名である「西于」はベトナム北部の交趾郡の西于県を意味している。伝世資料である青銅釜にある「漢安二年 (AD143 年) 十月十三日交趾西于作」⁽³⁸⁾も、この釜が製作された場所が「西于」であることを示している。マントン 1 A号墓出土の釜もこの「西于」銘釜と同様に、ベトナム北部の在地産の可能性がある。銅鼎に鐔を有する点が鉞式鼎の中でもベトナム漢墓の特徴と見なしたが、こうした地域的特色も在地産を意味する可能性がある。先のブリュッセル王立美術歴史博物館蔵灰釉陶の銘文も作器者が「李氏」とされ、中国系の名を持つ工人がこうした青銅容器や灰釉陶などの特殊な手工業生産にあたっていた可能性が高いものと思われる。マントン 1 A号墓出土の青銅容器一括遺物も在地産の可能性の高いものであり、こうしたものが 2 世紀前半から中葉の典型的な青銅器の一括遺物であることができよう。

この他、マントン 1 A号墓からは単夔鏡 (図 27-149) が、マントン 1 B号墓からは鳥文鏡 (図 27-

150)が出土している。前者の単夔鏡は、四葉座の間に一匹づつ夔文が同方向に配置されるものであるが、この夔文のデザインはきわめて特異なものである。これと同型式の鏡は今のところ中国内で発見されていないが、この夔文と同じデザインを持つものが湖南省出土鏡の中に認められる。⁽³⁹⁾ 銭文鏡として表示されているもので、夔文の構図はマントン1A鏡と同じであるが、文様の配置デザインや四葉座あるいは銭文の有無などにおいては大きく異なっている。しかし共有する夔文構図の一致は同系統の鏡とすることができよう。銭文鏡の場合出土地点は明確ではないが、湖南省出土鏡であることは確実であろう。この他、洛陽岳家村627号墓出土鏡⁽⁴⁰⁾は、夔文がより単純化した形で描かれており、同系統の鏡とすることができる。岳家村627号墓鏡を除けば、華北から江南にかけてこの系統の鏡は全く認められない。この特殊な主文をもつ系統の鏡が、南中国からベトナム北部にかけて流通しているものと捉えることが妥当であろう。越式鼎と同様に南中国を一带とする経済圏の中で製作されたものと考えることができる。一方、マントン1B号墓出土の鳥文鏡は、同型式の鳥文鏡がドンターク1号墓からも出土している。但し単位文である鳥文は、ドンターク1号墓のものに比べマントン1B号墓のものの方が崩れて、鳥の表現が簡略化されている。これは退化型式として捉えるべきものであり、マントン1B号墓の鳥文鏡の製作年代がドンターク1号墓に比べ新しい段階のものであると考えることができよう。こうした推定は先の副葬陶器の型式的な年代関係とも符合しており、同様な年代差という結論を生み出したことになる。なお、マントン1B号墓の鳥文鏡は岡村秀典の後漢鏡編年で言う細線式獸帯鏡V式に相当し、⁽⁴¹⁾ 2世紀前半に位置づけられており、副葬陶器で検討した年代観と何ら矛盾は存在しない。

マントン1A・1B号墓以外の青銅器としては、ビムソン2号墓出土の鏃斗(図26-147)とビムソン7号墓出土の銅皿(図26-148)が挙げられる。これら銅容器の器種は、マントン1A・1B号墓に認められないものであるが、ビムソン7号墓の銅皿に類似したものは、湖南省資興405号墓⁽⁴²⁾のものが挙げられる。資興405号墓の方が底部近くに段をもっており、型式的に古い形態を示す可能性がある。資興405号墓は年代的に「陽嘉二年(AD133年)」紀年墓314号墓の後漢中期墓より新しい後漢後期墓に編年されている。先の陶器の編年ではビムソン7号墓はAD175年~215年の間に位置づけられたが、銅皿の年代的な位置づけも矛盾は存在しないものと考えられるのである。

この他、マントン1A号墓から鉄戟(図28-151)・鉄刀(同152~154)・鉄鑿(同157)・鉄斧(同158)、ゴックアム1号墓から鉄刀(同155)、ビムソン4号墓から鉄刀子(同156)、ビムソン7号墓から鉄釘(同159)が出土している。ビムソン2号墓から鉛製勺(同160)が出土しているが、これは同じ墓から出土している銅鏃斗と組合わさって用いられるものであろう。また、マントン1B号墓からは紅玉メノウ製の玉(同162)、ビムソン13号墓から石製硯(同161)が出土している。

⑥……………漢墓の墓室構造の変遷

南中国の漢墓では、木槨墓から磚室墓への移行が、およそ紀元後1世紀前葉から中葉、すなわち王莽新の時代に始まるとされている。紀元前111年以後、漢による郡県支配下となったベトナム北部の「漢墓」でも状況は等しく、同時に現象としてドンソン文化の終焉(史実ではチュン姉妹反乱および馬援の鎮圧)と漢六朝より隋唐に至る北属期越漢文化の形成が進んでいく時期でもある。さ

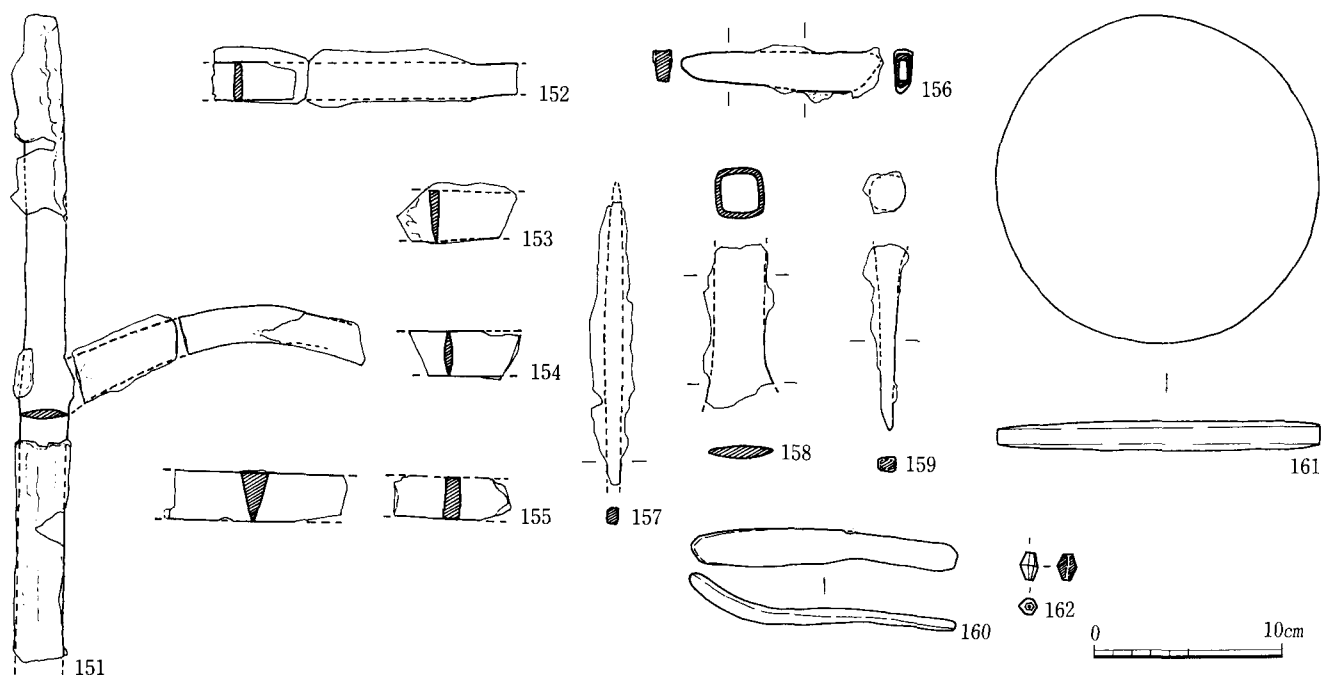


図28 鉄製品 その他 (151～154・157・158 マントン1 A号墓, 155 ゴックアム1号墓, 156 ビムソン4号墓, 159 ビムソン7号墓, 160 ビムソン2号墓, 161 13号墓, 162 マントン1 B号墓)

て、小稿で対象とするヤンセ第3次調査・タインホア漢墓は2・3世紀代の磚室墓であり、したがって前漢木槨（室）墓および併行するドンソン文化その他の資料に関しては扱わない。ここでは紀元後1世紀の漢墓資料を含むヤンセ第1・2次調査資料等も補いながら、ヤンセ第3次調査タインホア漢墓を中心とする墓室の分類と構造的特質およびその変遷についての概略を示してみたい。

まず墓室の分類について簡単に説明を加えておきたい。ヤンセが1935年から1939年の間に発掘した多数の墓群のうち、ここで分類の主な対象とするのはタインホア省内にある磚室墓であり、全長10 m以下の中小型墓を主体とし、多くは天井部をアーチ状の券頂によって構築する比較的単純な構造のものである。したがって紅河デルタ周辺、特にバクニン省、ハバク省で見られるような大型の多室墓（例：パルマンティエ⁽⁴⁴⁾墓）等はこの際分析には含まない。

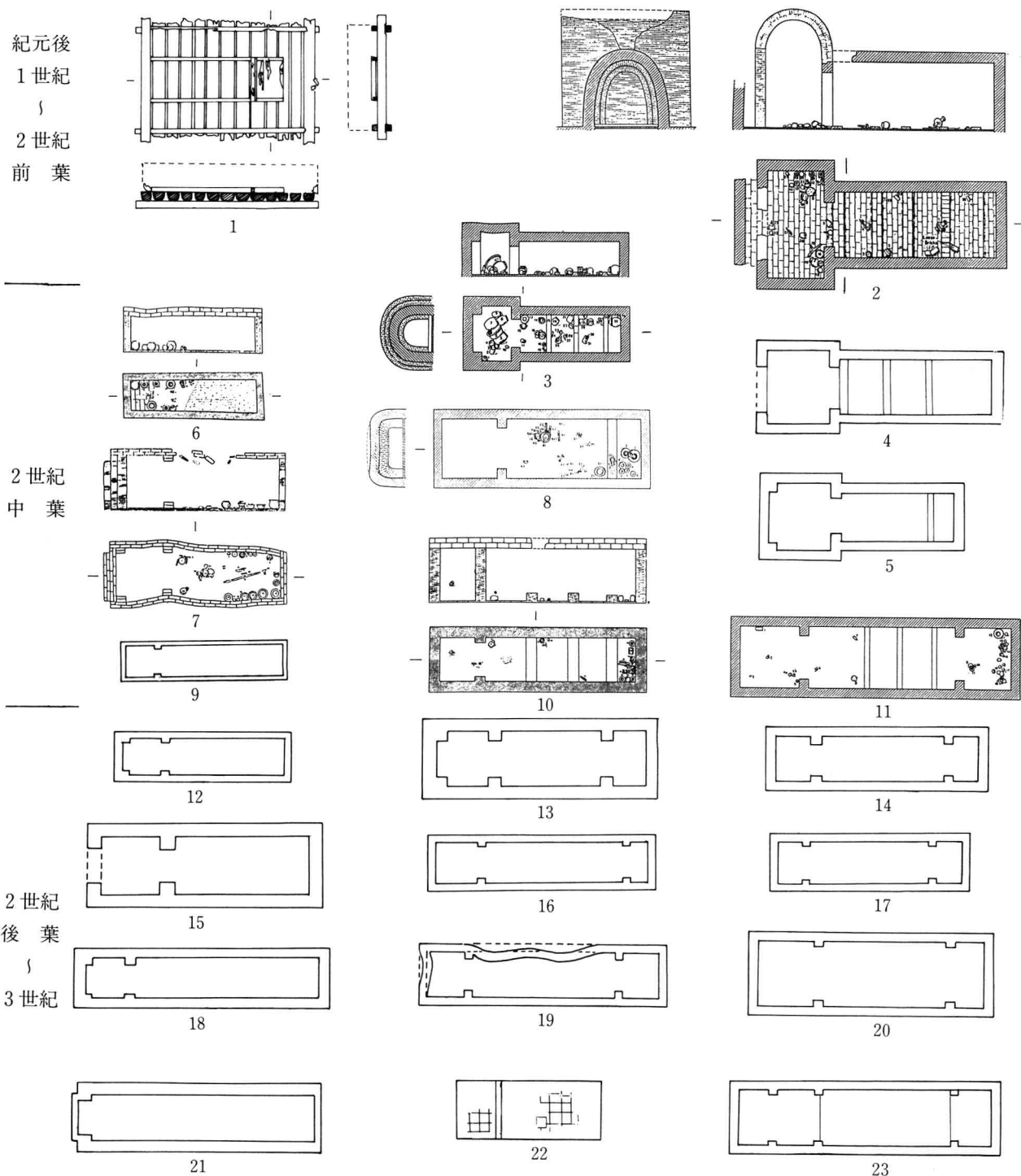
以下、ヤンセ・タインホア漢墓の墓室について第1に外部形態によりおおまかに区分する。

I類：1つの券頂からなり平面は長方形、全体としては蒲鉾形を呈する（単券頂墓：図29-6～21・23）。

II類：大小2つの券頂が主軸上1直線上に重なり、外見上平面は凸字形を呈する（重券頂墓A：図29-3～5）。なお手前の幅広い券頂が前室（前堂）となる。

III類：II類に主室と同じ幅の券頂による羨室部分が付き、外見上平面は中字形となる（重券頂墓B）。第2次調査ビムソン1 A号墓がこれに該当する。

IV類：大小2つの券頂で構成され、後方の券頂に対し前方の券頂は横方向で垂直に交わり、平面状は凸字形を呈する（横直券頂墓A：図29-2）。前方の券頂は比較的高大であり前堂（前室）に相応



Structural formation of the Han tombs in Thanh Hoá province
excavated by Olov Janse H; Huyện (prefecture) T.; Tỉnh (province)

- | | | |
|--|---|-----------------------------------|
| 1. Ngọc Lạc M2 (H. Tứ Kỳ, T. Hải Dương 参考) | 2. Đông Tác 1 (H. Đông Sơn) | 3. Hoà Chung 1B (H. Quảng Xương) |
| 4. Phú Cốc 1 (Thành Phố Thanh Hoá 復元図) | 5. Vực Trung (H. Thọ Xuân 復元図) | 8. Thung Thôn 1B (H. Quảng Xương) |
| 6. Mân Thôn 1B (H. Thọ Xuân) | 7. Mân Thôn 1A (H. Thọ Xuân) | 11. Bim Sơn 1B (H. Hà Trung) |
| 9. Bim Sơn 2 (H. Hà Trung) | 10. Ngọc Am 1 (Yên Biên 5, Quảng Xương) | 14. Bim Sơn 3 (H. Hà Trung) |
| 12. Lạch Trường 15 (H. Hậu Lộc) | 13. Lạch Trường 23 (H. Hậu Lộc) | 17. Bim Sơn 5 (H. Hà Trung 復元図) |
| 15. Liên Hương 3 (H. Hậu Lộc 復元図) | 16. Bim Sơn 4 (H. Hà Trung 復元図) | 20. Bim Sơn 9 (H. Hà Trung 復元図) |
| 18. Lạch Trường 16 (H. Hậu Lộc) | 19. Bim Sơn 7 (H. Hà Trung) | 23. Bim Sơn 10 (H. Hà Trung 復元図) |
| 21. Bim Sơn 12 (H. Hà Trung) | 22. Bim Sơn 15 (H. Hà Trung 復元図) | |

図 29 タインホア漢墓の墓室構造変遷図 (S = 1 : 200)

しい。

V類：IV類に羨室部が付属するもの（横直券頂墓B）。他地域では報告されている（例：バクニン省セッツバゴダ1号墓⁽⁴⁵⁾；広州漢墓5039等⁽⁴⁶⁾）。タインホア省では管見にない。

VI類：ドーム状の窮隆頂を有するもので、1926年パジョが発掘したものをヤンセが聞き取りで報告している（ダイコーイ1号墓）。券頂による羨室，耳室，側室，主室各1が前堂を中心に延び十字形を呈する。この類の大型墓の発掘例はタインホア省では珍しい。

VII類：平面長方形，磚積み の壁体のみで天井部分がなく，平頂の木質天井が想定される（磚槨墓）。ラクチュオン1号墓がこれに該当するが，ドンソンA号墓など単に券頂部破壊のものかどうか判定しがたいものもある。

VIII類：券頂・壁体はなく舗磚のみであり，墓の構造として木質天井や木槨（室）が想定される（舗磚木槨墓：図29-22）。

第2に，ヤンセ・タインホア漢墓の墓室形態の大部分を占める上記I・II・III類を中心に墓室内部の区画からみた基本形態について細分し型式設定を行う。墓室内部の基本形態は大きく分けて，全く区画のない単室墓と，壁体より内側に突出するアーチ状の羨門（内羨門）で区画される複室墓に分けられる。ベトナムの磚室墓を特徴付けているのは，まさにこの方式の多用であり，これによって一見単純な構造の単券頂墓でも，前室，主室，後室というような室内の区画・利用を可能としているのである。入口すなわち墓門と奥壁側にもアーチ状羨門は見られ，外側の封門磚あるいは壁体によって内側に凹面が形成されることがある。

外部形態各類ごとの内部区画との組み合わせを見てみると，I類では単室，2室，3室が一般的で，4室はリエンフオン3号墓のみである。II類（重券頂墓A）は2室，III類（重券頂墓B）は4室である。したがってI・II類について室数との組み合わせにより次のように形式設定する。

I類（単券頂墓）	単室墓：I-1形式（6・21）
	2室墓：I-2形式（7～10・12・15・18）
	3室墓：I-3形式（11・13・14・16・17・19・20）
	4室墓：I-4形式（23）
II類（重券頂墓A）	2室墓：II-2形式（3～5）
III類（重券頂墓B）	4室墓：III-4形式

最後に，墓室床面に設置された「棺台」から2室墓の「後藏槨」そして3室墓の「後藏室」への構造的変化について説明し，上記の各形式の序列化を試みる。

「棺台」は主に棺を置く主室床面に横方向に設置されることが多い。I-1形式ではホアチュンA号墓とダイコーイ2号墓に例があり，中央あるいはやや後方に棺台を並行して2本設置する。またI-2・I-3・I-4形式の場合，第2室すなわち主室に2本あるいは3本並行して設置する。ところでチュントーン1B号墓（図29-8）のような主室後方に1つだけのものは「棺台」として機能しない。これはむしろ奥壁側に副葬品を配置するための区画と考えるべきである（これを「後藏槨」と呼びたい）。また一見「棺台」でも実は「後藏槨」として機能している例もある。ゴックアム

1号墓(同10)を見ると、主室に3本ある「棺台」の3本目は他の2本よりも若干低く、また奥壁との隙間部分に副葬遺物が乱れなく配置されていることが明瞭である。すなわち3本目の「棺台」は「後蔵櫛」を意味する。一方、3室墓(I-3形式)の場合では、「棺台」は第2室(主室)にあって、副葬遺物は第1室、第3室付近に集中し、「棺台」周辺には多く分布しない。第1室を前堂(前室)とするならば第3室は副葬遺物を収納する「後蔵室」である。この状況はIII-4形式においても同様である。

一方、II-2形式に関しては、出現期の磚室墓であり、おそらく平面形のモデルでもあるIV類(同2)での在り方が参考になる。この墓には主室に「棺台」が5本併行して並び、板張りの床の存在をも想定可能である。同時期の南中国の磚室墓においても、木槨(室)墓の形態を踏襲し主室床面が前堂(前室)あるいは墓道床面よりも一段高い位置にあることが一般的である(ただし後漢に入ると木槨墓ですら元来存在した床下の副葬空間の意味は形骸化している)。つまりこの墓の構造では副葬品はすべて現床面よりも上に置かれることとなり、「後蔵櫛」の余地もない。

一方、II-2形式においては異なった様相がみられる。すなわちホアチュン1B号墓(同3)では、遺物の乱れから明らかに「棺台」上の床面に遺物を配置したと見られ、ある意味ドンターク1号墓の様相に近いものの、ヴクチュン墓(同5)の場合、「棺台」の代わりに後方に一本の台(「後蔵櫛」)が設けられている。フーコック1号墓(同4)はこの中間的様相を示しているようにも思える。

ここでの結論を述べると、2室墓において主室に設けられた棺台の一部と奥壁との隙間が、遺物の収蔵スペースとして認識されるようになり、また棺台の意味も徐々に形骸化することによって、後方の台1本によって区画される「後蔵櫛」へと変化し、これが発達することによって最終的に3室墓における「後蔵室」が生まれたと考える。このような仮説に基づくならば墓室形式のおおまかな序列は以下の如く想定できる。

(古)		(新)
I-1 (棺台あり/なし)	→	(遺物により決定) →
I-2 (棺台あり/なし)	→	(遺物により決定) →
I-2 (棺台あり・隙間利用)	→	I-2 (棺台あり・後蔵櫛あり)
		I-3 (棺台あり/なし、後蔵室あり)
		I-4 (棺台なし、羨室・後蔵室あり)
II-2 (棺台あり・後蔵櫛なし)	→	II-2 (棺台なし、後蔵櫛あり)
		III-4 (棺台あり、羨室・後蔵室あり)

木槨墓↓(影響)↑

IV類(棺台あり、後蔵櫛なし)

以上の結果をまとめると、ヤンセ・タインホア漢墓を外部形態からI~VIII類に分類し、さらに内部形態(室数)によってI類(単券頂墓)をI-1~I-4形式、II類(重券頂A)をII-2形式、III類(重券頂B)をIII-4形式と設定した。また、「棺台」に着目することによって磚室墓出現期の「棺台」そのものとしての機能から「後蔵櫛」そして「後蔵室」への変化を読み取り、各形式の型式的序列を想定した。

ここでおおまかな実年代について既に述べられた墓葬の年代観によって述べたい。I~III類はIV

類を出現期（1世紀～2世紀前葉）とすると、棺台を持つⅠ－2・Ⅱ－2形式（2世紀前葉～中葉）、そして後蔵櫛を持つⅠ－2・Ⅱ－2形式、最終的に後蔵室を持つⅠ－3・Ⅰ－4・Ⅲ－4形式（2世紀後葉～3世紀）へと変遷する。ただし単純な構造ゆえⅠ－1・Ⅰ－2形式は出現期から継続して存続するものであり、3室墓や4室墓の関係、特殊な形態であるビムソン15号墓等を含め、具体的な年代の検証・細分は副葬品や磚の分析に委ねる他はない。

ベトナムにおいて発達した「後蔵櫛」「後蔵室」としての機能的構造は他地域にはほとんど例を見ないものである。それは隣接する南中国の同時代の漢墓ですら、一般には副葬品のほとんどが前室（前堂）付近に集中し、耳室や壁龕等を除くと主室（棺室）後方に副葬品を集積したり、特別な施設を設けたりはしない。つきつめると、そうした「北」とは異なる墓室構造が紀元後もベトナムにおいて展開したことが、ドンソン文化以来の社会構造や葬送的伝統に支持されていた可能性は棄てがたく、この点に関しては機会を改めて論じたい。

⑦……………まとめ

墓葬単位の一括遺物の比較から、灰釉壺と灰陶甕を中心に型式学的な変遷を捉え、フーコック1号墓、マントン1A・1B号墓、ゴックアム1号墓、ビムソン2号墓、ビムソン3号墓、ビムソン5号墓、ビムソン7号墓、ビムソン10号墓といった変遷を想定した。さらに建和三年(AD149年)銘灰釉壺、嘉平年(AD172～178年)紀年銘磚墓出土灰釉壺、広州漢墓5080号墓副葬陶器などの型式学的な比較から、これらの漢墓が2世紀中葉から3世紀代にかけてのものであることを考え、この段階の細かい年代観を確立することができた。建和三年銘灰釉壺の型式をマントン1A号墓とゴックアム1号墓の中間に位置づけることができると考え、その中間の年代をAD150年とした。すなわちマントン1A・1B号とゴックアム1号墓を2世紀中葉と考えた。嘉平年銘磚墓出土灰釉壺の型式はゴックアム1号墓とビムソン3号墓の灰釉陶の中間に位置づけできるものとし、この中間点をAD175年と考える。また広州漢墓5080号墓出土の灰釉壺はビムソン10号墓出土灰釉壺に相当するものとする。この墓からは環状乳牛獣鏡が出土しており、この鏡の年代がAD215～240年と考えることから、ビムソン10号墓以前がAD215年以前と考えることができる。すなわちビムソン2号墓～ビムソン7号墓を2世紀第4四半期から3世紀初頭と位置づけることができるであろう。そしてビムソン10号墓を3世紀前葉と位置づけできるのである。さらにフーコック1号墓は2世紀前半と考えられる(表3)。

これらの副葬陶器は共伴する五銖銭の型式変化とも対応しており、その陶器編年の正しさを保証するものとなった。それは、洛陽焼溝漢墓編年の後漢後半期の五銖銭第Ⅲ型式・Ⅳ型式に相当している。かつその型式変化が陶器編年と対応しているとともに、副葬陶器の新しい時期のものには無文の円銭が伴うようになる。この銅銭の変遷は副葬陶器の実年代比定と矛盾するものではない。また実年代比定において、特にマントン1A号墓などで伴出した青銅容器の年代観に拠って傍証できるのである。こうした陶器編年の確立は、ベトナム漢墓の歴史的な位置づけを可能にするであろうし、この時期の不明であった灰釉陶の歴史を探る大きな手がかりとなる。

さて、陶器編年の根拠になった灰釉陶壺の分布をみると、先に示したように東は広州漢墓5080号

表3 タインホア漢墓ヤンセ資料の編年的位置

年 代	墓 葬	歴 史 記 事
		漢が南越国を滅ぼして郡治設置 (BC111年)
AD50年	ゴックラック2号墓	徴姉妹の反乱 (AD40~43年) 馬援將軍の鎮撫 (AD43年)
AD100年	ドンターク1号墓 フーコック1号墓 マントン1A・1B号墓	
AD150年	ゴックアム1号墓	
AD175年	ビムソン2号墓 ビムソン3号墓 ビムソン4号墓 ビムソン5号墓 ビムソン7号墓 ビムソン9号墓	士燮政權 (AD184~226年)
AD215年	ビムソン10号墓 ビムソン12号墓 ビムソン15号墓	呉の支配 (AD226年)

墓に、北は雲南省の下城関北磚室墓や大展屯2号墓に認められた。⁽⁴⁷⁾これは必ずしもすべての陶器が同型式あるいは同様式を示すものではないが、こうした特殊な灰釉陶壺の共通性に何らかの文化的な共通の基盤あるいは情報源の共通性を見いだすことができる。2世紀後葉には交州刺史部における交趾郡・九真郡・合浦郡・南海郡を中心とした士燮政權が漢王朝から独立して成立し、その版図を南中国（嶺南地方）にまで広げている。こうした灰釉陶壺にみられるベトナム北部から南中国までの共通性、さらには青銅容器や青銅鏡におけるこうした地域での共通性は、直ちにこうした政治的な変動と結びつけることは不可能としても、こうした地域を共通とした流通圏あるいは共通のイデオロギーが存在したことを示している。また後漢末期から三国時期にかけては、東アジア全体が統一の時代ではなく分裂ないし地方の時代にある。こうした社会現象を考古資料は物語っている可能性がある。さらにベトナム漢墓から出土する青銅容器には、銘文から在地産の可能性があげられるであろう。今のところ灰釉陶の型式変遷の主体はベトナム漢墓にあり、ベトナム北部から南中国に向けて灰釉陶壺が発信された可能性は高いであろう。ベトナム北部において独自の生産体系が構築されていた可能性が高いのである。また、墓葬構造の変遷で認められたように、2世紀中葉から3世紀にかけて認められる単券頂多室墓と後藏室の組み合わせはベトナム北部で在地的に発達したものである。こうした墓葬構造は墓葬祭祀や葬送観念と関係しており、この地域に固有であったドンソン文化などの系譜も存在した可能性が高いのである。AD43年の馬援による徴姉妹反乱の鎮撫以降、それまでの雒将・雒侯という地域首長による実質統治から、より漢王朝の直接支配が高まった可能性が説かれている。そしてその段階により多くの漢人が移住し、その人たちが磚室墓を営んだと想定されている。⁽⁴⁸⁾定着漢人たちはおそらく土着の豪族層とも結びつき、ベトナム固有の地域性を示す墓室構造が2世紀中葉から3世紀に隆盛する。士燮政權の成立は、ベトナム北部から南中国

の経済圏の確立と、墓室構造や副葬陶器にみられるベトナム固有の地域性の確立がその背景にあることは間違いないであろう。

本稿は、第2節「漢墓出土陶器」と第6節「漢墓の墓室構造の変遷」を俵寛司が担当し、その他すべてを宮本一夫が執筆した。最終的には両者の協議の基に宮本一夫が全体的な文章の調整を行った。ハーバード大学ピーボディー考古民族学博物館での調査を遂行するにあたって、第1節でも述べているように、ハーバード・エンチン研究所の研究助成を頂くことにより、調査を行うことが可能になった。Edward J. Baker 副所長を初めとするハーバード・エンチン研究所に感謝したい。また、ヤンセ第3次調査資料の閲覧を快諾され、さらに調査に便宜を図っていただいたハーバード大学ピーボディー考古民族学博物館 Gloria Polizzotti Greis 女史に深甚の感謝を申し上げたい。その他、ホーチミン市ベトナム歴史博物館 Trần Thị Thanh Đào 女史、Trịnh Thị Hoà 館長、ハノイベトナム歴史博物館 Nguyễn Đình Chiến 氏、ベトナム考古学院 Trịnh Cao Tường 氏、ブリュッセル王立美術歴史博物館 Miriam Lambrecht 女史には、資料調査において大変お世話になった。記して感謝したい。さらに鏡の検討にあたっては樋口隆康先生や上野祥史さんの助言を得た。この他多くの方々から調査やその後の検討にあたって多くの援助を頂いた。ここでその他のご芳名を挙げることを省略するが、こうした方々のご援助に対して感謝申し上げる次第である。

漢とベトナム北部は、対極的に位置する漢と楽浪郡さらには倭という関係を比較考古学的に検討する上で我々日本人研究者にとって必須の研究対象である。これまでベトナム考古学に関する情報自体があまりに限られていた背景には、複雑な国際関係が反映していることは間違いない。しかし本稿で展開した再調査を含めた地道な調査研究こそが、こうした問題に新たな地平を開く可能性が高いであろう。本研究がその第一歩になれば幸いである。なお、ヤンセ第3次資料には、漢墓以外にもドンソン文化やサフィン文化の資料が含まれている。今後こうした資料の検討を含め、漢墓資料との有機的な再検討を図ることにより、ベトナム考古学の進展に何らかの寄与ができることを願うものである。

註

- (1)——Olov R.T. Janse 1947 *Archaeological Research in Indo-china*. Volume I. Harvard-Yenching Institute Monograph Series, Volume VII. Cambridge: Harvard University Press.
Olov R.T. Janse 1951 *Archaeological Research in Indo-china*. Volume II. Harvard-Yenching Institute Monograph Series, Volume X. Cambridge: Harvard University Press.
Olov R.T. Janse 1958 *Archaeological Research in Indo-china*. Volume III. Institut Belge des Hautes Études Chinoises, Bruxelles. Bruges: St-Catherine Press.
以上は第2次大戦後に出版された主にタインホアの

漢墓とドンソン文化に関する本報告である。以下は中間報告であるが、多くの未報告資料（特にサフィン文化やフィリピン関係の資料など）を伺い知る上でも非常に重要である。

- Olov R.T. Janse 1935-1936 Rapport préliminaire d'une mission archéologique en Indochina: après de l'Ecole Française d'Extrême-Orient. *Ruvue des Arts Asiatiques*, tome IX, No 3:144-153, No 4:209-217, tome X, No 1: 42-54.
Olov R.T. Janse 1941 An archaeological expedition to Indo-china and the Philippines: preliminary report. *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Volume 6, Number 2 :247-268. Cambridge:

- Harvard Yenching Institute.
- (2)——前掲註(1) 文献
- (3)——後藤均平 1969「ヤンセ著インドシナの考古調査」『東洋学報』第51巻第5号
- (4)——ベトナム独立後の成果に基く仏領インドシナ考古学への批判的認識およびベトナム史学・考古学と現代政治との関わりについては、以下の文献などを参照していただきたい。
- Nguyễn Phúc Long 1975 *Les nouvelles recherches archéologiques au Việt nam: complément au Việt nam de Louis Bezacier. Art Asiatiques, tome XXXI, numéro spécial. Paris: Annales du Musée de Guimet et du Musée Cernuschi.*
- 宇野公一郎 1993「現代史としての考古学—ベトナム」大林太良(編)『世界を掘る』:138-168 東京:学生社
- (5)——宮本一夫 1999「ハーバード大学ピーボディ考古民族博物館におけるヤンセ資料の調査」『月刊文化財発掘出土情報』206号 1999年7月
- (6)——Janine Schotsmans 1990 Clemant Huet and the origins of the Vietnamese Collection of the Musées Royaux d'Art et d'Histoire, Brussels. Ian and Emily Glover (eds), *Southeast Asian Archaeology 1986*: 241-250. BAR International Series 561. London.
- (7)——俵寛司 2000「ヤンセ『インドシナ考古調査』資料再調査の状況—1999年の動向—」『東南アジア考古学』20号 東京
- また同年9月、ハノイで開催されたベトナム考古学会議においてチャン・チ・タイン・ダオ女史によりホーチミン市ベトナム歴史博物館所蔵のヤンセ資料の概要が報告されている。
- Trần Thị Thanh Đào, Nguyễn Thị Hậu 2000 *Về một sưu tập hiện vật do ở Jansé tìm thấy vào những năm 1935-1939: Những phát hiện mới về khảo cổ học năm 1999*: 236-237. Hà Nội: Nhà xuất bản khoa học xã hội. (チャン・チ・タイン・ダオ, グェン・チ・ハウ 2000「1935-1939年ヤンセ調査報告の遺物コレクションについて」『1999年考古学新発見』:236-237 ハノイ:社会科学出版社)
- (8)——掲註(1) 文献 Janse 1947, 1951
- (9)——Lê Trung 1966 *Những ngôi mộ táng thời thuộc Hán ở Thiệu Dương. Đới Khảo cổ học, Một số báo cáo về khảo cổ học Việt Nam*: 277-328. Hà Nội: Nhà xuất bản khoa học xã hội. (レ・チュン 1966「チュウズオンにおける漢代の墓葬」考古学隊『ベトナム考古学におけるいくつかの報告』:277-328 ハノイ:社会科学出版社)
- (10)——Lê Xuân Diệm 1966 *Báo cáo khai quật mộ quách gỗ ở Ngọc Lặc. Đới Khảo cổ học, Một số báo cáo về khảo cổ học Việt Nam*: 249-276. Hà Nội: Nhà xuất bản khoa học xã hội. (レ・スアン・ディエム 1966「ゴックラック木槨墓発掘報告」考古学隊『ベトナム考古学におけるいくつかの報告』:249-276 ハノイ:社会科学出版社)
- (11)——前掲註(1) 文献 Janse 1951: Fig. 110
- (12)——前掲註(1) 文献 Janse 1951: Plate 17-1
- (13)——前掲註(1) 文献 Janse 1947: Plate 106-a, b
- (14)——前掲註(1) 文献 Janse 1947: Plate 38
- (15)——前掲註(1) 文献 Janse 1947: Plate 144~147
- (16)——前掲註(1) 文献 Janse 1947: Plate 97
- (17)——前掲註(1) 文献 Janse 1947: Plate 124-1
- (18)——Parmentier, Henri 1917 *Anciens tombeaux au Tonkin. Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*, tome XVII No 1: 1-32. Hanoi.
- (19)——Trịnh Cao Tường, Tống Trung Tín, Lê Đình Phụng 1989 *Luy Lâu mùa khai quật 1986. Khảo Cổ Học 1989-4*: 74-86 (チン・カオ・トン, トン・チュン・ティン, レ・ディン・フン 1989「ルイロウ1986年の発掘成果」『考古学』1989-4: 74-86 ハノイ)
- (20)——前掲註(1) 文献 Janse 1947: Plate 113-2
- (21)——前掲註(1) 文献 Janse 1947: Plate 113-2
- (22)——前掲註(1) 文献 Janse 1947: Plate 145-3, f
- (23)——前掲註(1) 文献 Janse 1947: Plate 145-3, g
- (24)——前掲註(6) 文献
- (25)——大理州文物管理所 1997「雲南大理市下関城北東漢紀年墓」『考古』1997年第4期 北京
- (26)——広州市文物管理委員会・広州市博物館1981『広州漢墓』 北京: 文物出版社
- (27)——上野祥史 2000「神獸鏡の作鏡系譜とその盛衰」『史林』83巻4号
- (28)——前掲註(10) 文献
- (29)——前掲註(1) 文献
- (30)——中国科学院考古研究所 1959『洛陽燒溝漢墓』北京: 科学出版社
- (31)——彭信威 1958『中国貨幣史』上海: 上海人民出版社

- 社
- (32)——横倉雅幸・西江清高・小澤正人 1990「所謂「越式鼎」の展開—紀元前1千年紀後半の東南中国—」『考古学雑誌』第76巻第1号
- (33)——吉開将人 1995「ドンソン系銅盃の研究」『考古学雑誌』第80巻第3号
- (34)——鎮江市博物館・丹陽県文化館 1978「江蘇丹陽東漢墓」『考古』1978年第3期 北京
- (35)——前掲註(33) 文献参照
- (36)——容庚 1931『秦漢金文録』5-17
- (37)——広東省博物館 1981「広東省徳慶大遼山発現東漢文物」『考古』1981-4 北京
- (38)——容庚 1931『秦漢金文録』4-15
- (39)——湖南省博物館編 1960『湖南省出土銅鏡図録』北京：文物出版社 付録10
- (40)——洛陽博物館 1988『洛陽出土銅鏡』北京：文物出版社
- (41)——岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集
なお山形真理子はこの鏡を2世紀後半としているが、岡村は前2世紀前半と見なしている。
山形真理子 1997「林邑建国期の考古学的様相—チャキウ遺跡の中国系遺物の問題を中心に—」『東南アジア考古学』17号；山形真理子 1998「林邑国の形成に関する考古学的考察—外来・在地の両要素から考える—」『東南アジア考古学』18号
- (42)——湖南省博物館 1984「湖南資興東漢墓」『考古学報』1984年第1期北京
- (43)——前掲註(1) 文献
- (44)——前掲註(8) 文献およびHenri Parmentier 1918 Le tombeau de Nghi-vê. BEFEO tome XVIII No.10: 1-7.
- (45)——前掲註(10) 文献
- (46)——前掲註(26) 文献
- (47)——大理州文物管理所 1988「雲南大理大展屯二号漢墓」『考古』1988年第5期
- (48)——後藤均平 1969「徴姉妹の反乱」『中国古代史研究』第3
後藤均平 1975『ベトナム救国抗争史—ベトナム・中国・日本』東京：新人物往来社
Henri Maspéro 1918 L'expédition de Ma Yuan. BEFEO, tome XVIII No.3.
Đào Duy Anh 1956 *Cổ sử Việt Nam*. Hà Nội: Trường Đại học Sư phạm. (ダオ・ズイ・アイン 1956「ベトナム古代史」 師範大学：ハノイ)

宮本一夫（九州大学大学院人文科学研究院，国立歴史民俗博物館客員教員）

俵 寛司（ハノイ国家大学ベトナム研究文化間交流センター）

（2001年6月19日受理，2001年9月4日審査終了）

A Re-examination of Han-style Tombs in Vietnam through the Olov Janse Collection (1938-1940)

MIYAMOTO Kazuo, TAWARA Kanji

This study is an examination on the funeral materials of Han Chinese style tombs in Vietnam, of which main parts are from Janse collection as a result of his 3rd Expedition to “Indo-china” (1938-40). According to a comparison of batch of tombs and funeral goods, especially glazed vase and unglazed urn in form, chronological sequences of these tombs were hypothesized as below. They were from Phu Coc1, Man Thon 1A and 1B, Ngoc Am 1, Bim Son 2, Bim Son 3, Bim Son 5, Bim Son 7, and Bim Son 10. Furthermore, comparing an inscribed glazed vase from “Jian He” 3 (建和三年: 149AD) and a glazed vase excavated from a brick tomb inscribed from “Jia Ping” Era (嘉平年: 172-178AD), and a glazed vase from a tomb of “Guang Zhou Han Mu” (広州漢墓) No. 5080, we think that the dating of these tombs is from the first half of second century to the beginning of third century A. D. Moreover, the change in shape and the debasing of “Wu Zhu” (五銖) type Chinese coins that accompanied the funeral goods, and also the dating of bronze mirrors and bronze vessels found mainly from Man Thon 1A and 1B correspond and reaffirm to our chronology.

The similarities of glazed vase from northern Vietnam to southern China and similarities in these regions revealed from bronze vessels and bronze mirrors show that these areas were common goods-distribution sphere and possessed a possible entity like a common ideology. The bronze vessels and glazed vase found from Han style tombs in Vietnam have a high possibility of having been produced by a unique production system in northern Vietnam. Also, as shown by the changes in tomb and funeral structure, the functional combination of Single-Vault with Multi-chamber Type tomb (単券頂複室墓) and rear storage room (後藏室), evident from the middle of the second to the third century, developed locally in northern Vietnam. As we know a famous Chinese historical document “San Guo Zhi” (三国志), in the latter half of the second century, “Si Nhiep” (Shi Xie: 士燮) practically gained political independence from Han Dynasty, his power based on “Giao Chau” (Jiao Zhou: 交州) state in southern China (Lin Nan: 嶺南), especially on “Giao Chi” (Jiao Zhi: 交趾郡), “Cuu Chan” (Jiu Zhen: 九真郡), “He Pu” (合浦郡), “Nam Hai” (Nan Hai: 南海郡) prefectures. It can be thought that the establishment of this political condition was produced by the background for the shared cultural sphere from northern Vietnam to southern China, as well as by the probability of a uniquely Vietnamese regional characteristic seen in the structure of tombs and funeral goods.